

共同研究——尾張聖徳寺資料の研究——

小 渡 青 黒 蒲
島 邊 木 田 池
惠 信 佳 勢
昭 和 馨 世 至

はしがき

本号に「尾張聖徳寺資料の研究」を掲載することになったその経緯を、以下に記しておきたい。

研究対象の聖徳寺は名古屋市中区錦三丁目十一番十三号に所在する真宗大谷派寺院である。もともと当寺の資料調査が行われることになったのは、真宗大谷派名古屋別院の開創三百年を記念して『名古屋別院史』が編纂されることになったことに関連する。本研究所はおなじ宗派の關係学校の付屬研究機関として、『名古屋別院史』史料編の編集を担うことを委嘱された。まず名古屋別院の資料調査から始めたが、その資料のなかに別院開創にあたっての記録を名古屋市内所在寺院の文書から書き写したものがあつた。そこでその文書の所在を確認のため各寺院に赴いて資料調査を行うことになった。名古屋別院は第二次世界大戦の戦禍にあつたが、おなじく調査対象となつた寺院も戦禍にあつてゐた。建物は焼失したが、名古屋別院の資料が戦禍をまぬがれたように、おおくの寺院でそのまま資料が保存されていた。とくに聖徳寺の場合、開創三百年の名古屋別院よりも歴史あるいは量的にも貴重で大量の資料が襲蔵されてゐた。当寺の資料調査は延べ何十日にわたり、また調査員として本研究所の織田顕信所員、蒲池勢至研究員、渡邊信和研究員、青木馨嘱託研究員そして所員の小島恵昭、史料整理協力者として同朋大学卒業生の

手捲公俊、市村孝之、岩田竜英、山下正史の諸氏が調査にあたつた。

なにゆえに名古屋別院に次いで重点的に聖徳寺の調査が行われたかという、元禄三（一六九〇）年に尾張藩二代藩主光友によって名古屋御坊開創が許可される時点において、当寺は尾張藩領の東本願寺派寺院の筆頭格であつたからである。今日では別院と称されるが、それは本山直屬寺院で当時は門末との關係において御坊といい、また幕藩權力との關係において掛（懸）所、兼帶所といつた。近世幕藩体制のもとに本山を中心とする教団組織が整うにつれて、御坊とか掛所といわれた寺院が開創されていつた。御坊・掛所が開創されると、それまでそれぞれの天領・藩領の同宗派寺院を統制支配するため同宗派有力寺院が触頭という職制に任命されていたが、御坊・掛所がこれにかわつてゐた。触頭は本来、支配者との交渉機関であつたので、その任命は各領主によってなされてゐた。さらに触頭は触下の寺院と本山との交渉にも利用されるようになっていき、本山によって任命される触頭もできた。尾張藩の場合、名古屋御坊が開創されるまで、聖徳寺、珉光院、守綱寺の三カ寺が国法・寺法ともに触頭であつたが、その後御坊がこれにかわつた。

聖徳寺はもと尾張国葉栗郡大浦郷にあつた。この地は天正十四（一五八六）年の木曾川大洪水以後、美濃国に編入され、現在は羽島市正木町大浦となつてゐる。寺地は洪水や戦火のためたびたび移転した。寺伝によると、尾張国中島郡荻安賀へ、ふたたび葉栗郡大浦へ、次いで中島郡富田へ、そして美濃国羽栗郡三ツ屋を経て、慶長八（一六〇三）年尾張

国春日井郡清須に移転したという。本願寺から下附された絵像の裏書に記される寺地の所在地も、この寺伝と合致する。慶長十五年名古屋城の築城が始まり、同十七年には城下の検地割が行われ、清須から名古屋への城下町の移転が本格化した。この慶長の清須越の時、当寺は東寺町に転入したが、寛永十五（一六三八）年城下町の中心部の碁盤割内（現在の中区丸の内・錦）の松本町（後に富沢町と改称）に寺地を得た。これがいま名古屋の繁華街となっている現在地である。

聖徳寺は織田信長と斎藤道三の会見場所として著名である。『信長公記』には、天文二十一（一五五二）年織田信長は斎藤道三と、「富田の聖徳寺」で会見し、「富田と申し所は、在家七百間もこれある富貴の所となり。大坂より代坊主を入れ置き、美濃・尾張の判形を取り候て、免許の地なり」と記される。聖徳寺の寺内町富田が形成されていたことを知れる。寺内町は自治組織をもち、領主から自由な商業取り引きを保証されていた。また證如上人（天文二十三年・一五五四歿）の『天文日記』によると、聖徳寺は石山本願寺での齋に常住衆（定住衆・定衆）として相伴した。常住衆は本願寺血縁寺院の一家衆に次ぐ、地方寺院の惣代的地位にあたり、本願寺に常勤していたものらしい。しかし、聖徳寺は長島一向一揆や、石山本願寺の対信長戦には、参加しなかったらしい。聖徳寺宛ての十一月十三日付け信長書状があり、この書状の年は不詳であるが、信長は一向一揆が方々で蜂起したが当寺がこれに加担しなかったことに満足の意をあらわしている。

ことさら聖徳寺が格別の寺院であったことは、幕府から朱印地を拝領していたことである。正保四（一六四七）年当寺は美濃国加茂郡稲口村に朱印地を得て、本寺を移転し、名古屋の寺を兼帯所とした。天正十七（一五八九）年豊臣秀吉朱印状によって美濃国羽栗郡三ツ屋村に寺地を得ることができたが、慶長七（一六〇二）年洪水のため流失した。慶長の朱印地流失以来の当寺歴代住職の替地申請によって、幕府から朱印地を得ることができたのである。また旧地富田に通所淨慶寺をおき、名古屋の聖徳寺寺中（地中）として理相寺のほか、中島郡を中心として末寺四十六ヵ寺があった。

今回、聖徳寺を研究対象とする特集を組むことになったのは、現住小笠原長晴師の寺史編纂のご希望があったからである。当寺の資料調査はいまだ完了していないが、とりあえず史料翻刻の第一回目と法宝物目録稿を掲載し、寺史編纂の基礎研究としたい。本号の報告者は蒲池勢至、渡邊信和の両研究員、青木馨、黒田佳代の両嘱託研究員そして所員の小島である。

なお、当寺がまもなく現在地から移転することを聞き及んでいる。当寺の移転を繰り返してきた歴史からすれば、繁華街となっている現在地から新天地をもとめることも不自然ではない。今後の寺運の発展を期待する。また末尾ながら、資料調査を快諾していただいている現住をはじめ聖徳寺の方々に謝意をあらわすところである。（小島恵昭 記）

目次

はしがき	九
凡例	一〇二
法宝物目録稿	一〇三
図版	一一九
解題	一三五
一 由緒書	一三五
二 聖徳寺小笠原氏系図	一三六
三 惣末寺五尊御裏留	一三八
四 縁起ならびに読縁起	一三九
翻刻	一四四
一 由緒書	一四四
二 聖徳寺小笠原氏系図	一五六
三 惣末寺五尊御裏留	一六七
四 縁起ならびに読縁起	一二一

凡 例

一、ここに収録するものは、当研究所が真宗大谷派「名古屋別院史」編集事業の中で、昭和六一・六二年度に調査した聖徳寺（名古屋市中区錦三丁目十一番三号）所蔵の史・資料である。

一、目録は左記の方針で作成した。

- a 全て調査時の記録に基づいて目録化した。
- b 所蔵されている史・資料は、大別すると掛幅軸装品・冊子装文書・一紙文書・刊本であるが、今回、目録化したものは掛幅軸装品のなかで寺宝物関係、冊子装文書で由緒・縁起関係と本末関係のみである。冊子装文書には、別院関係・触頭関係・寺記録（日記）・宗門改関係・寺社奉行関係・法要関係など大量の文書が蔵されているが、目録化し得なかったことを特に断っておく。一紙文書は未調査のままである。
- c 件名については寺院での名称（呼称）を尊重したが、一部統一した。
- d 法量の単位センチメートルは略した。
- e (一・七)「ス一二」あるいは(四・一四七)「マ三二六七四」、「ネ」とあるのは、調査表と撮影フィルムとの対照番号である。例えば、(一・七)は調査表の分類1番の7頁、「ス一二」はスライドのNo 12

を示す。「マ」はマイクロ、「ネ」はネガフィルムのことである。

一、図版は目録と対応させるため、件名の最後に括弧で目録番号を付した。例えば、1-16とあれば、1掛幅軸装品の一六親鸞聖人御影裏書となる。

一、翻刻史料は未刊のものを原則とし、今回は聖徳寺の寺史に関わる由緒書・縁起類と本末関係の一部にとどめた。また、左記の方針で記した。

- a 漢字は原則として通行体を用いた。
 - b 改行は原態通りではなく、必要と思われるところのみとした。
 - c 原本で判読不能のものは□で示し、墨消は判読した上に二重線を引いて示した。
 - d 用字は「江」「而」「玉フ」「夕」「」などは原態通りとし、「子」は「ネ」に訂した。明らかに誤字と思われるものも、そのままとし、特に注記しなかった。
 - e 「惣末寺五尊御裏留」では、各寺院の最終行下に「一以上〇〇寺」と表記して区切りを明確にした。
- 一、本共同研究は小島恵昭・渡邊信和・蒲池勢至・青木馨・黒田佳世の分担執筆によった。目録および図版は蒲池が担当し、翻刻については解題末尾に担当者名を示した。

法 宝 物 目 録 稿

1 掛幅軸装品

(1) 本尊

(2) 本願寺歴代絵像・絵伝

(3) 本願寺法主等関係法物

(4) 聖教・御伝鈔・御文・書状

(5) 講師

(6) 聖徳寺歴代似影・書状

2 冊子装

(1) 由緒・縁起

(2) 本末関係

1 掛幅軸装品

(1) 本尊

一 方便法身尊像

一幅 絹本着色 八四・五×三三・一 顔部後補
裏書剥落判読不可 箱蓋「弥陀尊像 明
応六年丁酉十月七日／尾州中嶋郡聖徳寺／
蓮如御在判」巻留「火中出现 聖徳寺」

二 方便法身尊像

三 方便法身尊像

四 十字名号

五 十字名号

六 十字名号

七 六字名号

八 六字名号

(一・五) [ス九 一〇]

一幅 絹本着色 八・一×三三・九 実如カ 破
損有 裏書「方便法身尊」(一・六) [ス二五
一〇]

二〇]

一幅 裏書「方便法身尊形／大谷本願寺釈
如(朱角印)／明治三十四年八月三十一日
／尾張国名古屋市／富沢町 聖徳寺／願主
嚴実／寄進人女人講中」(一・六) [未撮影]

一幅 絹本墨書 一〇三・六×三三・六 蓮台付
祖師聖人御筆 上讃十一行有 (一・三) [ス四
一六]

一幅 紙本墨書 九・七×三三・七 箱書「十字
名号 実如上人御筆 聖徳寺」(一・七) [ス三
三]

一幅 紙本墨書 九・七×四〇・三 達如上人筆
(一・三) [ス二七]

一幅 絹本墨書 三六・〇×二六・三 箱蓋貼紙
「六字名号 宗祖聖人」(一・二) [ス二]

一幅 紙本墨書 九・七×三三・九 蓮如筆 卷

留「六字名号 聖徳寺」箱書「六字名号

蓮如上人御筆 聖徳寺」(一・六)「ス二二

九 六字名号

一幅 紙本墨書 罌・九×一八・七 蓮如筆
(一・一〇)「ス二七

一〇 六字名号

一幅 紙本墨書 罌・六×二〇・四 草書 巻留
「六字名号慧燈大師御筆 小笠原聖徳寺什
宝」(一・二)「ス二八

二 六字名号

一幅 紙本墨書 破損有「紙本六字名号
蓮師カ」の付箋あり (一・五八)「ス二七三

三 六字名号

一幅 紙本墨書 二九・三×二三・六 伝蓮如筆
(一・八二)「ス二八四〜二八五

三 見真大師三名号

一幅 絹本墨書 六・一×三・九 箱蓋貼紙
「見真大師三名號」「歸命尽十方無尋光如
来／南无阿弥陀佛／南无不可思議光如来／
愚禿親鸞(花押)裏に朱角印・墨角印
(一・二)「ス二三

四 木仏御免状

一幅 紙本墨書 一八・七×三・四 表「(辞定
印) 釈宣如(花押)」「木仏安置 御免」、
裏「天和二年七月廿七日／A直證寺門徒
／□州宮崎郡柏田町 西祐」(一・四七)「ス
二五 一五六

一五 太子・七高僧像裏書

一幅 紙本墨書 A 五・六×二五・九 B

七九・六×二五・六

一〇四

A

本願寺釈教如(花押)

慶長三戌曆八月七日

三朝高祖真影

尾州中嶋郡聖徳寺

常住物也

B

本願寺釈教如(花押)

慶長三戌曆八月七日

聖徳太子真影

尾州中嶋郡聖徳寺

常住物也

(一・五七)「ス二七二

(2) 本願寺歴代絵像・絵伝

六 親鸞聖人御影裏書

一幅 紙本墨書 三・三×三〇・四

親鸞聖人御影

大谷本願寺釈宣如(花押)
寛永第十五戌期初秋朔日 書之

尾州春日部郡名護屋

聖徳寺常住物也

願主

釈顯隆

(一・四) [ス二五]

一七 実如上人絵像

一幅 絹本着色 六・六×三・六 讚「弘誓強縁多生」以下四行 銘「実如上人」裏書

三 顕如上人絵像裏書

ナシ 銘「顕如上人」裏書別装(一・三)[ス三]

一幅 紙本墨書 五・四×三・一

釈證如(花押)

天文九載_{庚子}九月十六日

実如上人真影

尾州葉栗郡大浦郷

聖徳寺常住物

願主釈了□

(一・五) [ス九一九]

一八 実如上人絵像裏書

一幅 紙本墨書 四・九×三・一 卷留「実如上人御影裏書」

釈證如(花押)

天文九年_{庚子}九月十六日

尾州葉栗郡大浦郷

聖徳寺常住物□

願主釈

(一・五) [ス三]

一九 證如上人絵像

一幅 絹本着色 六・一×三・四 讚・銘ナシ 裏書ナシ (一・三〇) [ス六]

二〇 顕如上人絵像

一幅 絹本着色 六・五×三・三 後補有 讚

法宝物目録稿

(一・四) [ス三]

三 顕如上人絵像

一幅 絹本着色 九・二×四・三 讚「必至無□□□□曉」以下四行(貼込) 銘「本願寺前住釈顕如」(貼込) 裏書 六・五×三・四

文祿三年_{甲申}四月十一日書之

□州嶋下郡溝杭

仏照寺常住物也

願主釈祐恵

(一・四) [ス一〇]

三 教如上人真影

一幅 絹本着色 一〇・六×五・三 讚ナシ 銘「教如上人」裏書はA(二〇・七×五・五) B(三・九×二・七) C(三・〇×二・二) D(一・三・七×

一〇五

七・四と切斷されている

A 本願寺釈宣如(花押)

B 慶長十九^{甲寅}年十一月廿六日

尾州春日部郡名護屋

聖徳寺常住物也

C 教如上人真影 D 願主釈願口

(一・五〇) [ス二五九 一六〇]

二四 教如上人真影

一幅 絹本著色 九・二×四・九 破損甚 讚
ナシ 銘「教如上人」裏書(木版・六〇〇

×二六・二)

本願寺釈宣如(花押)

寛永拾一^{甲戌}期九月八日書之

教如上人真影

聖徳寺門徒尾州中嶋郡

富田村

願主釈浄慶

箱蓋内に「蓮如上人 御免許 明応六年丁酉十月七日在判／尾州中嶋郡聖徳寺一」

(一・四) [ス二五九 一五〇]

二五 宣如上人絵像

一幅 絹本著色 二〇・九×四・五 讚ナシ
銘「宣如上人」裏書

本願寺釈琢如

宣如上人真影

万治元年^{戊戌}陽月廿五日書之

尾州愛智郡名護屋

聖徳寺常住物也

願主釈謙応

三 琢如上人絵像

(一・五三) [ス二五九 一六二]

一幅 絹本著色 一〇・四×四・七 讚ナシ

銘「琢如上人」箱書「職掌琢如様 寅五月八日 聖徳寺 取次栗津右近尉」裏書

本願寺釈常如(花押)

寛文十三年^{癸丑}季夏下浣書之

琢如上人真影

尾州愛智郡名護屋

聖徳寺常住物也

願主釈頼元

(一・五五) [ス二六九 一六三]

三 常如上人絵像

一幅 絹本著色 一〇・七・五×五・四 讚ナシ
銘「常如上人」裏書「釈一如(朱印)／願主永元」(五・五×二・九) (一・五五) [ス二六九 一六四]

三 一如上人絵像

一幅 絹本著色 一〇・八・三×五・〇 讚ナシ
銘「一如上人」箱書「元禄十三年六月九日 職掌一如様 聖徳寺 七里大蔵法眼

元 真如上人絵像

石井隼人」裏書「釈真如（朱印）書／願主永元」(一・五) [ス二二 一六二]

一幅 絹本着色 二〇七・六×四九・六 讃ナシ

銘「真如上人」裏書ナシ 箱書「職掌功

德聚院御影 延享二年五月七日 濃州稲口

村 聖德寺 飼田大膳坪坂主馬」(一・五) [ス

二七一]

三 乗如上人絵像

一幅 絹本着色 二〇八・八×五〇・七 讃ナシ

銘「乗如上人」箱書「職掌歡喜光院御影

寛政十一年九月十七日（貼紙）村聖德寺

下間大藏卿法眼池尾伊織」裏書

歡喜光院真影

濃州加茂郡稲口邨

聖德寺常住物也

願主 顕正

寛政十一年^未初冬六日

三 親鸞聖人絵伝

(一・五) [ス二六 一六八]

四幅 絹本着色 二二九・四×七九・四 (第一幅目)

全二十一段 裏書(第一幅目、八〇・八×二六・三

釈證如(花押)

天文季^庚九月十六日

大谷本願寺親鸞聖人伝絵 尾州葉栗郡大浦郷

聖德寺常住物

願主釈了顕

三 親鸞聖人絵伝

(一・五) [ス五五 一八七]

四幅 絵本板彩色刷 二二〇×二〇・一 御内仏

用「此時明治十八年臘月下浣新調」(一・八〇

[ス二五六一 二六三]

(3) 本願寺法主等関係法物

三 聖德太子・源空聖人連坐絵像

対幅 絹本着色 A 二六・六×二三・〇 B

二八・八×二三・〇 A裏書「右兩幅宝鏡寺宮御筆

号嘉久宮十五歳御染毫也／中御門院御姫宮

元文四未四月廿六日正意律師被 下置始^テ

御筆跡也」B裏書「宝鏡寺宮御筆元文四

未四月廿三日正意律師被 下置也」(一・二七

[ス二五六一 二六三]

三 建長七歳祖師聖人御筆

一幅 紙本墨書 三六・〇×二七・二 「建長七歳

卯乙四月廿三日／愚禿釈善信八十三歳書写

之」(一・三三) [ス二六]

三 祖師聖人筆

一幅 紙本墨書 二五・〇×二五・五 朱点入

「佛道ニイルニハ(以下略)」(一・三三) [ス二六]

三 祖師御名并御裏・添 三幅 紙本 祖師御名、三〇・七×三三・六「親彼本願力」以下四行に「和朝親鸞聖人」と記す 裏書、三三・七×三三・六 紙本「前大僧正一如（朱角印）／柳洞院願主釈頼元」

四 円光大師夢想の御影 一幅 絹本墨画 三三・六×三三・〇 画中、銘「法然聖人」とあり、絵像の下に「大谷本願寺

添状、二六・二×二六・六 七里道専→柳洞院 添状裏書に「享保八癸 十二月八日記之／此之書者從 一如光海上人／開山御名及御讚賜（以下略）」とある（一・〇）【ス三三―二六】

五 六字名号并一枚起請 文 一幅 絹本墨書 三三・七×三三・二 円光大師筆裏に金戒光明寺□□の天福元年二月の極書あり（二・三）【ス二九 九六】

／釈実如（花押）／文龜二年^{成壬}八月九日／依夢想書之／□□とある（二・〇）【ス二〇】

一面 阿弥陀如来線刻 一面 親鸞聖人線刻 一幅 紺絹金字 二四・六×三三・〇 蓮台付 宣如上人御筆 裏書「此剣先名号弘法大師之墨痕 宣如上人被為写／拜受覺成院願證」（二・四）【ス七六】

六 十六羅漢図卷 一幅 紙本着色 縦三・四 横 第一紙四・五 二紙四・〇 三紙四・二 四紙四・九 五紙四・三 六紙四・〇 七紙四・五 八紙四・〇 九紙三・七 奥書「十六羅漢三幅対卷之終／福壽第九癸酉歲葉月中旬図之／梅氏林公菴張子達運故」（二・〇）【ス二一―四四】

一幅 紙本墨書 三三・七×三三・二 円光大師筆裏に金戒光明寺□□の天福元年二月の極書あり（二・三）【ス二九 九六】

一面 親鸞聖人線刻 一幅 紺絹金字 二四・六×三三・〇 蓮台付 宣如上人御筆 裏書「此剣先名号弘法大師之墨痕 宣如上人被為写／拜受覺成院願證」（二・四）【ス七六】

七 十王図 一幅 絹本着色 三三・〇×三三・一 左下隅書「從元祖閑善十六代／法孫頼元律師／五十九歳書之（朱角印）」（二・三）【ス四一―五二】

一幅 絹本着色 三三・五×三三・〇 唐吳道子筆（二・〇）【ス四四】

三 伝鏡御影 一面 親鸞聖人線刻 一幅 紺絹金字 二四・六×三三・〇 蓮台付 宣如上人御筆 裏書「此剣先名号弘法大師之墨痕 宣如上人被為写／拜受覺成院願證」（二・四）【ス七六】

八 十六羅漢図卷 一幅 紙本着色 縦三・四 横 第一紙四・五 二紙四・〇 三紙四・二 四紙四・九 五紙四・三 六紙四・〇 七紙四・五 八紙四・〇 九紙三・七 奥書「十六羅漢三幅対卷之終／福壽第九癸酉歲葉月中旬図之／梅氏林公菴張子達運故」（二・〇）【ス二一―四四】

一幅 紙本墨書 三三・七×三三・二 円光大師筆裏に金戒光明寺□□の天福元年二月の極書あり（二・三）【ス二九 九六】

三 剣先名号 一幅 絹本金泥字 二二・五×三三・五 六字名号蓮台付（二・三）【ス八八】

九 観音画讃 一幅 紙本墨書 四三・四×二二・五 雄誉筆 蓮台付（二・二）【ス二四】

一幅 紙本着色 三三・五×三三・七（二・四）【ス三三―四四】

一幅 絹本着色 三三・五×三三・七（二・四）【ス三三―四四】

十 観音画讃 一幅 紙本墨書 四三・四×二二・五 雄誉筆 蓮台付（二・二）【ス二四】

一幅 紙本着色 三三・五×三三・七（二・四）【ス三三―四四】

四 六字名号 一幅 紙本墨書 四三・四×二二・五 雄誉筆 蓮台付（二・二）【ス二四】

十一 龍虎梅竹 一幅 絹本着色 三三・八×三三・〇 截金（二・二）【ス二五】

一幅 紙本墨書 二七・三×三三・八 宣如上人六才之御筆「龍虎梅竹六才」（表）、「宣如

四 六字名号 一幅 紙本墨書 四三・四×二二・五 雄誉筆 蓮台付（二・二）【ス二四】

十二 龍虎梅竹 一幅 絹本着色 三三・八×三三・〇 截金（二・二）【ス二五】

一幅 紙本墨書 二七・三×三三・八 宣如上人六才之御筆「龍虎梅竹六才」（表）、「宣如

四 釈迦八相図 一幅 絹本着色 三三・五×三三・七（二・四）【ス三三―四四】

十三 龍虎梅竹 一幅 絹本着色 三三・八×三三・〇 截金（二・二）【ス二五】

一幅 紙本墨書 二七・三×三三・八 宣如上人六才之御筆「龍虎梅竹六才」（表）、「宣如

四 善導大師半金色絵像 一幅 絹本着色 三三・八×三三・〇 截金（二・二）【ス二五】

十四 龍虎梅竹 一幅 絹本着色 三三・八×三三・〇 截金（二・二）【ス二五】

一幅 紙本墨書 二七・三×三三・八 宣如上人六才之御筆「龍虎梅竹六才」（表）、「宣如

一幅 絹本着色 三三・八×三三・〇 截金（二・二）【ス二五】

十五 龍虎梅竹 一幅 絹本着色 三三・八×三三・〇 截金（二・二）【ス二五】

一幅 紙本墨書 二七・三×三三・八 宣如上人六才之御筆「龍虎梅竹六才」（表）、「宣如

上人六才 之御筆／享保四^亥二月十二日

(花押)／常住物也／聖徳寺願秀(二四・五三)

〔ス三三 二六〕

五 漢詩七言絶句

一幅 紙本墨書 三・六×四・四 卷留「常如

上人御筆跡／拝領柳洞院」(三・四三)〔未〕

三 馬上仙人画

一幅 絹本墨書 三・八×五・八 常如上人筆

朱印有 (二・三) 〔ス四四〕

五 嚴如上和歌「松間

鷺」

一幅 短冊一枚 三・二×六・〇 (二四・五三) 〔ス

五 嚴如上人・靈芝之図

一幅 紙本着色 三・一×五・六 (四・五四) 〔ス

三三〕

五 A 大経之語

B 般舟賛之語

二幅対 A 紙本墨書 二・三・五×二・九・七 嚴

如上人直毫 B 紙本墨書 二・三・四×二・九・七

五 句仏上人桔梗画賛

現如上人直毫 (二四・五九) 〔ス八三 八四〕

一幅 絹本着色 二・七・三×三・八 (二四・五七) 〔ス

五 新六歌仙

折本一帖 一・八〇×二・六・八 恵明院如晴筆 包

紙「常州水戸願入寺／恵明院如晴御筆也歌

仙／右ハ当寺二十代成善院殿筆大切ニ所持

(朱筆) 可申事 二十二代願正書(二・七・六) 〔ス三三 三三三〕

五 興正寺門跡撰信上人

和歌

一幅 紙本墨書 三・一×四・八 「辛未の夏

五 詠松七律賀詩

一幅 紙本墨書 二・七・三×四・九 摂光院大

谷勝尊殿画幅 (二四・五三) 〔ス七〕

(4) 聖教・御伝鈔・御文・書状

六 御経断簡

一幅 三・六×三・九 白紙 墨界線 朱点入

(二四・六四) 〔ス三六〕

六 聖教切

一幅 紙本墨書 二・五・八×八・七 覚如上人筆

朱点入 ヘラ界線入 「十方衆ノナカニ浄

土教ヲ信ウスル機アリ」以下四行 (二・三)

〔ス四一〕

三 聖教切

一幅 紙本墨書 二・五・三×八・二 覚如上人筆

朱点入 「浄土ノ宗儀ヲマフシタテハンヘ

リキ・コレ」以下四行 裏に聖徳寺願儀の

宝暦四年二月十二日の極書あり (二・三)

〔ス四二 一〇三〕

三 和讃切

一幅 紙本墨書 三・四×三・八 朱訓有

「源空在世ノソノトキニ／金色ノ光明ハナ

タシム／兼実博隆マノアタリ／拝見セシメ

タマヒケリ」〔已上源空大師／正月廿五日

御入滅／已上高僧和讃一百一十七首也〕

(二・三) 〔ス三三〕

六 和讃切

一幅 紙本墨書 二・五・九×三・四 朱訓入

空 法然上人法語

「承久ノ太上法王ハ／本師源空ヲ歸命シキ
／釈門儒林ミナトモニ／ヒトシク真宗ヲサ
トリケリ」(六・二×三・四)「建長六歲甲寅愚
禿ノ八十二歳書之」(六・三×三・四)安永十年
春正月、伊藤九良右衛門満仙讓狀一通有り
端坊切極書二通有り(一・三)「ス五」

一幅 紙本墨書 二五・三×五・〇、二五・三×三・三
覚如上人筆「モノニナリテ本願力ヲ信シ名
号ヲ称スル(以下略)釈覺如八十歳」(二・三)
「ス六」

空 御伝鈔

空 御文

粘葉綴二冊 二五・三×二六・五 朱別筆書入有
鳥の子紙 上一五丁、下一三丁 賢成院顕澄
筆 原装表紙 享保四年修理(三・四)「ネ」
袋綴五帖 二六・七×一九・〇 常如証判 ①②③④
五③④⑤⑥⑦⑧ 朱点入「延宝五極月
三日ノ柳洞院ノ律師頼元(花押)」(三・八)
「マ三五四一三五八」

空 御文

空 御文

吉 御文四通

袋綴四帖 二六・四×三〇・九 実如証判 ①②③④
三③④⑤⑥⑦⑧ 丁(二・八五)「マ三五五」
卷子装一卷 二六・二×一六・〇(一紙) 六紙
実如証判 極書一紙有(三・八六)「マ三五五九」
卷子装一卷 縦二四・五 八紙(三・八七)「マ

七 御文・御俗姓

三 実如上人御真筆

三 教如書狀

三 宣如上人書狀一通

三 宣如上人書狀一通

三 宣如上人書狀一通

三 宣如上人書狀一通

三 九条幸家・宣如筆跡

三〇

卷子装一卷 縦二四・六 三紙 別筆朱書入有
卷末に朱「実如上人真筆也」とある(三・八六)

「マ三五六」

一幅 紙本墨書 二四・八×三・三「アリト
キ、南无阿弥陀佛ニアヒ(以下略)閏三月
二日・親鸞」(二・三三)「ス六」

卷子装一卷 一七・七×六・八 七月十八日付
尾州・三州一家衆中宛(三・八六)「マ」

一幅 紙本墨書 二五・三×四・二 卷留「宣如
上人御狀」(三・四四)「ネ」

一幅 紙本墨書 二六・七×四・二 堅紙 卷留
「宣如上人書翰」(二・三三)「ネ」

一幅 紙本墨書 二九・八×四・〇 折狀 四月
八日左近宛(三・四三)「ネ」

一幅 紙本墨書 二五・六×三・三 折狀改装
六月廿三日付聖徳寺宛(三・四四)「ネ」

一幅 紙本墨書 二九・〇×三・三 卷留「一紙
兩筆」極書「一紙兩筆ノ前撰政関白九條幸

家卿真筆ノ宣如上人御真筆ノ拜三見之」
頼元ノ尾陽七宝山聖徳寺 永義ノ什物也

誌」(三・四三)「ネ」

ㄉ 琢如上人書狀一通

一幅 紙本墨書 三〇・八×四四・四 折狀 七月

ㄊ 琢如上人書狀一通

廿日惠淨院宛 (三・四六) [ネ]
一幅 紙本墨書 三・二×四六・八 折狀 卯月
六日 (三・四六) [ネ]

ㄊ 達如上人御消息

飯袋綴一冊 二五・〇×二七・〇 七丁 寛政十一年八月廿六日 (五・二〇三) [マ三三七三]

ㄊ 嚴如上人消息

卷子裝一卷 三〇・五 七紙継 水晶軸 文久三年十一月十六日 (三・五二四) [ネ]

(5) 講 師

ㄊ 香嚴院兼遍筆茶詞

一幅 紙本墨書 五五・〇×二六・五 (四・五六〇) [ス五]

ㄊ 香月院深勵一行書

一幅 紙本墨書 二六・〇×三九・五 白揚早落
寒竹 (二・四・五五) [ス五]

ㄊ 円乘院宣明講師書詩

一幅 紙本墨書 一三・五×二九・五 (四・五五四) [ス五〇]

ㄊ 雲華院大含講師一行

一幅 紙本墨書 三九・三×三九・五 七宝樹林
安樂国 (二・四・五六) [ス五]

ㄊ 雲華院大含講師蘭之

一幅 紙本墨書 二七・一×三三・六 (四・五九) [ス五]

ㄊ 皆違院宣成二行之

一幅 紙本墨書 二二・〇×二六・五 (四・五九) [ス五]

書・A

ㄊ 皆違院宣成講師二行

一幅 紙本墨書 一四・三×二六・七 (四・五六) [ス五]

書・B

一蓮院秀存講師一行

一幅 紙本墨書 三四・七×三九・五 (四・五五) [ス五]

ㄊ 住田智見講師一行書

一幅 紙本墨書 二三・〇×三三・五 卷留「一行之書／長生不老之神方／第二十五世 大寂院八十歳賀筵／住田智見講師之筆」 (四・五七〇) [ス五]

賀一行

一幅 紙本墨書 三〇・七×三三・八 明治 (四・五五七) [ス五]

ㄊ 一等學師龍湯筆還曆

一幅 紙本墨書 三〇・七×三三・八 明治 (四・五五七) [ス五]

(6) 聖徳寺歴代似影・書狀

ㄊ 連座像

双幅 紙本着色 A 一〇・三六×五・三 六

ㄊ 體連座

卷留「頭好様」久遠院迄双幅御影」B 九・三×五・六 六体連座 卷留双幅御影 從成善院殿至大寂院殿」(一・六七) [ス

ㄊ 頭好似影

一幅 絹本着色 九・六×三六・八 卷留「第十四世頭好殿」(一・五九) [ス一七四]

ㄊ 頭好似影裏書

一幅 紙本墨書 六・四×二九・五

釈宣如(花押)

寛永十五^{戊寅}歲夷則五月

釈願好之影

願主

聖徳寺釈願證

(一・三七) [ス100]

法名記

一幅 紙本墨書 一九〇×九・六

法名

聖徳寺釈願好

願慈院釈尼空誓

寛永十五年正月廿六日

釈琢如(花押)

(一・四六) [ス115]

覚成院釈願澄似影

一幅 絹本着色 九五・五×三九・八 卷留「第拾

五世覚成院殿」(一・六〇) [ス115]

柳洞院似影

一幅 絹本着色 九八・七×四二・六 裏書(六・〇

×三〇・三)「柳洞院之三字者/无导光院一如

大和尚御筆也」卷留「十六世柳洞院御影」

(一・六九) [ス115]

開声院似影

一幅 絹本着色 九五・五×三九・九 卷留「第拾

七世開聲院殿」(一・六二) [ス116]

境智院永元似影

一幅 絹本着色 九八・〇×三九・八 (一・七〇) [ス116]

久遠院釈願栄似影

一幅 絹本着色 九五・五×三九・八 卷留「第十

九世久遠院殿」(一・六三) [ス117]

一幅 紙本着色 一〇三・三×三九・九 当寺二十

代 (四・五四) [ス117]

一幅 絹本着色 九八・四×四三・二 (一・七一) [ス

一七 一八]

一幅 絹本着色 九七・九×四三・三 (一・七四) [ス

一九四]

一幅 九八・四×四三・四 裏書「釈願正影/釈達

如(朱角印)/弘化三年丙午十月廿五日/

願主/聖徳寺願闡」(一・七六) [ス116 一九七]

一幅 絹本着色 九八・五×四三・三 裏書「釈願

実影/釈達如(朱角印)/弘化二年丙午十

月廿五日/願主聖徳寺願闡」(一・七七) [ス

一八九一九]

一幅 絹本着色 八八・五×三九・九 二十四世

(四・五三) [ス113]

一幅 絹本着色 九三・三×四二・七 第二十四世

(一・六五) [ス118]

一幅 絹本着色 九八・二×四三・一 裏書「釈願

正影/釋現如(朱印)/明治廿六年癸巳一

月廿九日/願主/聖徳寺願闡」(一・七九) [ス

一九二一九]

二一〇 大寂院似影

一幅 絹本着色 一〇三・四×三四・〇 (四・五四)
[ス三九]

二二 顯慈院空誓禪尼似影

一幅 絹本着色 A、三〇・一×三〇・七 B、
六・二×五・四 絵像上部に法名記を貼る A
(法名記)「法名／顯慈院空誓／承応三季
仲春九日／釈宣如(朱印)」 B(絵像)、讀・
銘ナシ (二・六六) [ス二二〇]

二三 功德聚院真影裏書

一幅 紙本墨書 九・五×三・五 「功德聚院
真影／大谷本願寺釈從如(角朱印)／延享
二_五歲五月十五日／濃州賀茂郡稲口村聖德
寺什物也／願主 顯儀」(一・四四) [ス二〇五]
一幅 九・三×四・三 (一・七五) [ス二一五]
一幅 絹本着色 七・四×四・四 上部に色紙
有 (四・五三) [ス二四]

二五 洗心院似影

一幅 絹本着色 二二・〇×四・八 上部に色
紙有 (四・五四) [ス三八]

二六 法証院似影

一幅 絹本着色 八・一×三・三 (四・五四)
[ス四]

二七 歴代似影 A

一幅 絹本着色 六・九×三・〇 「稲口院殿
真像」の箱に入る (四・五四) [ス三]

二八 歴代似影 B

一幅 絹本着色 八・四×三・八 「文珠菩薩
像」の箱に入る (四・五四) [ス三六]

二九 柳洞院律師頼元書状

卷子装一卷 二七・六×四・三 (五・三七) [マ]

三〇 柳洞院宛源慶院書状

一幅 紙本墨書 二〇・三 浣月十五日付 裏
に元文元年の法橋顯儀極書有 (四・五三六)

三一 当山顯正筆

一幅 紙本墨書 九・〇×三・五 (四・六二)
[ス三三]

三二 威光院殿四季雜和歌

一幅 紙本墨書 九・六×三・一 短冊五枚
(四・五三七) [ス三〇]

三三 大寂院殿懷紙

一幅 紙本墨書 三・六×四・五 卷留「大寂
院殿懷紙 初春氷歌」(四・五七) [ス三]

三四 高昭院釈尼秀詠真筆

一幅 紙本墨書 三・七×四・〇 裏書「濃州
表佐宝光寺／高昭院釈尼秀詠真筆／天明七
丁九月表具之／聖德寺顯正什物」(四・五二) [ス三六]

2 冊子装

(1) 由緒・縁起

一 当寺歴代記

仮袋綴一冊 二五・〇×二・五 一七丁 「宝曆
六年子二月」(四・一五六) [マ三六六]

二 聖德寺系図(小笠原
系図)

卷子装一卷 縦三・九 文政七年まで (三・
六三) [マ三五五]

三 由緒書上留帳

仮袋綴一冊 二九・〇×二・〇 一七丁 「元禄

七年甲戌六月」(四・三四) [マ三六三]	二五 宝物目録	卷子装一卷 縦三・〇(五・三六) [マ]
四 由緒書	二六 尾陽名護屋聖徳寺内 什物	袋綴一冊 二四・三×七・一 六一丁 途中遊紙 四四丁有「享保」(二〇・三七) [マ三九二] 元三三]
五 当寺由緒書写	二七 御末寺并御旦方廻 ^{ニ付}	飯袋綴一冊 三六・六×三・五 五丁 判取帳
六 当寺由緒略記	御宝物目録	申九月 (三・五二) [ネ]
七 御由緒書他	二八 御宝物目録并御道具 記	飯袋綴一冊 三六・八×三・五 七丁 判取帳
八 当寺由緒之寛	二九 宝物目次	丙九月 (三・五三) [ネ]
九 由緒書	三〇 什物品目記	飯袋綴一冊 四・六×二・五〇 五丁 墨朱別筆 書入有 判取帳 文政十三寅年閏三月・天 保七申八 (三・五〇四) [ネ]
一〇 拙寺宝物之内七宝・ 由緒書等	三一 濃州大浦邑聖徳寺系 譜・聖徳寺中興頼元 律師伝	飯袋綴一冊 三六・八×三・三 七丁 判取帳 (三・五〇) [ネ]
一一 拙寺宝物之七宝・由 緒書	三二 七宝山聖徳寺縁起	卷子装一卷 縦二・六 金欄装、草木下絵紙 (三・九四) [マ三五六]
一二 聖徳寺記録扣	三三 七宝山縁起	卷子装一卷 「聖徳寺法橋頭儀ノ于享保二 十乙卯記暮秋二鳥写之」 [マ三六五]
一三 聖徳寺住持諸例	三四 七宝山聖徳寺縁起	卷子装一卷 「文化八年辛未六月四日」 [マ三六三]
一四 御寺法由緒書下書		

二五 七宝山聖德寺緣起 卷子裝一卷 縦〇・八 金欄裝「嘉永五年

壬子閏二月写之」(二・九)【マ三六四】

二六 七宝山緣起 二紙卷 縦三・三 (七・三三)【マ三六四】

二七 鏡御影緣起 縦三・七 (七・三三)【マ三六九】

二八 鏡御影緣起 四紙卷 縦三・二 (七・三〇)【マ三六九】

二九 劍先名号緣起 三紙卷 縦二・五 (七・三三)【マ三六三】

三〇 劍先名号緣起 一紙卷 縦二・五 (三・五三)【ネ】

三一 劍先名号緣起 卷子裝一卷 縦二・七 (三・二六)【マ三五四】

三二 三骨緣起 卷子裝一卷 縦二・八 (三・二六)【マ三五四】

三三 三骨緣起 一紙卷 縦二・五 朱入 (三・五三)【ネ】

三四 略緣起(二種骨略緣起) 三紙卷 縦二・九 (七・三〇)【マ三六八】

三五 赤梅檀弥陀尊形一軀 卷子裝一卷 縦五・一 赤地菊唐草模様

造立緣起 (七・三三)【マ三八五】

三六 赤梅檀尊像略緣起 二紙卷 縦二・三 (七・三三)【マ三六四】

三七 赤梅檀阿弥陀如来像 卷子裝一卷 縦二・五 (三・二六)【マ三五四】

三八 赤梅檀阿弥陀如来像 一紙卷 縦二・〇 朱入 (三・五三)【ネ】

三九 二河白道図說 卷子裝一卷 縦三・五 寛文八年五月朔日

頼元書 (七・三〇)【マ三六三】

四〇 二河白道図緣起 一紙卷 縦三・一 (三・五三)【ネ】

四一 二河白道図緣起 卷子裝一卷 縦二・三 (三・二六)【マ三五四】

四二 聖德太子木像緣起 卷子裝一卷 縦二・六 (三・二六)【マ三五四】

四三 聖德太子木像緣起(校訂本) 一紙卷 縦二・五 朱入 (三・五三)【ネ】

四四 善導大師半金色繪像 縦二・四 (七・三三)【マ三六四】

緣起

四五 善導大師半金色繪像 二・五紙卷 縦二・〇 (三・五三)【ネ】

緣起(校訂本)

四六 善導大師半金色繪像 卷子裝一卷 縦二・一 (三・二六)【マ三五四】

緣起

四七 善導大師半金色緣起 縦二・〇 (七・三三)【マ三六四】

(外題)

四八 善導大師半金色緣起 一紙卷 縦二・四 (七・三三)【マ三八八】

(外題)

四九 善導大師半金色繪像 卷子裝一卷 縦二・六 (三・二六)【マ三五四】

緣起

五〇 火中出現阿弥陀如来 一紙卷 縦二・四 (七・三三)【マ三八六】 繪像

緣起

五一 蓮如筆阿弥陀如来繪 卷子裝一卷 縦二・〇 (三・二六)【マ三五四】

像緣起

五二 阿弥陀如来像緣起 二紙卷 縦二・九 (七・三三)【マ三八七】

五三 祖師聖人御遺骨緣起 一紙卷界紙 縦二・一 紙桃色、金粉散らし

(外題) (七・三三)【マ三八〇】

- Ⅵ 親鸞木像縁起 卷子装一卷 縦四・六 (三・九) [マ三六]
- Ⅴ 親鸞頂骨・親鸞木像・宣如頂骨縁起 一紙巻 縦三・六 「弘化二己巳弥生仲旬第五日」(七・三三) [マ三六七]
- Ⅳ 親鸞木像縁起 一紙巻 (七・三三) [マ三六三]
- Ⅲ 濃州賀茂郡稲口村観音堂縁起 卷子装一卷 毛・一 紺刷毛目 「寛文式年壬寅霜月十八日」、頼元 (七・三三) [マ三六四]
- Ⅱ 濃州賀茂郡稲口村観音堂縁起 二紙巻 縦五・〇 (七・三三) [マ三六四]
- Ⅰ 濃州賀茂郡稲口村観音堂縁起 二紙巻 縦三・八 (三・五三) [ネ]
- Ⅶ 観音菩薩金銅像縁起 卷子装一卷 縦三・〇 (三・九) [マ三五四]
- (2) 本末関係
- Ⅱ 尾州八郡東本願寺派寄帳 袋綴一冊 二六・八×三・五 七九丁 別筆墨書入有 (四・三七) [マ三六八 三六九]
- Ⅲ 尾州領御末寺寺号帳 飯袋綴一冊 二四・四×六・六 七五丁 別筆朱書入有 (四・三六) [マ三五〇]
- Ⅳ 尾張領御末寺寺号帳 袋綴一冊 二三・七×二六・五 七五丁 (一・〇・三三) [マ三六〇 三六〇]
- Ⅴ 尾陽諸寺院上下 飯袋綴二冊 二三・八×二六・六 上九三丁・下七六丁 別筆墨書入有 (四・三五) [マ三五五 三五五]
- Ⅵ 惣末寺御裏 飯袋綴一冊 二六・三×二〇・九 一〇丁 「享保
- 第十四記己酉／季春初六日」「二十世顯周永儀誌」(二・六・九〇) [ネ] (四・三三) [マ三六五]
- 飯袋綴一冊 二五・二×二六・八 一二五丁 朱別筆書入有 朱「当寺二十二代」「文化九年九月より追々末寺巡回御裏改」(二・六・九四) [ネ] (四・三三) [マ三六五 三六六]
- 飯袋綴一冊 二五・〇×二七・〇 三五丁 「文化十一年戌四月」(四・一四〇) [マ三六五 三六五]
- (二・六・九三) [ネ]
- Ⅶ 聖徳寺末寺歴代書上 飯袋綴一冊 二〇・〇×三・〇 「文化十一年戌八月提出」(四・一三五) [マ三六〇 三六〇]
- 飯袋綴一冊 二五・五×二七・五 「文政五年午九月提出」(四・一四四) [マ三六五 三六五]
- 飯袋綴一冊 二五・三×二七・三 八〇丁 「文政十亥」(四・一三三) [マ三六七]
- Ⅷ 御末寺中御裏記 飯袋綴一冊 二五・三×二七・五 七八丁 墨別筆書入有、表に天保十三から天保十五、表紙裏に嘉永五年の年記あり (二・六・九六) [ネ]
- 飯袋綴一冊 二六・五×二〇・〇 四六丁 「元禄四年三月五日」(四・一三七) [マ三六四] (二・六・九三) [ネ]
- 飯袋綴一冊 二六・〇×二〇・二 四五丁 「元禄四年三月日」(四・一三八) [マ三六四] (二・六・九三) [ネ]
- Ⅷ 惣末寺衆中諸事留帳 飯袋綴一冊 二六・〇×二〇・二 四五丁 「元禄四年三月日」(四・一三八) [マ三六四] (二・六・九三) [ネ]

㊦ 末寺廻行事附

仮袋綴一冊 二四・二×七・〇 一三丁 元禄四年三月日 裏表紙に「顯□」「愛通」「秀行」の三名花押あり (一六・九三)【ネ】(四・四〇)【マ三六七】

㊦ 末寺廻文順達帳
㊦ 惣末寺諸事留

㊧ 惣末寺中次第

仮袋綴一冊 二七・四×二〇・〇 一〇丁 表に「元禄四年／惣末寺中次第／并国付郡付村付領主付并名古屋惣坊主衆次第」(一六・九三)【ネ】(四・三六)【マ三六三】
仮袋綴一冊 二四・二×七・二 二〇丁 墨別筆書入有 永儀 享保四年二月廿九日 (一六・九四)【ネ】(四・四九)【マ三七六】

㊨ 末寺廻日記

㊨ 惣末寺諸事留帳
㊨ 惣末寺諸事留帳

㊩ 末寺廻リ諸事日記上

仮袋綴二冊 三三・六×六・七 四九丁 三三丁 享保四年三月から五月十三日 (一六・九三)【ネ】
仮袋綴一冊 三三・七×七・〇 一五丁 享保四年己亥三月朔日 (一六・九三)【ネ】(四・四二)【マ三六六】

㊪ 末寺廻諸事拂帳

㊪ 惣末寺諸事留帳

㊫ 濃州筋末寺廻リ諸事

日記・上巻

仮袋綴一冊 三三・七×六・七 三三丁 「享保四年亥三月」(四・四七)【マ三六四】

㊬ 濃州末寺経回日記巻

下

仮袋綴一冊 三三・五×七・〇 四八丁 「享保四年亥五月十三日」(四・四八)【マ三七五】

㊭ 尾濃末寺諸事留帳

一袋 七冊六巻「寛延四年六月改之」(一六・九二)【ネ】

㊭ 惣末寺諸事留帳

仮横袋綴一冊 一四・五×四・〇 二八丁 「天明丑年」(四・一五)【マ三六九】
袋綴一冊 二七・二×九・〇 一六八丁 「天明六丙午年九月日」(一〇・三三)【マ三七三】

三六

袋綴一冊 二六・七×七・八 一二七丁 「寛政五年」(一〇・三四)【マ三九五】
袋綴一冊 二六・七×九・二 二五七丁 享和二年正月より (一〇・三五)【マ三九六】
袋綴一冊 二七・二×八・八 一七五丁 「文化五戊辰年七月」(一〇・三六)【マ三九八】
袋綴一冊 三三・六×七・〇 一七〇丁 「文化九年壬」(一〇・三三)【マ四〇〇】
袋綴一冊 三三・九×六・五 一四五丁 「文化十二乙亥年五月」(一〇・三三)【マ四〇三】

三七

仮横袋綴一冊 一六・五×四・〇 六丁 「文化十三年子七月」(四・一五)【マ三七六】
袋綴一冊 三三・七×七・一 一七三丁 「文政二年六月」(一〇・三三)【マ四〇五】
袋綴一冊 三三・七×七・一 一八六丁 「文政四年四月」(一〇・三三)【マ四〇六】

二 惣末寺諸事記

袋綴一冊 二三・二×二七・〇 一六五丁 「文政九年三月」 (一〇・三三〇) [マ4010-8033]

五年から嘉永元年 (二・四〇八) [マ3561-3533]

三 末寺中江御巡廻一件
留 飯袋綴一冊 二五・〇×二七・二 四九丁 文政九年九月、同十年、同十一年、同十二年 (四・四二二) [マ3669] (一六・九七) [ネ]

一〇一 惣末寺諸事記

袋綴一冊 二三・六×二七・〇 二一九丁 墨同筆書入有 嘉永元年から同七年 (二・四〇九) [マ3931-3976]

四 惣末寺諸事留帳

袋綴一冊 二三・六×二七・〇 一九五丁 「文政十二年六月」 (一〇・三三三) [マ4039-8041]

一〇三 惣末寺諸事記

袋綴一冊 二三・五×二六・九 一八九丁 墨同筆書入有 嘉永七年六月から安政六年 (二・四二二) [マ3551-3555]

五 惣末寺諸事記

書入有 天保三年から天保七年 (二・四二二) [マ3947-3950]

一〇四 惣末寺諸事記

袋綴一冊 二三・六×二六・九 二二二丁 墨書入有 安政元年から元治元年 (二・四二〇) [マ3938-3940]

六 惣末寺諸事記

袋綴一冊 二三・五×二六・九 一七三丁 朱同筆書入有 天保四年から天保十年 (二・四二二) [マ3944-3946]

一〇五 惣末寺諸事記

袋綴一冊 二三・八×二七・一 二二七丁 文久四年から明治九年 (二・四二五) [マ3947]

七 末寺并旦方廻諸事日記

飯袋綴一冊 二五・〇×二七・五 二二七丁 「申九月」 (四・四四) [マ3671]

一〇六 末寺回諸事記

飯袋綴一冊 二五・〇×二七・五 三二二丁 「二世顯世代」 (四・四四) [マ3675]

八 惣末寺諸事記

袋綴一冊 二三・七×二七・〇 二二二丁 「天保十一年庚子年正月」 (一〇・三三五) [マ4033-4046]

一〇七 惣末寺諸事記

飯袋綴一冊 二五・一×二七・五 二一九丁 朱同筆書入有 包「當山／末寺巡之留／二十二世顯正代」 (一六・九三〇) [ネ]

九 御末寺中并御旦方巡廻留

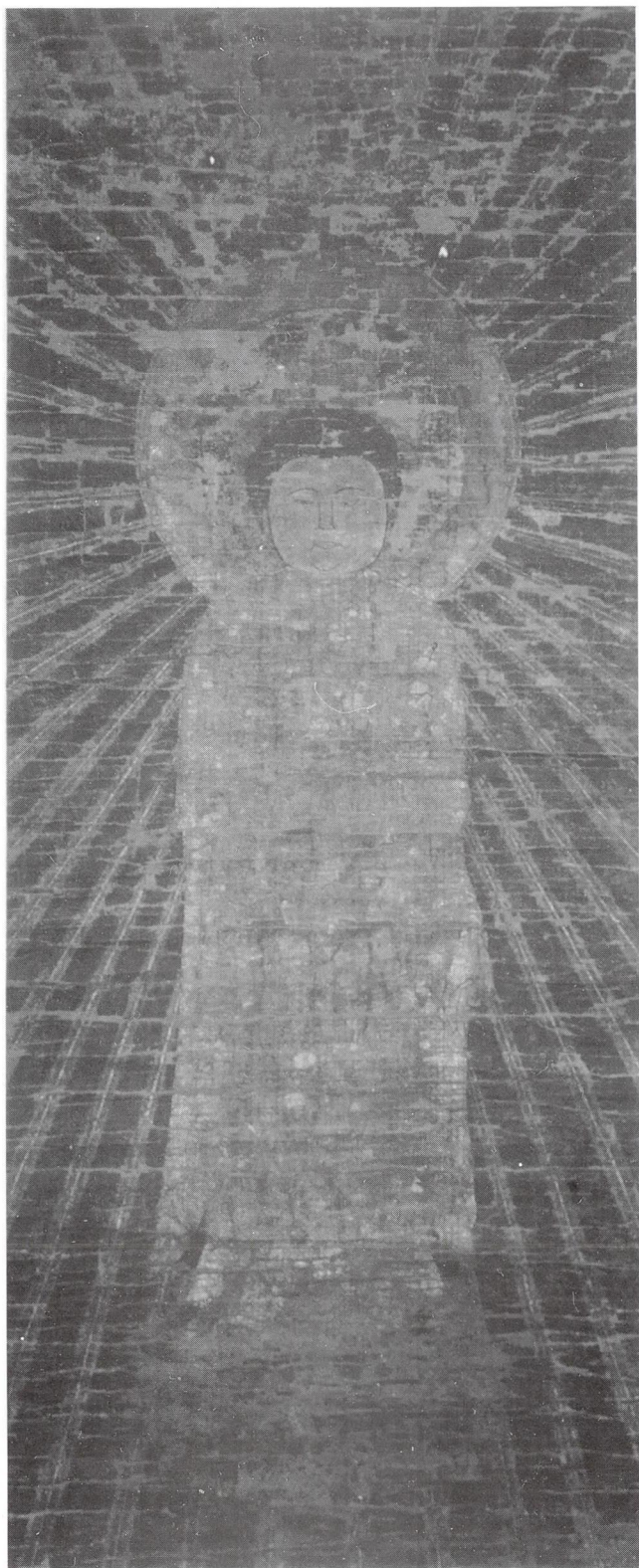
飯袋綴一冊 二五・〇×二七・五 二二七丁 「天保十三年寅三月／十四卯十五辰／嘉永五子八月」 (四・四四) [マ3670] (一六・九六) [ネ]

一〇八 惣末寺諸事記

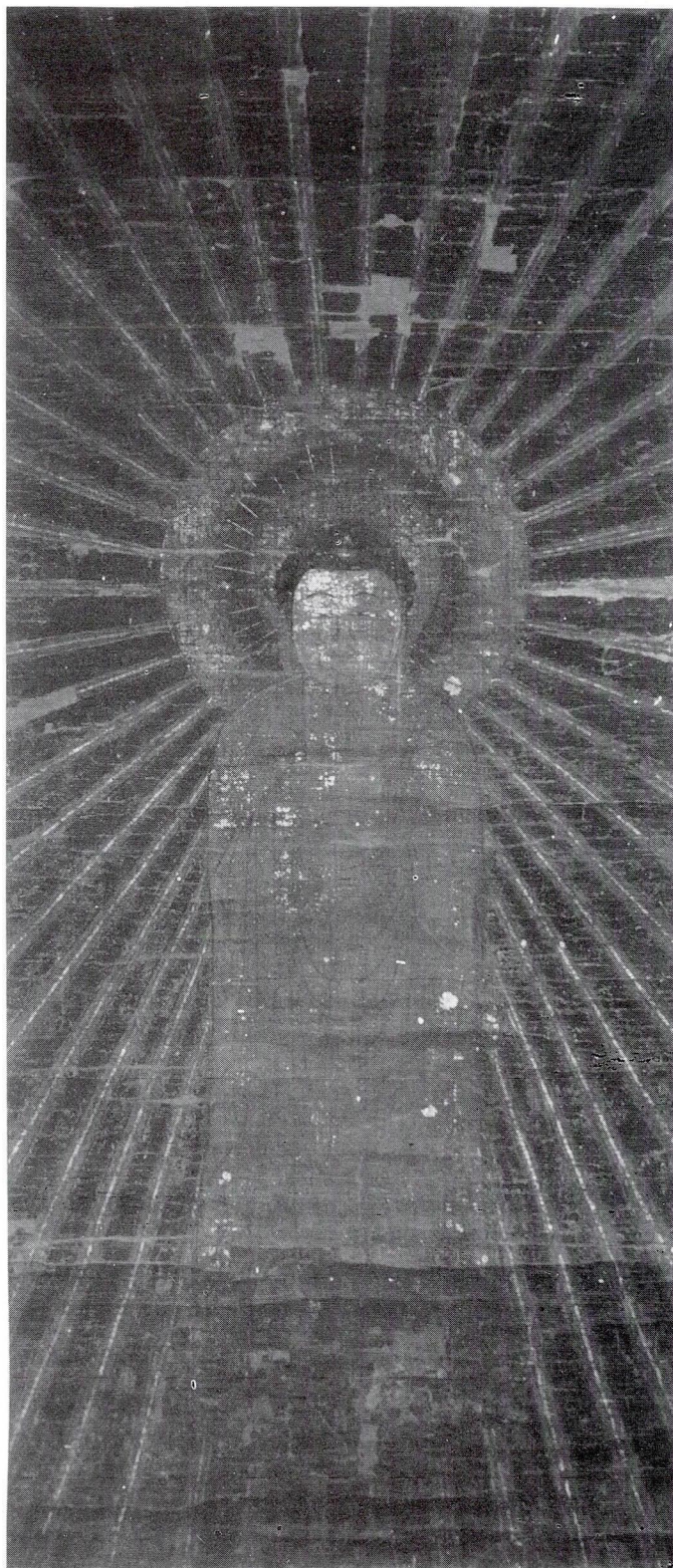
袋綴一冊 二三・五×二六・九 一七五丁 (一〇・三三九) [マ4033-8041]

一〇 惣末寺諸事記

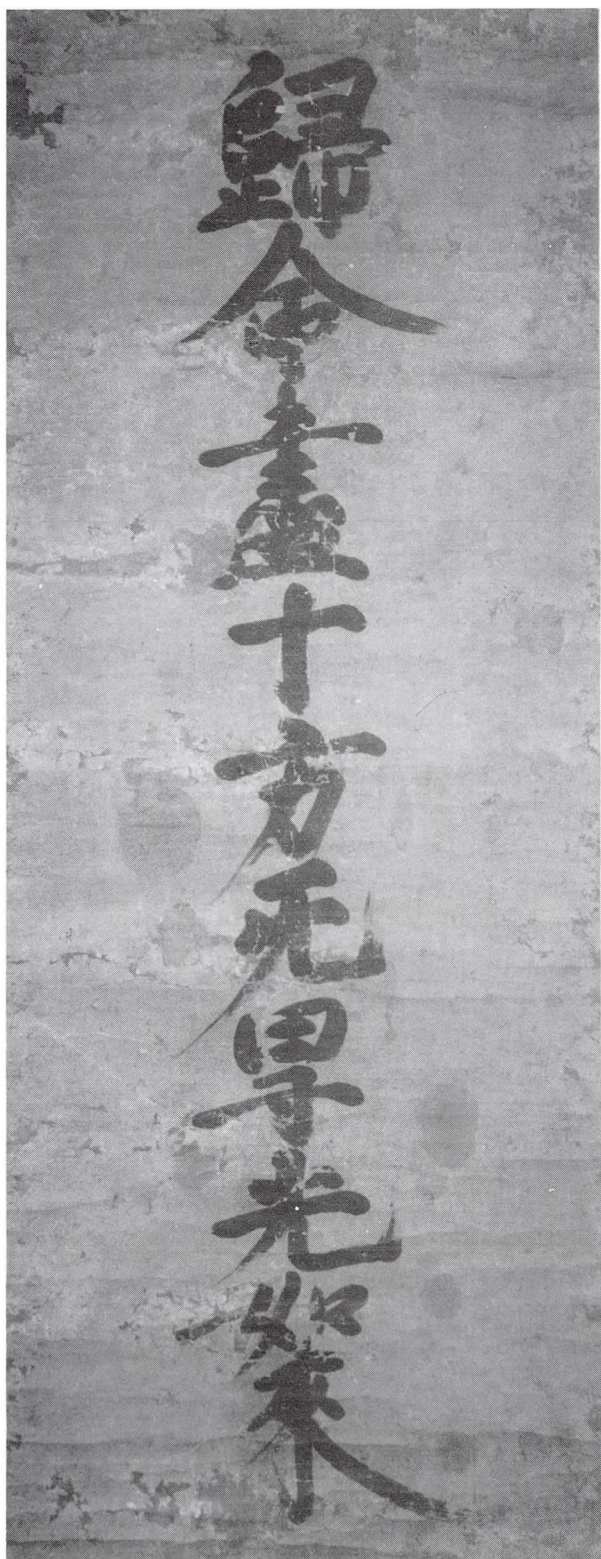
袋綴一冊 二三・七×二六・八 二二〇丁 天保十

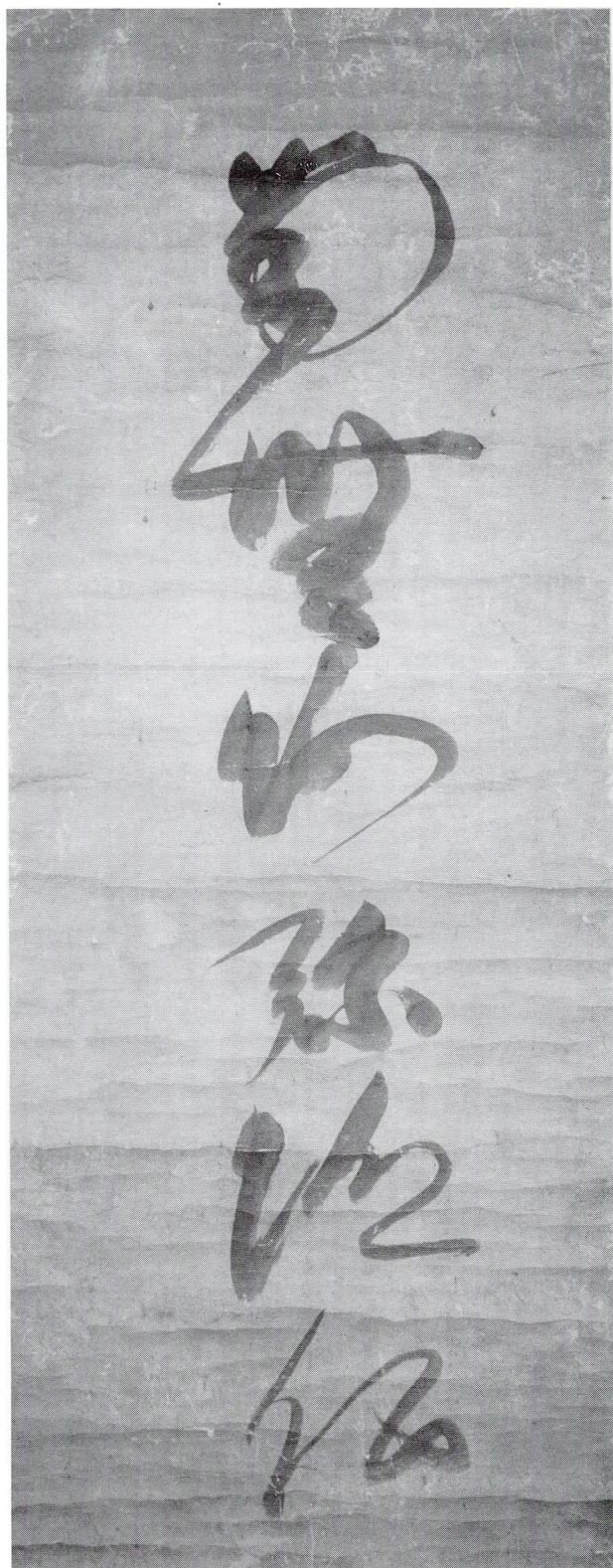


1—1
方便法身尊像



1—2 方便法身尊像





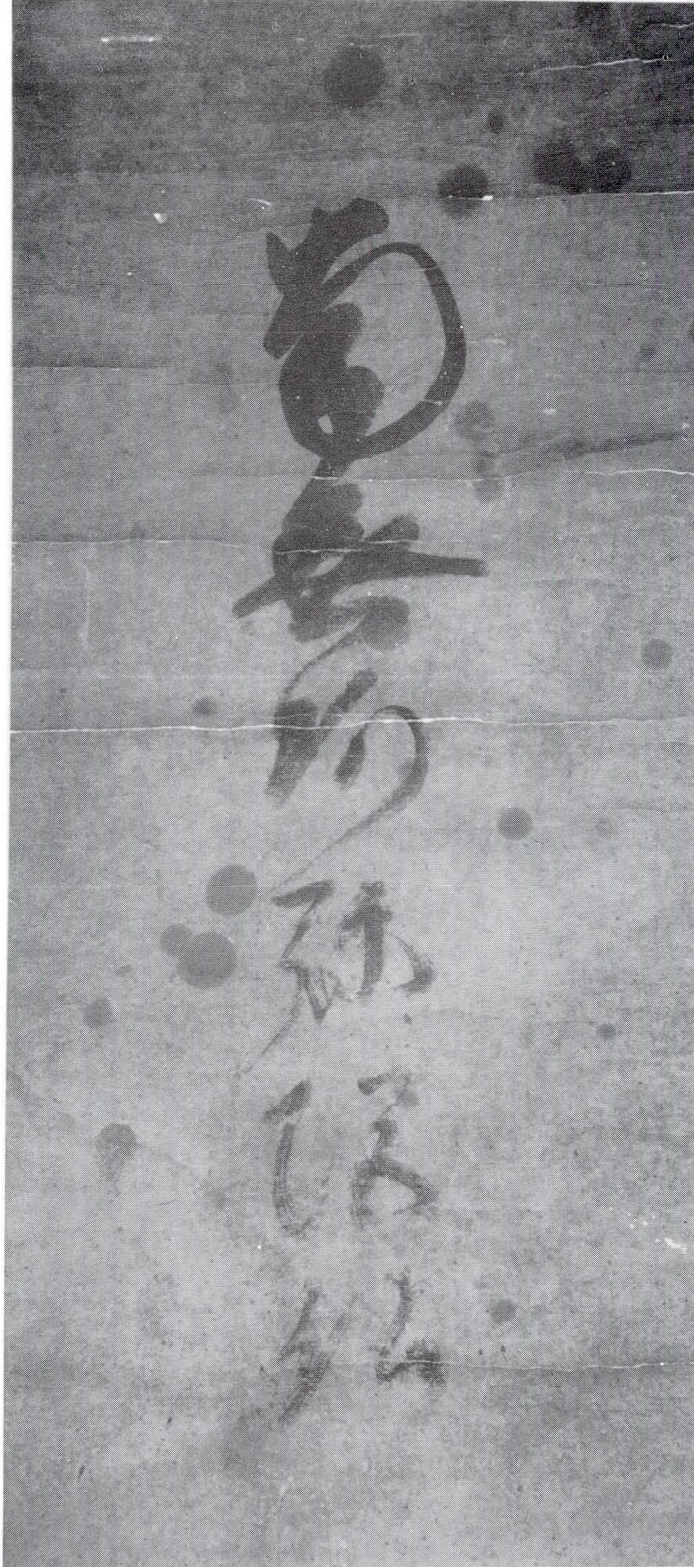
图

版

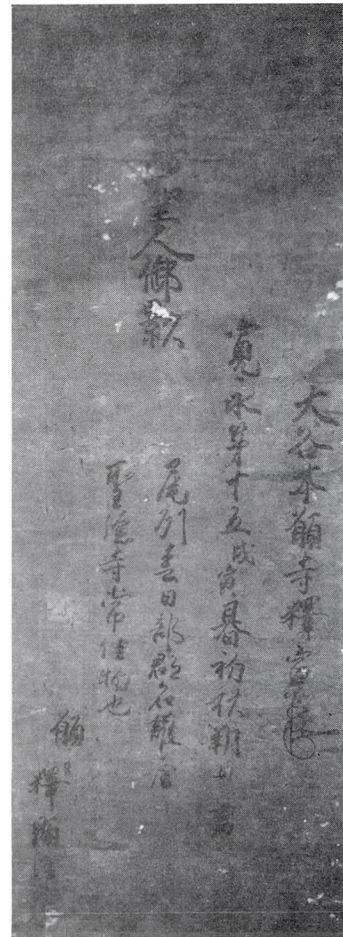


1—9
六字名号

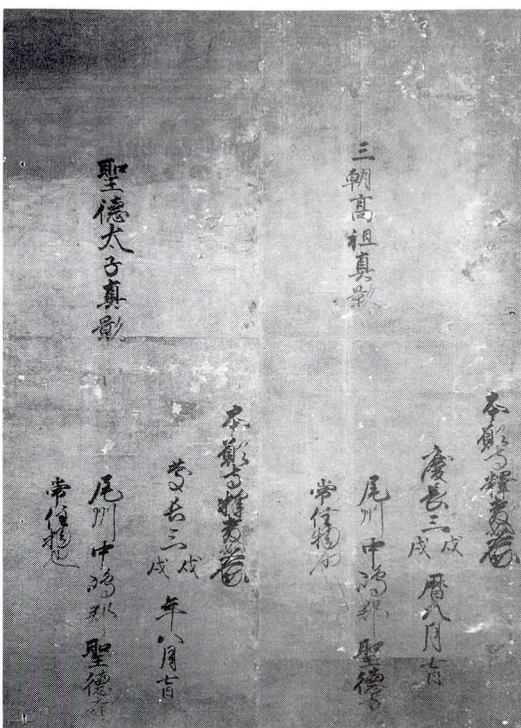
一
三
三



1—10
六字名号

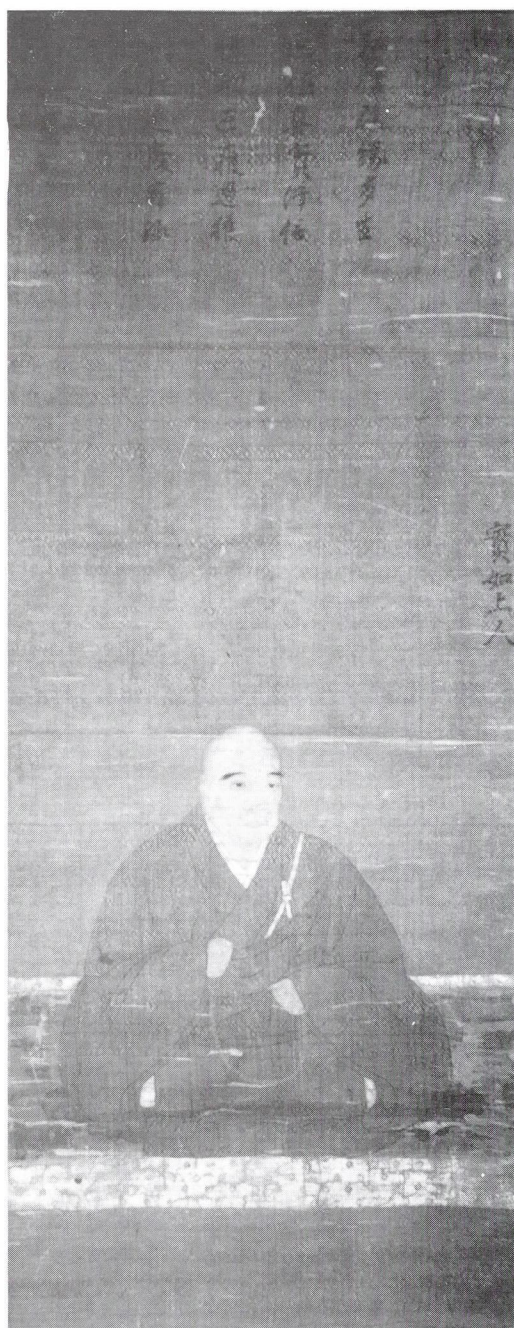


1—16 親鸞聖人御影裏書

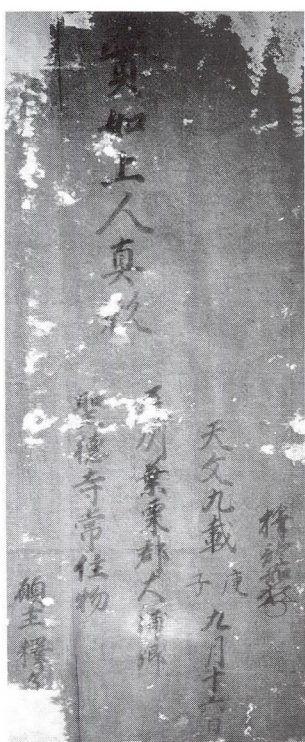


1—15 太子・七高僧像裏書

1—17 実如上人絵像



1—17 同裏書

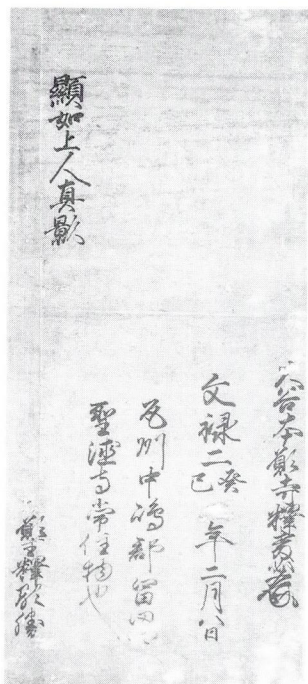




1—19
證如上人絵像



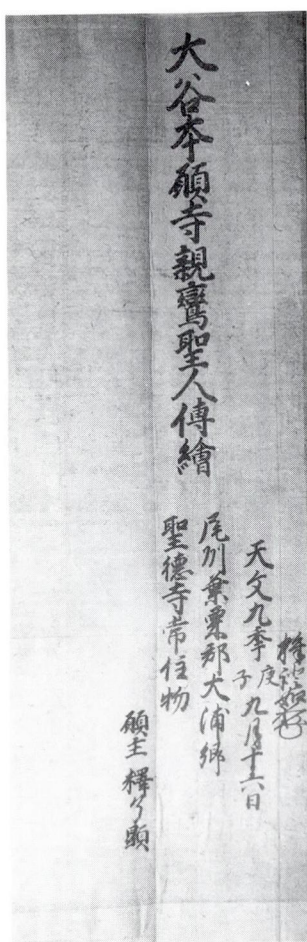
1—20 頭如上人絵像



1—21 頭如上人絵像裏書



1—31 親鸞聖人絵伝（第一幅目）

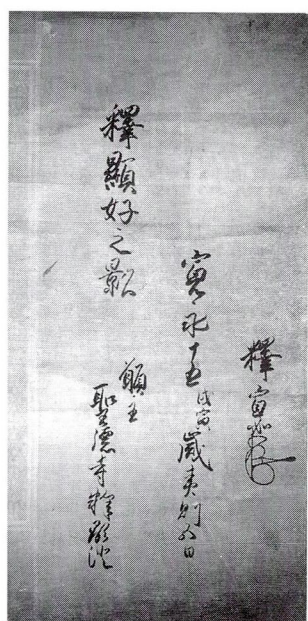


1—31 同裏書

1
94
顯好似影



1
95
顯好似影裏書

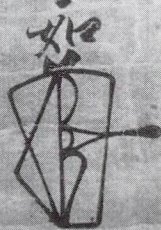


法名

寛永十五年正月廿六日

聖徳寺釋顯好
顯慈院釋尼空誓

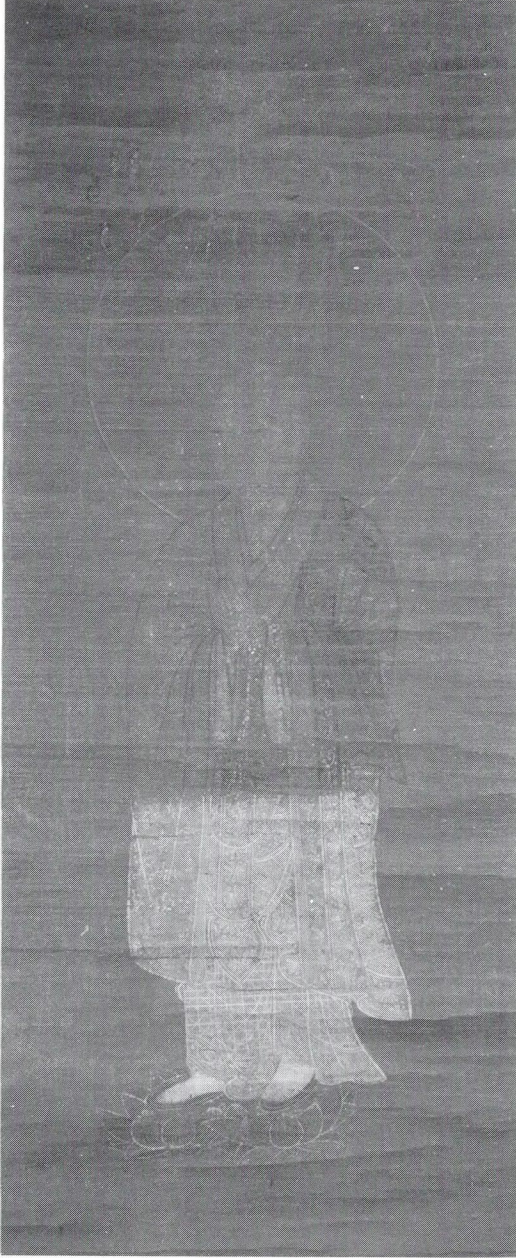
釋琢如





1
39
創先名号

一三二



1
43
善導大師半金色絵像



1
46
二河白道図



1
44
円光大師夢想の御影



1—
37 伝鏡御影



1—
38 鏡

解題

一 由緒書

1 由緒書上留帳

仮綴一冊。竪二九^{ナナ}、横二〇^{ナナ}。墨付一九丁。表紙ならび文末に記す「元禄七（一六九四）年六月」に作成された由緒書である。幕府の神社奉行に提出したものと記す。内容は聖徳寺開基閑善から十八代永元までの略史、什物、朱印状、制札を書上げる。

2 当寺由緒書写

仮綴一冊。竪二五^{ナナ}、横一七^{ナナ}。墨付九丁。表紙ならび文末に記すように二十代顕儀のとき延享年中（一七四四―一七四七）、本山本願寺へ提出するために作成された由緒書である。さらに二十一代顕曜のとき幕府の神社奉行に提出されたと記す。聖徳寺開基閑善のこと、十代顕清から十六代頼元までのこと、兼帯地四カ所のこと、初音御免・鍵役・御座出席・御供のこと、裏頭拝領のこと、金欄輪袈裟のこと、幕府継目御札・納経拝礼などのことを書上げる。

3 当寺由緒之覚

仮綴一冊。竪二五^{ナナ}、横一七・三^{ナナ}。墨付七丁。表紙なし。作成された年記はないが、もっともおそい記事は天明七（一七八七）年のものである。開基閑善のこと、十三代顕勝のこと、幕府・尾張藩との関係のことを記す。

4 由緒書

仮綴一冊。竪二五・四^{ナナ}、横一七・五^{ナナ}。墨付二九丁。作成された年記はないが、もっともおそい記事は文政十一（一八二八）年のものである。内容は今回翻刻した由緒書のなかでもっとも詳しく寺史を記す。開基閑善のこと、七代寿兼（顕）のこと、朱印状のこと、本山免許や幕府・尾張藩との関係のことを記す。

以上の四つの由緒書には作成された年記のないものもあるが、ほぼ五十年ごとに作成されたことと考えられる。その提出先はまず本山本願寺で、次いで幕府の神社奉行に提出されたことであろう。最終的には、幕府の神社奉行に提出するために書かれたものと考ええる。それは書上げの中心が朱印状に関わるものであるからである。

（小島恵昭）

二 聖徳寺小笠原氏系図

本系図は聖徳寺の住侶の職を世襲する小笠原氏の系図である。清和天皇に始まり聖徳寺第二十三世顕実の子女の代で終わる本系図は、第十四世顕好までの部分（A）とそれ以後の部分（B）とに大きく分けることができる。Aは最初に編纂された部分で、それに対してBは三度にわたって書き継ぎされている部分である。

Aは、清和天皇から八幡太郎義家を経て、源氏の嫡流は実朝まで、足利将軍は義晴まで、鎌倉公方は晴氏まで記す部分（A1）と、新羅三郎義満から、小笠原氏の始祖長清を経て、小笠原長棟に至る小笠原氏嫡流を記す部分（A2）と、長清の孫で聖徳寺第一世にあたる長顕から、第十四世顕好までを記す部分（A3）とに分けることができる。

A1・2は、既成の清和源氏系図や小笠原氏系図を利用して編纂された部分で、実質聖徳寺小笠原氏の系図と言えるのはA3だけである。第十三世顕勝と第十四世顕好を除いて、神話に見られるような始祖から順に家督を継いだ者だけを縦一列に繋ぐ、豎系図の形式で書かれているA3は、聖徳寺の神話的部分と言えるであろう。

Aの編纂者は、A3の最後に記載されている第十四世顕好（一五七六一一六三八）であろう。顕好が本系図を編纂しようとした動機については、今後の調査が待たれるが、顕好の譜に記すところの、木曾川の氾濫

によって流失した寺領の回復を、徳川家康に願い出たことと関係があるのではないだろうか。

ところで、聖徳寺には、本系図と対応するように、二十三代分の住職の没年等を記録した『当寺暦代記』というものが残されている。『当寺暦代記』はその奥書によれば、第二十一世顕曜が宝暦六年（一七五六）に自分自身の代までまとめ、その後を第二十二世顕正と第二十三世顕実とがそれぞれ書き継いだものであるらしい。次の表は本系図と『当寺暦代記』に記載されている住職の死没年月日と没年齢をまとめたものである。

聖徳寺小笠原氏系図											当寺暦代記			
住職											死没年月日		没年齢	
A 3											死没年月日		没年齢	
11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	弘安4年3月4日		86	
顕明	顕清	顕順	顕祐	寿顕	顕立	顕佐	宗顕	顕牧	浄顕	長顕	正安2年4月3日		57	
弘治2年6月29日	?	?	?	?	?	?	?	?			(2月3日)		61	
79	62	61	?								弘治2年6月29日		79	
											永正4年5月3日		69	
											寛正2年4月9日		63	
											明応2年2月3日		62	
											永正17年2月3日		73	
											永享2年9月11日		52	
											應永元年8月1日		60	
											康応元年2月9日		50	
											観応元年5月25日		71	
											元徳2年3月8日		57	
											正安2年4月3日		86	

B 3					B 2		B 1						
23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12		
顕実	顕正	顕曜	顕儀	顕栄	永元	秀顕	頼元	顕澄	顕好	顕勝	了顕		
弘化2年1月20日	天保13年7月14日	天明5年6月9日	宝暦9年12月26日	正徳4年7月7日	正徳6年1月3日	延宝8年12月6日	延宝9年3月22日	寛文6年5月27日	寛永15年1月26日	慶長2年8月14日	元亀元年3月8日		
60	83	59	58	26	52	44	73	65	63	54	36		
(没年未記入) (没年未記入) 天明5年6月9日					正徳4年7月7日	正徳6年1月3日	延宝8年12月6日	天和元年3月22日	寛文6年5月27日	寛永15年1月26日	慶長2年8月14日	元亀元年3月8日	
59					58	26	52	44	73	65	63	54	36

三 惣末寺五尊御裏留

本書は聖徳寺末寺の五尊仏（木仏・開山影像・太子・七高僧像・歴代影像）やそれに付随する裏書調査記録である（タテ25・2^{ナナメ}×ヨコ16・8^{ナナメ}・仮袋綴・墨付一二五丁）。表紙に「惣末寺五尊御裏留 申九月」と外題があり、さらに朱筆にて「文化九年九月迄之末寺巡回御裏改」とある。寺ごとに筆跡が異なることより、巡回して各寺住職により直接記載されたものである。したがって内容には若干のばらつきがあり、丁寧な場合とそうでないものの、御印書の文面や箱書も記載されるものもあり、大略前半に丁寧に記載される傾向にある。

記載寺院数は三十九カ寺で、尾張三十一、美濃八カ寺である。当寺にはこうした裏書調査にかかわる類本を他に四本伝えており、以下のようである。それらは「濃州御末寺御裏留帳」（文化十一年・A本）、^{【文政十}「御末寺中御裏記」（B本）とその類本「御末寺中御裏記」（文政十年）、^亥「御末寺御裏」（享保十四年・C本）であるが、当該本が最も詳細かつ記載寺院が多い。

聖徳寺には単独の末寺帳は伝存せず、末寺数については不明瞭であるが、やはり聖徳寺蔵の「尾州領 御末寺寺号帳」（年次不詳、尾張藩内東派末寺帳）によれば、尾張国三十、美濃国四カ寺である。A本には濃州のみ五カ寺収載し、当該本の補足本と考えられる。B本は二十九カ寺

収載するが六カ寺の重複があり、実際は二十三カ寺分である。尾張十四、美濃九カ寺であるが、当該本・A本両本に見ない四カ寺を載せる。各寺の記載内容はほとんど当該本と同一であり、どういう目的で作成されたのか判然としない。C本は以上のいずれよりも古いが、第二十世顕周（顕儀のことか）の記した墨付六丁ほどのメモ的なものであり、「惣末寺」というには遠く及ばないものである。

いずれにしても、当該本が聖徳寺末寺の諸裏書・諸申物の基本台帳ともいべき性格のものとすることができ。ちなみに、末寺の由諸書については、「聖徳寺末寺由諸書」一冊（文政五年午九月提出）を蔵する。

ところで、こうした末寺の五尊仏の裏書調査について金沢専光寺、三河勝鬘寺のものが翻刻公開されている。前者は「三ヶ国末学衆申物^並五尊諸事御書出跡留之帳」の標題で、北西弘編『金沢専光寺文書』（北国出版社・昭60）に収載される。これによれば、加賀・能登・越中の末寺に対し貞享二年（一六八五）から五年にかけていつせいに調査されたことが窺われる。ただし三国以外の越後・出羽等は元禄期に追加されているようである。そして、各末寺の裏書・御印書等がかなり正確に報告されているのが特徴である。また同じく貞享二年六月に「触下寺庵由諸書として、触下に対する由諸の報告書が集成されたものも伝え、末寺・触下に関するこうした諸来歴をこの時期調査したことが知られる。

一方三河勝鬘寺は、「尾張三河之分末寺触下絵讀之控」の標題で、当研究所紀要第四号共同研究「勝鬘寺資料の研究」に収載される。当本も

貞享二―四年にかけて調査されたとすることができ、専光寺本と全く同時期に調査されたことになり、偶然の一致というより教団の動きとの連関を想定することができよう。ただ勝鬘寺本は、以後の加筆も多く見られる。内容は、やはり五尊仏の裏書を中心に、一部に取次者の名前や四本柱・前卓等の免物も記される。また勝鬘寺には、これ以後成立の類本が三本存するがいずれも不完全なもので、これらの関係については同紀要共同研究に詳述されているので参照されたい。

こうした聖徳寺本に先行する末寺調査記録や、本山側の記録の一部である粟津家の『申物帳』（大谷大学図書館蔵）と比較参照することにより、中本山・触頭としての性格や機能、また諸申物の免許のあり方、さらには一般末寺の諸申物の受容状況などの考察に当該本は有効な資料となる。

（青木 肇）

四 縁起ならびに読縁起

I

ここに納めた縁起類は、二つに大別されよう。一つはおおよそきちんと卷子装幀されたものを中心とした縁起類で、聖徳寺の法宝物を拝観する者自身によって読まれることを目的とした物である。卷子本としてきちんと装幀されていることも、その縁起そのものを権威付けようとすることに他ならない。今一つは、口誦者が読み上げて拝観者に聞かせるも

のである。後者を読み縁起と名付けた。⁽¹⁾

前者の縁起類は未だ法宝物の展観が一般の信者を対象として定例化する以前から成立していたものと考えられる。古くは、朝廷からの要請に応じて提出された流記、平安時代から中世に掛けて成立した寺院縁起類と同じ範疇に属するものである。

今、聖徳寺のこうした縁起類を見ると、XIIの④『濃州賀茂郡稲口村観音堂縁起』は寛文二（一六六二）年霜月十八日に頼元の手になったものであり、年記を有する物の中で最もその成立が古い。VIIの①『二河白道図説』も少し遅れて寛文八（一六六八）年五月初日の頼元の署名がある。律師頼元は、聖徳寺の実質上の中興開山といつてよい人物で、『聖徳寺小笠原系図』に拠れば、延宝九（一六八二）年三月二十二日に七十三歳でなくなっているから、その生年は慶長六（一六〇二）年ということとなり、寛文二年は六十一歳、寛文八年二は六十七歳であったことが知られる。頼元は『当寺歴代記』によれば、寛文十二（一六七二）年三月に住職を辞し隠居しており、これらの二つの縁起はまだ住職であった時に書かれたものであることが判る。

頼元の手になる縁起とほぼ時代を同じくするのは、Iの『濃州大浦邑聖徳寺系譜・聖徳寺中興釈頼元律師伝』、IIの①の平仮名書きの『七宝縁起』及び、VIの『赤梅檀弥陀の尊像一軀造立の縁起』である。Iの『濃州大浦邑聖徳寺系譜・聖徳寺中興釈頼元律師伝』、IIの①の『七宝縁起』には奥書識語がなく、その成立年次ははっきりとはしないが、この二つ

が草木下絵の同じ様の紙に、一方は漢文体、他方は和文平仮名書きという違いがあるもののよく似た手で書かれていること、同じ牡丹唐草模様金欄の表紙で装演されていることなど同じ時期に同じ者の手になったものと思われるし、Ⅱの①の『七宝縁起』とⅥの『赤梅檀弥陀の尊像一軀造立の縁起』とは、後者が草木下絵の紙を用いない点で料紙の違いはあるものの、文体筆跡ともに癖のある同一人の著述と見て誤りがない。Ⅵの『赤梅檀弥陀の尊像一軀造立の縁起』には「維時寛九^(マ)巳^(マ)酉年八月十三日／洛下本性寺照儀坊釈了意書述／〔了意〕角陰刻印」〔松雲印元角陽刻印〕の識語がある。したがってこの三点は、いずれも近世の仮名草子の作者として知られる大谷派の学僧浅井了意の手になるものであることが明らかである。

Ⅰの濃州大浦邑聖徳寺系譜・聖徳寺中興釈頼元律師伝」は律師頼元の事跡がその没年まで記述されず、慶安元（一六四八）年の院家免許の記事までしか書かれていないことを考えると、その成立も寛文十二年三月の頼元の隠居前後を下限とする頼元の生前のものであったであろうことが考えられる。了意の没年齢は不明のため、頼元とどちらが年上であったかは判らないが、元禄四年に八十歳前後であったとすると、ほぼ頼元と同年齢か。

Ⅵの『赤梅檀弥陀の尊像一軀造立の縁起』によれば、赤梅檀弥陀木像は、頼元が料材を求めて作ったもので、その光背には琢如の手になる「律師頼元」の四文字が書かれてあるという。頼元と琢如、了意の関係を示

す資料であると共に、聖徳寺が頼元の頃に寺容を整えたことを示すものであろう。頼元の兄の顕澄の依頼によって、陳玄賛が聖徳寺の鐘銘を識したのが寛文二年であることもそれに符号する。

- (1) 拙考「共同研究：真宗初期遺跡寺院資料の研究」解題五読縁起（同朋学園佛教文化研究所紀要）第七・八合併号・一九八六
- (2) 北条秀雄「改訂増補浅井了意」（笠間書院・一九七二）
- (3) 名古屋別院史編纂委員会「名古屋別院史 通史編」第三章第五節「名古屋御坊と文化人」（真宗大谷派名古屋別院・一九九〇）

Ⅱ

他の拝観する者自身によって読まれることを目的とした卷子本には、

Ⅱの①の『七宝縁起』を書写したものと、Ⅱの②、③の『濃州賀茂郡稲口村観音堂縁起』とがある。Ⅱの『七宝縁起』についていえば、②の享保二十（一七三五）年に聖徳寺第二十世法橋顕儀が書写したもの、③の文化八（一八一二）年およびⅡの④の嘉永五年のいずれも書写者不明のものである。このほかに年次不明のものが一点あるが翻刻は割愛した。上記の三点はそれぞれⅡの①の『七宝縁起』を受けながら、微妙に言辞を換えているが、これらの縁起が聖徳寺の草創を物語ると共に、宝物である七宝をあげ、別して鏡の御影と称される親鸞の肖像が線彫りされた鏡の縁起となっていることに注目したい。近世において聖徳寺がその来歴の古さを示す一等の証拠としたものがそれであったことを物語るからである。但しⅡの①の『七宝縁起』では、鏡の面に現れた姿が

親鸞の形であつたのか、阿弥陀如来の姿であつたのかを明らかにしない。

後になって阿弥陀像に変わったとしているのだが、本来そうであつたかどうか、もとの鏡に何があつたのかは不明である。此の事は後で触れるが、②以下では鏡には親鸞の姿が写つたとしている点に大きな違いがある。また、①では七宝のうち、「鵜丸鏡」と「松風茶臼」とにも短いコメントが付されていたがそれらは②以下では書かれていない。Ⅲに示した「劔先の名号縁起」が物語るようにその間に紛失し代替物として七宝に加えられたのが劔先の名号であつたのである。

XIの②、③の「濃州賀茂郡稲口村観音堂縁起」は、②が①の頼元の識したものを訂正した跡が見られること、③が末尾に提出者たちの連名と、提出先を書いてあつたと思われるものの写しであつて、恐らく寺社奉行かどこかへ提出した縁起の控えなのであろうと思われるが、今写本では判読不明である。又その内容は、頼元の縁起とその校訂本とが観音像を尾張国富田で拾つたとしているのに対し、③はその観音像を胎内に納めて頼元が製作した観音像であつて、異なつた像の縁起となっている。この縁起に説かれる観音堂の本尊は、天保八（一八三七）年、大風による観音堂の倒壊以降、聖徳寺に安置されたようである。Ⅱの④にあげた読み縁起はそれ以降の成立のものである。その観音堂が新清水寺と呼ばれていたことを記している。

Ⅲ

如上取り上げて来た縁起が、文飾にも心を砕いた拝観者に読まれることを意識したものとなつていたのに対し、これから論ずる所は口上し易さを意識した読み縁起類である。

これらの内、Ⅳの①の「劔先ノ名号縁起」、Ⅴの①、②の「善導大師半金色絵像縁起」はその起筆部分が「右コノ来由ヲ窺奉ニ：」、「右此来由ヲ窺奉ニ：」となつていて、先の拝観者自身によつて読まれることを目的とした卷子本の「聖徳寺縁起」類から直接に独立させた物である可能性を示している。いわば、拝観者自身によつて読まれることを目的とした縁起類から読み縁起が出来上がつていく過程にあるものといえようか。

これらを除けば、展観されている一々の法宝物の前に立つて、場合によつては卷子装となつている縁起を紐解きながら、又時に曲節を伴いながら読み上げられたであろう読み縁起類である。以下にその展開を追つて、注目される点を指摘しておく。最初に取り上げるのは、七宝山の七宝及びその代替宝物の縁起である。現在伝えられているのは五つの宝物についてのみであつて、「松風の茶臼」と「親鸞筆の十字名号」には独立した縁起が伝えられていない。伝親鸞筆の十字名号は聖徳寺に襲蔵されているのに、縁起がないのである。

Ⅲの「鏡御影縁起」は先の「七宝山縁起」を受けて鏡御影の部分を立てたものである。②の方が享保二十年の縁起により近い文言を保つ

ている。①にはワ音のハ字表記が見られる。更に確認しておきたいのは、現在聖徳寺に伝えられる「鏡の御影」が阿弥陀像を線刻した鏡であることである。聖徳寺には今一つ線刻を施した鏡があつてそれには親鸞の像が彫られている。Ⅱの②以下がいずれも親鸞の像をとどめているとして、いるのに対応させて作られたものであろう。

Ⅳの「劔先ノ名号縁起」は、もともとの七宝であつた「鵜丸劔」が、弘治年中（一五五五—一五五八）何者かに盗まれたので頼元の兄で聖徳寺十五世であつた顕澄の上奏によつて宣如が、本山の宝物であつた弘法大師筆の名号を写して、顕澄に下附したものであるという。

Ⅴの「龍樹・天親・曇鸞三骨縁起」は、①が宝塔に入れられた状態で展観されていたのに対し、②、③では、その宝塔を納める厨子が作られて、その中に納められた状態で展観されるようになったことを示している。③は①と②とを合わせた文脈になっている。

Ⅳ

Ⅵの「赤梅檀阿弥陀像縁起」は先にも触れたように、頼元の造像の縁起であつて、②は最もよく寛文九年の浅井了意のテキストを受けている。③になると、赤梅檀の木が琢如から下附された事となり、頼元の鑄造した円光が赤梅檀阿弥陀像のそれではなく、本山の本尊のそれであるとするなど、いっそう本山との繋がりを強調する縁起となっている。④はその③の省略されたものと思われる。

Ⅶの「二河白道図縁起」は、実は①はその図の来歴を語るものではなく、内容を絵解くためのもので、②によつて初めてその来歴が語られるのである。③は②の誤字などを訂正したものである。

Ⅷの「聖徳太子木像縁起」では①の文によつて、②の本文が校訂されている。

Ⅸの「善導大師半金色絵像縁起」は最も多くの縁起が残されている。

①、②は先に示したように拝観者自身によつて読まれることを目的とした縁起を直接に受けている。そのうち②は①よりは省略された形である。④は②に拝礼の対象がなんであるかを示す「抑是二掛奉ルハ善導大師半金色御絵相ハ高野山明遍僧都ノ御筆ナリ」の一文を加えたもののように続いて「右此来由ヲ窺奉ルニ」とする。此の縁起には後から別の文の縁起が貼付されている。それが独立して書かれたものが③である。⑤は③と同じ様に省略されて成立した縁起であるが、③とは異なっている。⑥は、実如が霊夢を見たとし、自ら染筆したと、全く異なつた縁起となっている。宗門内へ収斂しようとする意識の現れか。

Ⅹの「火中出現阿弥陀如来絵像縁起」は、当初①の消されて改定される前の文言のように如信との関わりをなかで制作されたものと伝えられていたのだろう。やがて本願寺教壇との関わりが重視され、②や③のように蓮如の手になつたと筆者が代えられていったものと思われる。③では下附年次まで明らかにされるようになってくるし、現に伝蔵される蓮如筆の六字名号にも言及する。しかしこの六字名号が何時から聖徳寺に

あるものなのかは明らかでなく、その縁起が独立していない点からも、もともと阿弥陀如来絵像と一括して下附されたものとは思にくい。他の部分、火中してそこから自ら飛び出したという記述が殆ど替わっていない点にも、先の来由の部分のみに手を加える作爲を見ることができよう。

Ⅸの『親鸞木像縁起』および『遺骨縁起』についてみると、①は親鸞の遺骨の縁起であり、②は親鸞の木像の縁起であるが、此の二つは、同じ観点から記述されている。特に親鸞の越後配流と関東教化は同じテキストから引いているようである。②では開基の開善が下附された鏡の御影ではその像様が小さく、年老いた信者が見にくくなってきたというので、京都へ上り、寿像を下げてもらったというのである。①で親鸞の危篤の報に京上しながら、その臨終に間に合わなかった開善に与えられたものとする。③では木像は親鸞の関東教化のおり彫刻して、常随していた開善に与えられたものであるとする。二十四輩への意識が働いたものといえるだろう。④は、①と②とを合わせたものである。木像と遺骨とが一つのところに並べて展観されていたことを示すものであろう。木像の縁起は京都で与えられたとする。最後に附せられた宣如の遺骨の縁起によって、歴代法主の遺骨を下げられた寺格と主張していたことが窺えよう。弘化（一八四五）年に此の縁起を写したとする吉川喜海についてはその伝を明らかにし得ない。

V

如上、聖徳寺の縁起類について概観した。一つの寺院について多くの縁起と読み縁起とを比較することによって、寺院が伝えようとしてきた伝承を知ることができるだろう。一般に寺院は、その開創伝承を遡上させようとするものが知られている。近世に成立した寺院でも蓮如の弟子となったとしたり、親鸞の帰京の途上で弟子となったとかなとするのである。さらには、親鸞の教化を受けた者がそれまで天台宗もしくは真言宗の寺を真宗に改めたとする。こうした寺伝の改変が、近世を通して行われてきたであろう事は想像に難くない。聖徳寺の場合には、親鸞の面授の弟子小笠原氏開善をもってその開基とする。寺として機能し始めたのは、頼元とその兄で先住の顕澄の時代であったのであろう。その時、本願寺との間に強い関係が結ばれたものと思われる。幾つかの読み縁起はその間の事情を現していた。

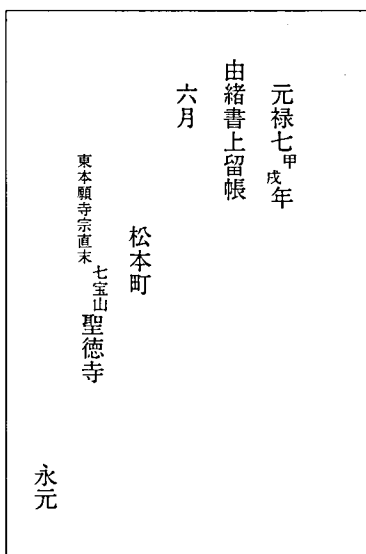
近世を通じて聖徳寺では、親鸞との関係、即ち二十四輩への志向と、本願寺本山との関わり、直參寺院としての意識とのあいだにあって揺れていたものと思われる。阿弥陀如来絵像の縁起が、作者として如信と蓮如とを挙げたのはその現れであらう。また親鸞の木像を関東で授与されたとするののもそれであって、京都へ上って受けたとすることは、どちらかといえば、本願寺に意識を移した結果であらう。（渡邊信和）

翻 刻

一 由 緒 書

1 由緒書上留帳

(表紙)



一、松本町聖徳寺開山者閑善と申僧寛喜年中ニ開基仕候、其時分者濃州大浦村ニ罷仕候所、中頃顯清と申住僧永正年中尾州中嶋郡富田村江引越申候、其以後顯好と申住僧慶長八癸卯年春日井郡清須江引越、夫々慶長拾五

庚戌年比当地江引越罷有候、開基今当年迄四百拾三余年開山閑善今当住永元迄拾八代ニ罷成候、右之外替縁起由緒無御座候
什物

- | | |
|--------------------------------|----|
| 一、本尊弥陀如来木像 | 一軀 |
| 一、宗旨開山親鸞聖人絵像 | 一幅 |
| 一、七高祖絵像 | 一幅 |
| 一、聖德太子絵像 | 一幅 |
| 一、宗旨開山絵伝 | 四幅 |
| 一、蓮如上人絵像 | 一幅 |
| 一、実如上人絵像 | 一幅 |
| 一、證如上人絵像 | 一幅 |
| 一、顯如上人絵像 | 一幅 |
| 一、教如上人絵像 | 一幅 |
| 一、宣如上人絵像 | 一幅 |
| 一、琢如上人絵像 | 一幅 |
| 一、常如上人絵像 | 一幅 |
| 一、六字名号
<small>蓮如上人筆</small> | 一幅 |

一、十字名号 美如上人筆 一幅

一、劔先六字名号 宣如上人筆 一幅

一、繪像弥陀 一幅

一、宗旨開山筆 五幅

一、撞鐘

当寺由緒御座候ニ付従本寺遺骨申請候

一、宗旨開山遺骨

一、宣如上人遺骨

一、琢如上人遺骨

一、常如上人遺骨

從宗旨開山賜閑善七種靈物

一、鶴丸劔 是者弘治年中紛失仕候

一、松風茶臼

一、龍樹菩薩眼睛

一、天親菩薩舍利

一、曇鸞大師御骨

一、宗旨開山十字名号

一、宗旨開山鏡影

大猷院様御朱印

当寺領美濃国羽栗郡三屋村貳百石事、任先規寄附之訖、全可收納、并

寺中竹木諸役等免許、弥不可有相違者也、仍如件

寛永十九年九月廿四日 御朱印

聖徳寺

大猷院様御朱印

当寺領美濃国賀茂郡稲口村内貳百石事、任先規寄附之訖、全可收納、并寺中山林竹木諸役等免除之、永不可有相違者也、仍如件

正保四年正月十七日 御朱印

聖徳寺

敝有院様御朱印

美濃国賀茂郡稲口村之内貳百石事、并寺中山林竹木諸役等免除、任正保四年正月十七日先判之旨、聖徳寺進止永不可有相違者也、仍如件

寛文五年七月十一日

御朱印

当公方様御朱印

美濃国賀茂郡稲口村之内貳百石事、并寺中山林竹木諸役等免除、任正保四年正月十七日寛文五年七月十一日兩先判之旨、聖徳寺進止永不可有相違者也、仍如件

貞享二年六月十一日

御朱印

大閤公御朱印

於濃州三屋村貳百石事被扶助之訖、全可令知行候也

天正十七年十一月廿一日 御朱印

正徳寺

(附箋)
有徳院様御朱印

美濃国賀茂郡稲口村之内貳百石事、并寺中山林竹木諸役等免除、依当

家先判之例、聖徳寺進止永不可有相違之状、如件

享保三年七月十一日

御朱印

大閤公御制札

禁制

尾州正徳寺

一、当市軍勢甲乙人乱妨狼籍事

一、放火之事

一、对地下人不謂族申懸事

右条々堅令停止訖、若違犯輩在之者、可処嚴科者也、仍下知如件

天正拾貳年三月日 筑前守御判

大閤公御制札

定

富田寺内

一、軍勢甲乙人乱妨狼籍停止事

一、をしかひ以下一錢切たるへき事

一、薪雜事は他郷合とるへき事

付、家主に前々不謂族申兼へからざる事

右条々於違犯輩者、速可処嚴科者也、仍下知如件

天正拾貳年五月二日 筑前守御判

信雄公御制札

寺内町中并外地引得分秋之内年貢等諸役以下、何も令免除之訖、出入之輩ニ至る迄、違乱煩不可有之、自然下々非分之儀出申兼者、速可加成敗者也

天正十二

三月十七日 信雄御判

聖徳寺中

町中

岐阜中納言殿制札

定

聖徳寺

一、三屋寺内町中改立置候上者、於万事諸役以下有之間敷事

一、寺内之者自然失走事有之共、領内於先々拘置間敷候、某之前々為

走者も聞出次第可召返事

一、寺門へ出入対人馬違乱煩申懸者有之間敷事

右条々違犯之輩於有之者、忽成敗をくわへへき者也、仍如件

慶長四年八月日 御判

右之外御書付之品々無御座候、以上

元禄七^甲年 松本町

六月 東本願寺宗直末聖德寺院家

永元印判

覚

一、理相寺者慶安年中言立申候

理相寺平僧

順正印

聖德寺永元印

右一常之末ニ寺社奉行江如是書上

2 当寺由緒書写

(表紙)

当寺由緒書写
延享年中
御本山書上控

七宝山
聖德寺

当寺由緒口上書を以申上候覚

聖德寺

当寺聞基者甲斐国住人小笠原左衛門尉長頼と申候、往昔 高祖聖人北陸御抖敷之時、越後国ニ而真宗之要法を承り、則武勇之業を捨て御弟子と

翻刻

罷成申候、聖人より法名を給りて閑善と申候、夫より常随仕 聖人御上洛之刻、美濃国大浦郷迄御供仕候処、聖人暫御逗留被遊、道俗男女御教化有之候、大浦郷之者共 聖人ニ帰依尊敬仕、則不日ニ一字を建立 聖人ニ差上、永御法流を御伝被遊候者難有由申上候、依茲聖德寺と号られ、又後閑善ニ七種之靈宝を被下置則閑善を聖德寺住持ニ被仰付候御本山御代々右之靈宝御上覽被遊候、それより拙寺代々相伝仕、依之七宝山と申候

一、閑基閑善分第十代頭清住持之時、右大浦郷境内洪水ニて流失仕候ニ付、尾州刈安賀村同国富田村所ニ寺建立仕罷在候、其後十三代頭勝住持之時、織田信長公と美濃国稲葉山之城主斎藤山城守と始而対面之時、富田村聖德寺ニて参会御座候此儀委八織田軍記信長記等ニ見へ申候、天文十八年四月下旬也、且又富田村境内免許之制札織田信雄公下候、天正十二年甲申三月十七日也、其後豊臣秀吉公も数度富田村境内へ御成り御座候而、頭勝江御懇切之事共ニ御座候、然処美濃国竹ヶ鼻之城主并浅井之一族秀吉公と合戦之時、頭勝無ニ之忠義を抽、其上敵之為ニ寺内悉く焼失せられ候ニ付、美濃国羽栗郡三ツ屋村江蜜ニ引籠申候、依之秀吉公右之忠賞として寺領貳百石、右三ツ屋村ニおいて給之、則秀吉公御朱印并三奉行公之奉書爾今所持仕候是ハ天正十七年、丑十一月廿八日也、其後慶長七壬寅年洪水ニ而、右之三ツ屋村寺領減没仕堤敷と罷成、貳百石之内三拾貳石残申候、如之十四代頭好御替地之儀を御当家 家康公江度々御願申上候得共、不達上聞難義仕候処ニ、十六代柳洞院江府江罷下り三年之間、右御替地拜領之願仕候处、大猷院様御代達上聞、右寺領替地美濃国加茂郡稻口村において

拝領仕候、其上寺地山林等を御免許之御朱印被成下候、其刻彼山内ニ寺建立仕、名古屋聖徳寺ヲ兼帯仕事務相勤申候、右替地拝領之節、東泰院様ニも御満悦被為思召候上、公儀御老中ニも御札之御書被遣、右御老中松平伊豆守小出信濃守ニ之御返札、東泰院様ニ柳洞院江被下置、爾今当寺ニ所持仕候、慶安元年十月廿八日院家御免被成下候、尤官料之所無御座候、其後名古屋兼帯所者尾張八郡之触頭ニ被仰付候一、拙寺兼帯地四ヶ所、其一ハ尾州春日井郡東門前町、此境内者二千坪余御座候而、尾張様ニ頂戴仕、諸役御免許ニ而御座候、寺院之儀者延宝年中焼失仕候、只今者境内計ニ而、寺院者未建立不仕候、其二ハ国愛知郡名古屋富沢町、寺院ハ万治之頃焼失仕、寛之頃柳洞院再建仕候、此境内ハ諸役相懸り役地ニ而御座候、其三ハ同郡中嶋郡富田村浄慶寺、此境内老町四方先年信雄公免許之地ニ而御座候、当時看坊差置候、其四者美濃国加茂郡稲口村、則御朱印地ニ而替地拝領之砌、東泰院様ニ内陣向御坊同格ニ須弥壇等迄承御免申候、万治之頃焼失仕、只今ハ仮堂ニ而本堂者成就不仕候

一、初音御免之事者、宣如上人御事東泰院様ニ当寺十五代寛成院十六代柳洞院江御免ニ而、夫ニ代々蒙御免申候、御鍵役も十八代境智院相勤申候、御座出席之儀も寛成院柳洞院之例ニより御座江罷出申候、東泰院様ニ无尋光院様迄茶之湯等之御伽仕、且又御代番并御参内之御供をも、寛成院柳洞院相勤申候

一、常如上人御事 泥洹院様ニ柳洞院江裏頭拝領仕候

一、金襴輪袈裟宝永之比境智院拝領仕、二十代顯儀事拙僧代元文四年四月廿九日於御黒書院、右輪袈裟拝領仕候、御取頭御内用人森川左中ニ而御座候

一、拙寺儀 公儀御代々御継目之御札相勤、時服拝領、御凶事節者納経拝札独礼席ニ而相勤、御施物頂戴仕候、拙寺代々住持交代之継目之節も、御白書院ニ而各独之御札ニ而、濃州聖徳寺と御披露御座候、拙僧代ニも去年罷下り、自分継目御札申上候

一、開基閑善ニ拙僧迄二十代ニ而御座候

右ハ二十代成音院顯儀節也

延享年中本江山指上候写也

口上覚

一、聖徳寺義本地者濃州稲口村ニ而御座候、尾州名古屋ニ兼帯所有之、年中大概尾州ニ罷在候ニ付、本山表ニ而も尾州聖徳寺と呼来候ニ付、中古差上候書付、尾州聖徳寺と申上候、尤尾州御領分之外寺跡故、尾州様ニ御構之義無御座候由、聖徳寺申之候付御行申上置候、以上

未ノ七月十三日 浅草輪番 円重寺

寺社奉行所

公方様ノ寺社奉行所也

右ハ二十一代常行院顯儀御代也

此書付輪番直年ニ寺社御奉行所江持参也

3 当寺由緒之覺

当寺由緒之覺

一、当寺開基ハ、甲斐国青嶋庄住人、清和源氏之末流小笠原左衛門尉源長
顯ト申候而、往昔宗祖親鸞聖人所国經廻之砌、越後国ニ而真宗之要法
を聴聞し弟子と成、法名を閑善と改名し、夫々常隨し寛喜年中聖人帰
洛之刻、尾州葉栗郡大浦郷ニ暫滞留之内一字を建立し刻、右閑善を住
職とし、七種之靈宝を給り、即七宝山聖德寺と称し申候但大浦郷御座候由
之処其後美濃国ニ
相成申候由
ニ御座候

一、開基閑善ハ第拾世顯勝住職之節、大浦郷ハ尾州中嶋郡荊安賀村江引
越、又々其後大浦村江立歸り、夫々永正年中尾州中嶋郡富田村江引越
申候、第拾三世顯勝住職之時天文十八年四月下旬織田信長公美濃国稲
葉山之城主斎藤山城守と始而対面之時、富田村聖德寺ニ而参会御座候
而、富田村境内免許之制札、天正拾貳申年三月十七日織田信雄卿ハ被
下置候、其後豊臣秀吉公富田村聖德寺江数度被為成、江州浅井之一族
秀吉公と合戦之時、顯勝無二之忠義を抽敵之為寺内悉被焼失、慶長四
年之頃美濃国葉栗郡三ツ屋村江引越申候、依之秀吉公ハ忠賞として寺
領貳百石、右三ツ屋ニ而被下刻、秀吉公之御朱印并五奉行ハ之書翰爾
今所持仕候、天正十七年丑十一月廿八日之事ニ而御座候、其後慶長七
寅年洪水ニ而三ツ屋村寺領滅没仕、慶長八卯年尾州春日井郡清州江引
越、同拾五戌年尾州名古屋東寺町江引越申候、右東寺町寺地之義ハ其

節 源敬様ハ拝領仕刻、駿河町通禪寺町南西角步数貳拾五步余有之候、

其後寛永年中富沢町ヘ引越申候義ニ御座候、且又右之通慶長年中寺領
滅没ニ付、当寺第十六世頼元江戸表江罷下り、寺領替地拝領之義奉願
候処、正保四年中 大猷院様御代美濃国加茂郡稲口村ニ而替地貳百石
拝領仕候、其上寺地山林等迄御免許之御朱印被成下義、於今御代々
御朱印頂戴仕来候、其刻寺領稲口村ニ而寺建立仕刻、名古屋聖德寺兼
帶仕候、右替地拝領之節、右為御札本山御門主東泰院宣如上人ハ 公
儀御老中まで御書被遣、其節御老中松平伊豆守殿小出信濃守殿ハ之返
翰、宣如上人ハ頼元江被下、爾今取持仕候

一、公儀 御代々御繼目之御目見触札にて相勤時服拝領仕、且又発御之
節納経錢札独札席ニ而相勤御施物頂戴仕候、住持自分繼目之節ハ一束
一本献上、御白書院おいて格独之御札相勤申候、右例証等、左之通ニ
御座候

一、天明六年丙午九月八日、浄明院様発御ニ付、同十月廿一日、東叡山お
いて納経拝札独札席にて相勤申候

一、同壬子十月廿日、東叡山中戒善院おいて御施物鳥目貳拾貫文頂戴仕
候

一、天明七丁未五月朔日、自分住職御札、御白書院おいて牧野越中守殿
土屋能登守殿御取合御披露、一束一本献上、格独之御札

一、同月十五日、御代替之御札、御白書院おいて松平和泉守殿御披露、
一束一本献上、独札

一、同月十九日、於檐之間、時服貳ツ拜領、爾^レ後御暇取仰渡候事

左之通 御代々前々々相勅来申候寺格にて御座候事

一^後、源教様御時代拝領御除地左之^二とく

東本町駿河町通禪寺町角、步数二千二拾五步余、慶長十五戌年拝領

一^前、御朱印貳百石

右領知、濃州加茂郡稻口村^ニ而御座候事

一、瑞龍院様御寄附祠堂金

三拾両、右^ハ瑞龍院様御姫様御俗名元姫君様信白院様と奉称刻、当

寺^ニ御靈屋有之、御年忌御祥月御命日等説經執行仕候

4 由緒書

(表紙)

由緒書

七宝山聖徳寺

由緒書

一、拙寺開基閑善儀者、淳和天皇後胤六孫王經基公^ハ十四代之末流小笠原左衛門尉長頭被申候、祖師聖人越後国御化導被遊候、然^ルニ長頭不計も 聖人之蒙 御化導候処、信心開發仕捨家御弟子と相成、法名を閑善と被下置候、夫^ハ常随給事仕候、御帰洛之^レ砌も御供仕、美濃

国羽栗郡大浦郷と申所御逗留被遊候、御教化を蒙ル道俗草堂を立、

聖人を入奉る、尚御帰洛^ニ付而^ハ、御別^レを悲、御弟子之中老人御差置

被下、永く御法流を御伝へ被下候様こと願^ニ任也、閑善を此地^ニ止置

給ふ、其節為御形見七種之名物を被下置候、左之通

祖師聖人鏡之御影

鶴丸劔弘治年中紛失、右替りとして東察院様御筆劔
先六字御名号被下置候

松風茶臼

龍樹菩薩玉眼

天親菩薩舍利

曇鸞大師御骨

十字御名号祖師聖人御真筆、聖徳
寺始之本寺ニ御座候

則山号七宝山寺号聖徳寺と給り候事^ニ御座候、右寺号之儀^ハ往昔^ハ大浦郷^ニ聖徳太子御自作之木像有之候、然^ニ今度草堂を立 聖人を入奉り候処、十字御名号を本尊と崇給候、又傍^ニ右木像を御案置被遊仰候様^ハ、是^ハ和国之教主也、宜聖徳寺と名乗へしと被仰候由申伝候事^ニ御座候、比^ハ寛喜年中^ニ御座候、其後も色々拝領仕候品々御座候得共、度々之焼失^ニ而只今所持仕候品々、御代々様御拝覽之通^ニ御座候、拙寺開基閑善^ハ七世寿頭儀、永享二年七十三歳^ニ而大谷御廟^ニ為参詣上洛仕候処、信證院様^ニ御目見申上御談教刻^ニ及ひ候得共、中所 聖人之御流義^ニ無相違旨御満悦被遊、其節我名之字可譲とて寿之御字被下置候国之上、同年九月十一日死去仕候、其子頭順数多之末寺を召連、文明

十三年山科^江参り、信證院様^江本末之御契約申上、其節本末之為^シ驗^シ六、
字御名号被下置候

一、御朱印之儀者、往昔^江濃州三屋村^ニおいて寺領御座候處、貳百石を
天正十七年秀吉公^江御朱印被成下候写

於濃州三屋村

貳百石事、被

扶助之訖、全可令

知行候也

天正十七年十一月廿一日御朱印

正徳寺

其節奉行^江御朱印御渡^ニ付、使僧為差登可申旨書翰之写

態々啓候御寺領之

御朱印出申候、慥成

使僧可被成御上候、相渡

可申候、恐惶謹言

浅野彈正弼

十一月廿五日 長吉書判

増田左衛門尉

長盛書判

石田治郎少輔

三成書判

正徳寺

御同宿中

其後慶長七年洪水^ニ而三屋村寺領も滅没仕、漸々貳百石之内三拾石余
残申候、此義関東^江願出度旨、十四代顕好申當候得共、大坂との御取
合最中^ニ而御取上も無之趣^ニ付、差様罷在候處、慶長十五年八月 信
淨院様御取成^ニ而関東御朱印御成替迄、仮^ニ檢地奉行衆^江被相渡候附
之写

已上

濃州今度御檢地之上

如先規 御寺領

高三拾貳石於三屋村

内可相収納候、是^ハ

御朱印出候内為先書

替大久保石見守奉之

如斯候、以上

平岡因幡守

慶長十五^{庚戌}

八月廿六日加田河内守

判

鈴木左馬助

判

三屋村正徳寺

右之通被成下候処、元和二年 神君様被遊 薨、御打続而同九年 台

徳院様 大猷院様御上洛之砌、東泰院様より御直ニ被仰入、内々者関

ヶ原之旧功も被思召、顕好御目見被仰付、追而可及沙汰方蒙 上意、

御見立申上帰国仕候処、其後何御沙汰も無之候、然処寛永十五年ニ顕

好死去仕候、十五代顕證父之遺言を相繼御歎申上候、仍寛永十九年改

而御当家御朱印如先規被成下候写

大猷院様御朱印

当寺領美濃国羽栗郡

三屋村貳百石之事、任先規

寄附之訖、全可收納、并

寺中竹林諸役等免許弥

不可有相違者也、仍如件

寛永十九年九月廿四日御朱印

聖徳寺

其後 東泰院様深く御歎被思召、御朱印取替之儀願上候様、顕證江御

内命被為在之候得共、急爾多病ニ而難罷下不計年月を歴候中、内々関

東其筋々江被仰入候御事之由ニ御座候、然ルニ 御当方様御末寺ニ貳百

石御朱印御座候ハ外ニ者無之御締ニも被思召候所、右地所致流失候而ハ

永久相続も無覺束御不安慮ニ被思召候ニ付、顕證弟先達子江戸徳本寺江

養子ニ遣円明と申候を被召帰、聖徳寺住職被仰付頼元と改名仕候、尚

直様関東江罷下り 御朱印替地為相頼罷下り候様被仰付候事ニ御座候、

其節門末江御印被成下候写

御印

一筆令申候、先以此地

両 御門跡様御堅固被成

御座候間可心易候、仍円明

之儀聖徳寺住持被

仰付候、各被得其意向

後馳走尤候、為其被顕

御印候者也

三月八日 多賀膳正

判

八尾右京進

判

聖徳寺

捻下坊主中

同 門徒中

右之訳柄故帰住已求数度出府仕願候事ニ御座候、別而正保元年江戸表

ニ在留仕願上、同三年十二月帰国相願帰寺仕候処、東泰院様も内々

被仰立、同四年正月被召候ニ付出府候所、二月九日松平出雲守殿令明

日登城被仕旨被申越候写

御用之儀有之候間

明十日御登城候様こと

御老中被仰渡候間

被得其意四つ時分ニ

御登城尤候、為其

如斯候、恐々謹言

二月九日 松平出雲守

判

聖徳寺

御同宿中

同十日登城之節、御渡之替地御朱印写

大猷院様御朱印

当寺領美濃国加茂郡

稲口村内貳百石事、任先規

寄附之訖、全可収納、并寺中

山林竹木諸役等免除之

永不可有相違者也、仍如件

正保四年正月十七日御朱印

聖徳寺

右以後、公儀御代々様御朱印頂戴仕候、右替地被下候、為御礼 東

泰院様御老中并寺社奉行衆江御書被遣候節、為御請栗津并多賀迄被

差越候書翰之写

翻 刻

従 門跡様御書被成下

奉拝見候、就ハ聖徳寺領

替地被

仰付御太慶被 思召之方

奉得其意候、此等之趣

御取成所給候、恐々謹言

三月二日 安藤右京進

重長判

栗津右近殿

従御門主様御尊書成被下置

拝見仕候、如御意改其之

御慶目出度奉存候、然者

内々御望被思召候通、聖徳寺

領替地如前々拝領被成、

御満足被思召候旨奉得其意

拙者式迄大慶奉存候、此等

之趣御次る刻宜願御取成候、

恐々謹言

三月十二日 松平出雲守

判

栗津右近殿

尊翰一見致拝見候

如其意新春之

御慶目出申

納候、然者今度

聖德寺領替地如

前々被成御拝領

御満足ニ被思食旨

御紙上之趣奉

得其意候、御大慶

之段奉察候、此旨

宜預御執成候、

恐々謹言

二月晦日 松平伊豆守

名書判

多賀主膳殿

一、寛永年中院家地ニ御取立被成下、慶安元年十月廿八日十五世寛成院

素絹御免、但寛成院儀御鍵役被為仰付其砌巡讀ニ為仰付候

一、同年同月同日十六世柳洞院頼元素絹繼目御免、但住職之節御家老衆

ハ尾州御門末江御奉書被成下候

右両代共別助音御免

其後宝永七年十一月廿八日当寺十八代永元之砌ハ唯今ニ迄別助音

旨奉蒙御免候

一、東泰院様御代、拙寺十六世柳洞院頼元義格別御親被為寄節、御自登之上紋紗并縮緬御直綴御依用之御輪袈裟等其外御直書被下置、時々拝領物等被仰付候、爾今所持仕候、猶其砌本坊濃州稲口御堂向、其諸事御坊同様ニ奉蒙御免候

一、東泰院様格別ニ被思召御遺言ニよりて右代様ハ、御代々御分骨拝領仕候

一、御代々様宝物拝覽被遊候事

一、裏頭之事

年号不相知、沍泥院様ハ当寺十六代目柳洞院頼元江拝領仕候

一筆令啓候、然者此裏

頭自御隠居様其方江

被遣候、御着服可被成之由

仰之事ニ候、恐々謹言

源廣院

端月十五日

清含

柳洞院殿

一、金入輪袈裟之事、正徳元年七月二日於御黒書院十八代永元江金入輪

袈裟拝領、十九代頭榮儀ハ早世ニ而金入輪袈裟拝領以前死去仕候

一、元文四年四月廿九日於御黒書院二十代頭儀江金入輪袈裟拝領

一、寛保四年二月八日於御黒書院二十一代頭曜江金入輪袈裟拝領

一、安永九年五月四日廿二代顯正^江金入輪袈裟御免、右顯正代^江御免^ニ相成申候

一、上檀願之事

享保十九年以来上檀之願之儀も有之、区々御座候処、文政二年九月十五日於上檀之間寺附身附共^ニ上檀^江可被差出候、尤伺之上申達候旨被仰渡候、右^ニ付其以来^ハ諸事上檀^江願來候

一、逗留素絹之事

元文三年十月十二日当寺二十代顯儀之新発意顯曜^江逗留素絹御免、夫^ハ代々只今^ニ至^テ逗留素絹奉蒙御免候

一、御座参上之事、元文三年十月十五日御座参上御免、右者二十代顯儀事新発意之時^ハ御免、廿一代顯曜義者素絹繼目^ハ四日目奉蒙御免、此時^ハ代々新発意之砌^ハ御座参上奉蒙御免候儀^ニ御座候

一、寛保四年二月廿六日寺僧^江威儀袈裟奉蒙御免

一、文化十三年閏八月九日寺僧^江坊号奉蒙御免

一、金入五条之事

延享元年十月十二日二十代成善院顯儀^江金入五条御免

一、文政十一年三月十一日円乗院顯正^江於国許金入五条御免

一、二男得度之事

一、明和二年二月廿日二男得度御免

一、文化三年九月十八日二男得度御免

一、金入咒字之事、明和九年十月廿九日金入菊細御免、是^ハ代々蒙御免、

但文政七年四月十日金入咒字紫細当住顯実^江御免

一、同年閏八月十一日金入咒字紫細円乗院顯正^江御免

一、文化十五年二月朔日六ツ藤家紋御免

一、当寺儀、公儀御代替之節々一束^ハ本献上仕、独御礼奉申上候事、右之節々時、老重、拝領仕候

一、拙寺住職仕候節々^ハ於御白書院老重^ハ本献上仕候、御奏者御披露御老中御取合^ニ而独礼奉申上候事

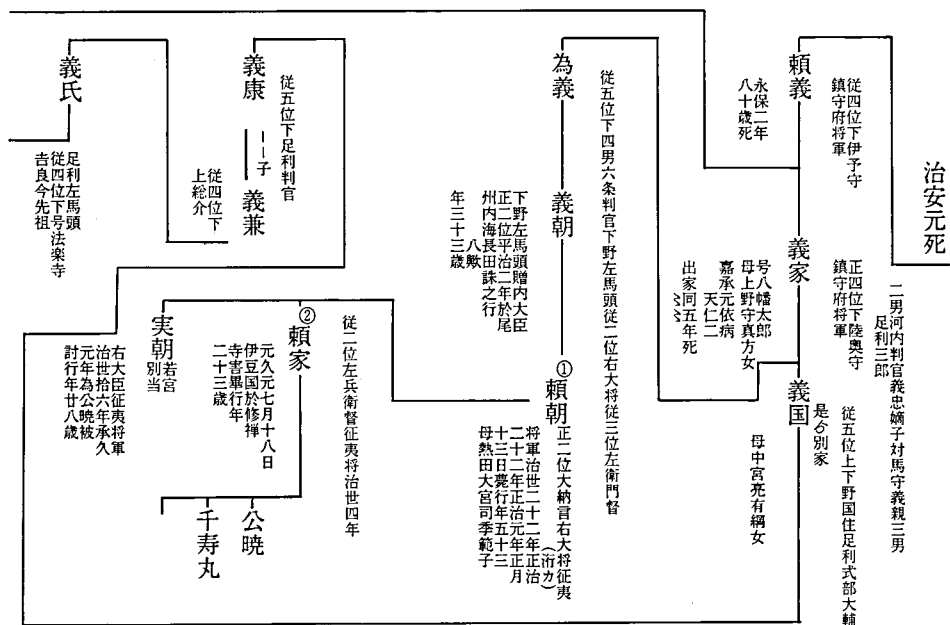
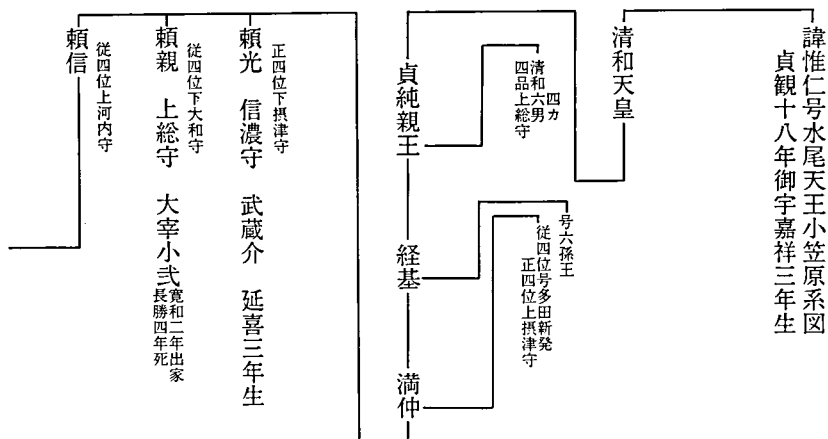
一、薨御之節拜礼被仰付候事

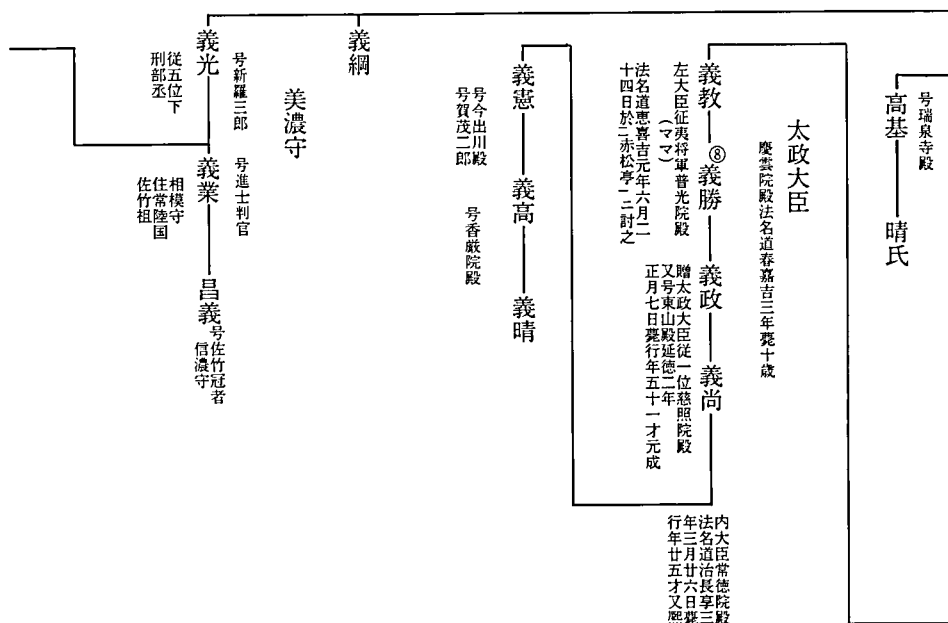
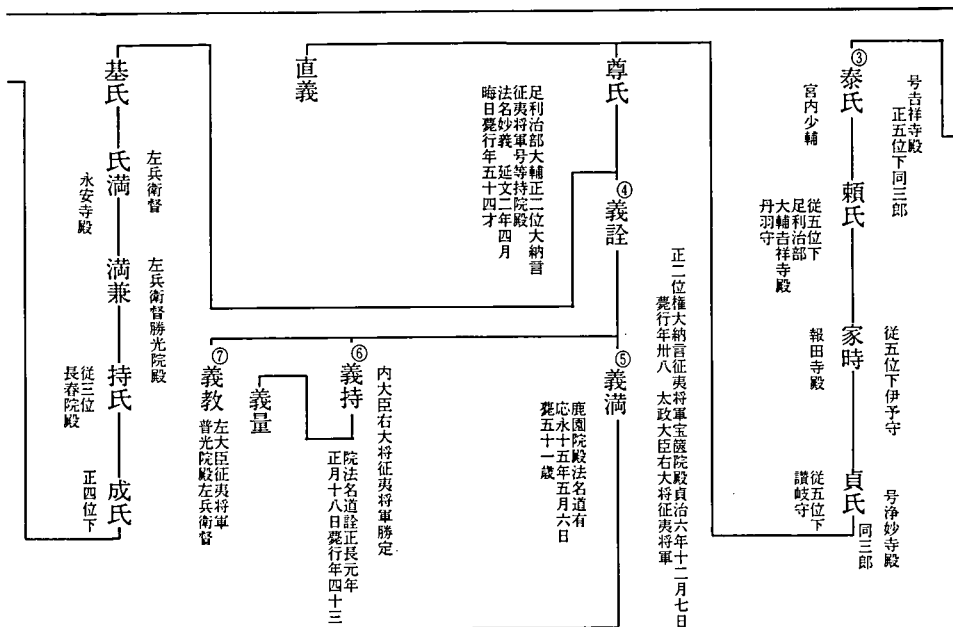
一、尾州家々^ハおいても右 公儀御取扱^ニ准而、左之通^ニ御座候寺社奉行直支配独御礼^ニ御座候

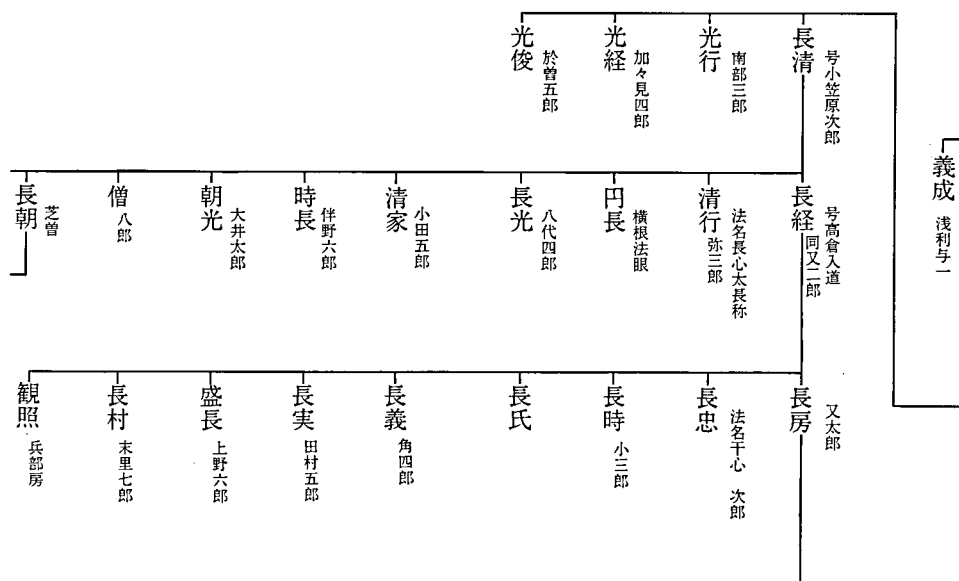
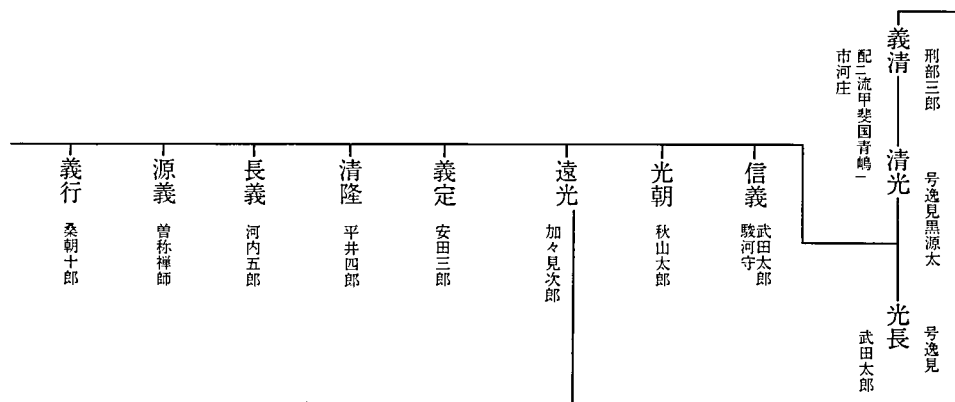
宗門^ニ而者御当方様西門様高田在輪番拙寺之外独礼之寺跡無御座候、御礼於溜り之座^ニ而^ハ御当方様西方之輪番^ハ別^ニ御座候、拙寺儀^ハ外席^ニ而僧正地紫衣地と同席^ニ御座候

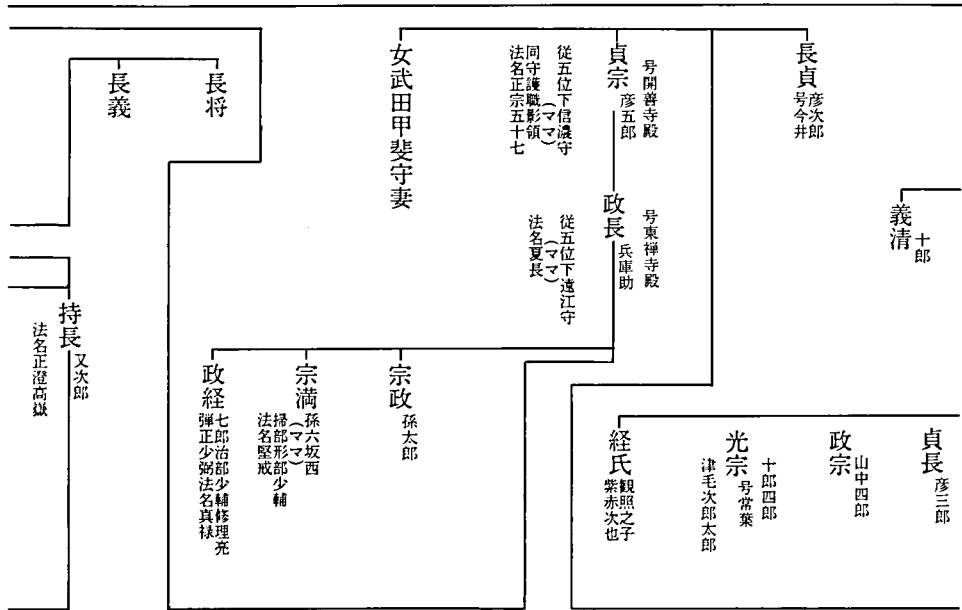
一、公辺^ニ而者御來寺第一^ニ御座候、三州本證寺^ハ御代替と自分代替^ハ御礼仕候へ共納経^ハ無御座候、同国浄妙寺者納経御座候得共御代替并自分代替之御礼^ハ無御座候、拙寺儀^ハ納経拜礼御代替自分代替^ハ右三品共御座候、御朱印貳百石と申者御一宗御末寺^ニ而者外^ニ無御座候、是^ハ全以 信浄院様 東泰院様之御厚思と難有仕合^ニ奉存候、子々孫々至迄忘失不仕候様申伝へ候事^ニ御座候、以上

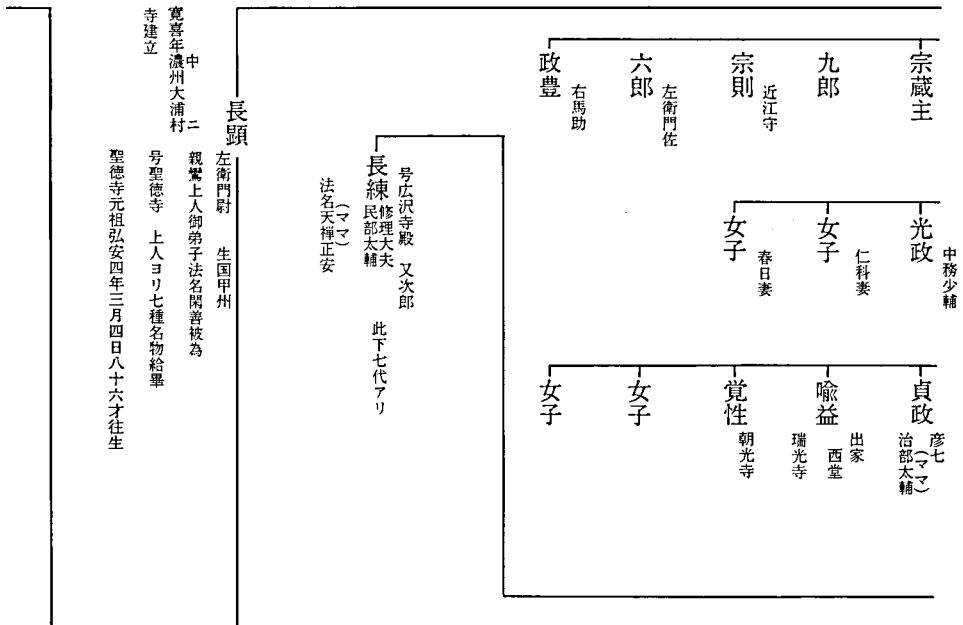
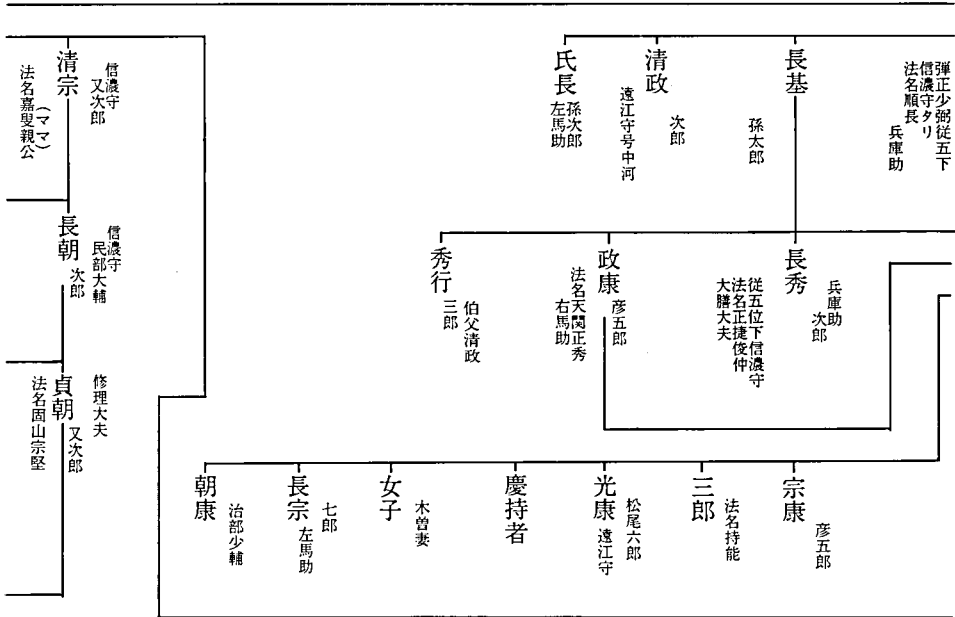
二 聖徳寺小笠原氏系図











淨顯

生国澁州大浦
正安二年四月三日
五十七歳往生

顯牧

生国同前

宗顯

生国同前

顯佐

生国同前

顯立

生国同前

壽顯

生国同前

顯祐

生国同前
三月五日

顯順

生国同前

顯清

二月十二日六十二
三三

寺内
主于尾州富田

二月十二日六十一才往生
永正年中富田村工引寺
松風茶臼出現

顯明

生国同前
異名号惠藏坊
禪九御銀松風茶臼
散失弘治二年六月
廿九日七十歳往生

了顯

生国同前
元龜元三月八日卅六歳

翻刻

顯勝

生国同前
信長寺内公富
田々々々々々
御々々々々々
可々々々々々
齊勝成也
与信參長公始
此寺内時云々
慶長二年
八月十四日
五十四歳

顯好

生国同前
慶長八年引寺
以後名護屋御城替之時
河重名護屋御城替之時
現之河重名護屋御城替之時
空江城郭作堤移御城替之時
送光緒難府然不違照於伏見
十三歲往生前正月廿六日

得芳

顯澄

生国澁州三也村人也母鈴木氏女
今在京都号覺成院具基寛文六年五月廿七日六十五歳往生

武富

生国尾州清洲人也母同
泰仕于松平右京大夫

頼元

生国同武富母亦同聖德寺中興之人也
具在本伝延宝九辛酉年二月廿二日七十三歳往生
号柳洞院 正保四年亥 大猷院御代濃尾口村
之内替地二百坪領

女子

飯田室

女子

今奉仕于本頼寺珠如
上人号三嶋女

女子 加藤妻室

号民部 生国武州江戸

秀顕

母緒氏女延宝八庚申年十二月六日四十四歳往生
号閑声院

女子

永元室三成ル享保十八癸丑年行年六拾七。卒
柳智院

女子

生国母同 立木氏妻
早世十八法名妙賢

女子

生国母同 為松岡仲庵室

永元

生国花京 高倉大納言正一位永敦卿息
秀顕之為真弟也母若松教院

奉仕 正徳元年辛卯六月定衆兼御健役被仰付
寺内 真如上人正徳六丙申歳正月三日六條
五十二歳往生号境智院 眞貞 顯貞

女子

生国尾州名古屋母ハ秀顕ノ女京都
徳正寺室卜成

顯栄長
成

正徳四年甲午年七月七日寂於横州
称讃寺行年二十六歳号久遠院

生国并母同上宝永元甲申年二月
寺務相統

永敬

生国并母同上今尾西願寺住職

女子

生国并母同上常通寺室卜成

顯儀長
雅

宝暦九年己卯十二月廿六日

行年五十八歳号成善院

永元第五子生国并母同上顯栄養子トス
正徳四年午年八月廿九日寺務相統寛保
三癸亥年七月廿三日定衆兼御健役
仰付ラル宝暦三癸酉年二月一日隠居

女子

早世

顯曜長
友

天明五乙巳年六月九日寂

行年五十九歳号常行院

顯儀二子 生国尾州名古屋母ハ三州中郷浄妙寺
女宝暦三癸酉年二月廿七日寺務相統
安永八己亥年四月六日類火ニテ本堂庫
裏悉焼失天明元辛巳年八月十二日
尾州寺社奉行所願濟再建新始

空照

生国并母同上濃州表佐宝光寺住職

「顯秀

生国并母同上濃州表佐宝光寺住職

顯正

天保十三壬寅年七月十四日寂

行年八十三歳号円樂院

生国濃州表佐邑宝光寺顯秀
第二子顯慶子ト成天明五乙
巳年八月九日寺務相統寛政九
丁巳年十二月十四日定來兼御
仰ヲ蒙リ其後依願退役文化八辛
未年八月六日当寺再建令成就ノ
一段奇特之旨ニテ尾張殿ヨリ銀
一枚賜之文化十三丙子年四月
隱居院号ヲ名ク同年四月十八日
再定兼御殿役仰ヲ蒙リ其
後以願兼御殿役仰ヲ蒙リ其
達如上人ヨリ六藤家紋免許

顯実

弘化二乙巳年正月廿日寂

顯正一男
行年六十歳号稻口院

生国尾州名古屋顯正嫡子幼名
竹丸文化十三丙子年四月十二日
寺務相統文政二己卯年十二月
廿九日尾張殿へ目見独礼ニ成

翻刻

女子

名鶴
生国同上寛政九年丁巳年九月
二日卒行年十三歳法号照見

女子

名尾上
生国同上寛政十一年己未年九月三日
卒行年七歳法号秀貞

常丸

生国同上寛政九丁巳年九月十六日
卒行年二歳法号顯誠

顯周

文政六癸未年四月廿三日寂
行年二十六歳号法証院
生国同上顯正第五子顯実養子
ト成
文正六年御本山住職相濟ム然ル処尾州

並丸

生国同上文化三丙寅年正月十九日卒
行年七歳法号顯信

寺社御奉行所へモ顯奉ル
御国法へハ住職顯ナシ依テ以來モシ御本山エ付
世代書指出ストキハ廿四代顯周ト相認メマウスベク
尾州寺社御奉行所并公義表ハ住職ニテ
ナキユヘ卅代ノ内へハ入レマジク事

女子

名千保
飯田街養念寺義曜室

女子

名八重
文政七年甲申五月廿九日卒
行年九歳法号証貞

女子 名幾世
文政二己卯年五月七日卒行年
二歳法号証果

女子 名留

男子 名菊丸
後号右衛門督

男子 名政丸

男子 名久丸

(付箋)

- ①此天下ノ始
- ②ヨリトモ子
- ③ヨシ氏ノ子也
- ④尊氏ノ三男
- ⑤義詮チャク子
- ⑥義満ノチャク子
- ⑦義満ノ三男
- ⑧義教チャク子

[補遺]

女子 名千保

生国尾州名古屋母ハ越前国府中
浄秀寺覚音院慶嚴女飯田町
養念寺義曜室卜成

女子 名八重

生国并母同断文政七^甲年五月
廿九日卒行年九歳法号証貞

女子 名幾世

生国并母同断文政二^己卯年五月
七日卒行年二歳法号証果

女子 名留

生国并母同断小桜町珉光院秀蘭
室卜成

嚴頭長
幼名菊丸

顯実一男公名右衛門督顯闌生国并母
同断天保十二^辛年四月十二日寺務相統
嘉永元^戊年五月十日本山ヨリ一字拝領
寺跡工免許依而改名安政六^己年十月
十四日定衆并御鍵役被申付稲口村
聖徳寺ハ正保四年創立己来守護不
入之地 王政一新之際明治二巳年
九月廿四日ヨリ笠松^{同五年改ム}岐^{岐阜県ト}管轄ト成ル
明治三^庚年二月五日辞職願無許可
休役被申付明治六^癸年三月十三日定衆
并御鍵役再勤被申付明治七年六月
廿日教導職試補被命明治八年十二月
八日補中講義明治九年八月稲口村ヨリ
東門前町元寺地工移転ヲ願内務省大蔵
省聞届之上同年十月三日岐阜県許可
同年十月三十日愛知県許可^{但元朱印高明治七年ヨリ通減様ト成ル}
同年八月廿五日隱居明治十年 月 日定
衆并御鍵役病氣ニ付前年ヨリ辞職ヲ願
再勤被申付明治十九年三月廿五日辞職願

依テ聞濟

顯門

幼名中務郷生国并母同断明治三千年
六月十二日卒行年四十七歳号唯淨院

顯秀

幼名民部郷生国并母同断能州羽喰村
本念寺工養子行年三十七歳号常心院
嚴同

女子

名菊枝

生国尾州名古屋母ハ飯田町養念寺女
行年五歳卒号冷香院

女子

名鶴

生国并母同断菅原町珉光院秀繼
室ト成

女子
名留

生国并母同断

嚴実
幼名保丸

嚴頭一男公名一位顯康公名廢二付号

槐院生国并母同断明治七年十二月二日

教導職試被命明治九年八月廿五日

寺務相統同年十一月二日富沢町聖徳寺

富田村浄慶寺兼務被申付

顯界

幼名信丸生国并母同断行年五歳卒

号蓮華院

女子
名都生

生国京都六條母同断

顯誠

幼名元丸生国京都六條母ハ越後国新潟

勝樂寺即浄院了恵女慶応二寅年九月

廿五日卒行年二歳号寛祐院

三 惣末寺五尊御裏留

惣末寺五尊御裏留

文化九申年九月

当寺式拾二代

惣末寺

五尊御裏留

申九月

文化九^甲年九月迄^{之末寺巡回}
御裏改

一筆可申候、然者 顕如様

教如様大坂 御在居之節其方^江

木仏・御本尊被成 御免候由

承届節御理申上候、如前々相違

有間敷候、仍被顕

御印候者也、

多賀主膳正

翻 刻

六月七日

書判

聖德寺下名古屋

光蓮寺

浄空

大谷本願寺釈常如^{御書判}

寛文十三歳癸丑五月上旬書之

親鸞聖人御影

聖德寺下尾州愛知郡

名護屋光蓮寺常住物也

願主釈久元

本願寺釈常如^{御書判}

延宝陸季戊午孟夏十二日

上宮太子真影 聖德寺下尾州

愛知郡名護屋

光蓮寺常住物也

願主釈久元

本願寺釈常如 御書判

延宝六年戊午四月十二日書之

三朝高祖真影 聖德寺下尾州

愛知郡名護屋

光蓮寺常住物也

願主 釈久元

本願寺 釈達如御印

歎喜光院真影 文化三年^{丙寅}十月三日

聖德寺下尾州

愛知郡名護屋

駿河

光蓮寺常住什物也

願主 義天

—以上光蓮寺—

本願寺 釈達如御判

歎喜光院真影 文化三年丙寅初冬三日

聖德寺下尾州

春日井郡法成寺村

八竜山

徳圓寺常住物也

願主 大定

依其方望

色衣歎喜光院御影

被成 御免則

御名御裏御染筆被遊

下候間、難有可被存候、為其

如斯候也

嶋 主膳

文化三年 綱淇書印

十月三日 宇野相馬

直延書印

聖德寺下尾州

春日井郡法成寺村

八龍山徳圓寺願主大定

—以上徳円寺事（後出）—

一拙寺開基閑善坊俗姓ハ

清和天皇後胤六孫王

經基公十四代之末流小笠原

左衛門尉長顯と申候、

拙寺儀

一御開山様寛喜年中御建立

二而御座候、

一壽頭へ茂

信證院様御字拝領仕候、

一拙寺儀往古より寺領御座候処、

秀吉公の式百石と相定

御朱印頂戴仕候、其後

寺領流失仕候而三拾石

相残り居申候、

大猷院様之御代

東泰院様格別之以

思召

公儀江被 仰立正保四年

唯今之寺領濃州

稲口村ニおゐて

御朱印式百石如元替地、

拝領仕候、○寛永年中の御坊同様迄

△一東泰院様の御代々

御分骨拝領仕候、

七宝山

聖徳寺

—以上插祇—

尾州海西郡高切村長久寺御尊

御裏書焼失ニ附御本山の

御免書写如左

先年其寺へ

木佛尊像被成

御免候右之御免状焼失之由改之趣

□上之所、此度無相違改給付候間、

難有被存向後可被得

其意候、仍被頭

御印者也

享保十七年

九月七日

横田主水

敬 印

若林長門

貞政印

聖徳寺下尾州

海西郡高切村

長久寺 湛瑞

御開山様 一如様御判

御裏

正保四年^亥十一月八日

高祖太子 真如様

御裏書

信證院様 宣^真如様御判

御裏書

御絵伝 御裏 達如様御判

羅網

御厨子形

右御免書

御裏書

達如様御判

—以上長久寺—

加賀野井村 極楽寺

一大品尊

御裏不相知

一祖師聖人 真如上人御名斗り

一教如上人真影

宣如上人御裏

寛永十四^丁丑期臘月廿五日書

濃州安八郡加賀野井村

太子堂極楽寺常住物也

願主釈浄念

本願寺釈達如御判

一信證院真影 寛政十一年^{己未}仲春三日

聖徳寺下濃州中嶋郡

東加賀野井邸

太子堂極楽寺常住物也

願主澄滄

一七高祖御裏

釈真如御判 願主龍長

一前住上人御影

達如上人御名斗り

一清淨光院真影 本願寺釈乗如御判

天明五年^{乙巳}十二月廿二日

聖德寺下濃州中嶋郡

東加、野井村太子堂

極樂寺常住物也

願主恵翁

寄進人七人^{法名}

一御絵伝 釈乗如御判

縁起第一之卷 天明五季^{乙巳}季冬廿二日

聖德寺下濃州中嶋郡

東加、野井村太子堂

極樂寺常住物也

願主恵翁

寄進人有

依其方望、従往昔安置

太子木像^并此度

七高祖御影被成

御免則御名御染筆

被遊下候間、難有可被存候、

為其如此候也、

享保十七年 横田主水^{名書印}

九月朔日 若林長門^同

聖德寺下濃州

安八郡加賀野井村

太子堂極樂寺

願主 龍長

依其方願

御開山様厨子形^{無罪}被成

御免候間、難有被存向後可被得其意候、

為其如此候也、

文化七年 川那郡將監

宗政印

四月九日 嶋主膳

綱湛印

聖德寺下尾州

中嶋郡上祖父江村

信了寺 諦意

—以上極樂寺—

依其方願羅網被成

御免候間、難有被存向後可被得其意候、
為其如此候也、

文化七年

川那郡將監

宗政印

四月廿七日

嶋 主膳

網湛印

聖德寺下尾州

中嶋郡上祖父江村

信了寺 諦意

一大品絵

巻 幅

右之御裏古キ故文字相知_レ不申候

一木佛

右御裏無仕候て 則御免狀御座候、其文言曰
依其方望_ニ

木佛尊像_并寺号信了寺被成下

御免候間、有難被存向後可被得其
意候、仍而被頭御印者也、

石井隼人

天和二_{壬戌}

書印

十月十日

聖德寺下尾州

中嶋郡上祖父江村

能順

木仏之御印書右之通_ニ御座候、
今年迄百四年

一祖師聖人御裏

釈一如印

願主能順

今年迄百二年

一御代御裏

釈一如御印

願主能順

今年迄九十七年

一上宮太子御裏

釈真如御印

願主能順

今年迄八十二年

一七高僧御裏

釈真如御印

願主能順

今年迄八十二年

一蓮如上人真筆六字名号

老幅

一佛舍利

老塔

一弥陀尊像御丈四寸五分 恵心僧郡作

一和讃之切レ

常如上人筆

一佛閣 但シ四間四方

老 宇

一御堂屋敷 但シ旦方十二軒 七畝

右之通無相違御座候、以上

翻 刻

天明六^午九月

上祖父江村

信了寺

御岸

—以上信了寺—

釈常如印

一方便法身尊像 松林寺

安置焉

延宝五年二月十五日

祖師御裏

一 釈一如印 願主秀悦

本願寺釈宣如印

一蓮如上人身影 (ママ) 寛文五年 辛丑季夏廿五日書之

聖徳寺下尾州春日郡

仲村松林寺常什物也

願主釈浄誓

讚有

一上宮太子 釈真如御印書

願主秀悦

延宝五年二月十五日

一七高祖 同断

釈乗如御印

一本願寺親鸞聖人縁起 寛政元年^{己酉}四月十六日

聖徳寺下尾州

春日井郡仲村

松林寺常什物也

願主慈門

寄進人^{了圓}妙圓

一六字名号 蓮如上人御筆

一六字名号 證如上人御筆

右之通^三相違無御座候

右ハ松林寺分也

—以上松林寺—

釈常如御印

一方便法身尊像 徳円寺

安置焉

大谷本願寺釈一如御印

一親鸞聖人真影 貞享元年霜月朔日

名古屋聖徳寺下尾州春日井郡

法成寺村徳円寺常什物也

願主玄碩

本願寺釈達如御印

一歆喜光院真影 文化三季^{丙寅}初冬三日

聖徳寺下尾州

春日井郡法成寺村

八龍山徳円寺常什物也

願主大定

一六字名号 證如上人御筆

讚有

一上宮太子 釈真如御印

願主玄碩

一七高僧 同斷

蓮德寺

願主釈了誓

本願寺釈宣如御印

一教如上人真影 元和三_丁巳十月廿二日

大谷本願寺釈宣如御判

聖德寺下春日井郡

元和九_癸亥曆十月廿二日

法成寺村德円寺常什物也

願主法專

本願寺親鸞聖人御影

聖德寺下尾州海東郡

穂保郷乾村蓮德寺

常住物也

釈從如御印

宝曆三_癸丙年五月十七日

願主釈了誓

一大谷本願寺親鸞聖人縁起 聖德寺下尾州春日井郡

法成寺村德円寺

什物也

本願寺釈琢如 御判

寛文三稔癸卯暮春廿二日

願主秀円

三朝高祖真影

聖德寺下尾州海東郡

右之通相違無御座候、以上

—以上德円寺—

穂保郷乾村蓮德寺

常住物也

釈宣如御判

願主釈順了

寛永十三_丙子期仲秋十八日

一木佛尊像 聖德寺門徒

本願寺釈琢如 御判

尾州海東郡

寛文三年癸卯五陽廿二日書之

穂保郷乾村

上宮太子真影聖德寺下尾州海東郡

翻 刻

穂保郷乾村蓮德寺

常住物也

願主釈順了

六字名号

蓮如上人御筆

右 蓮德寺

—以上蓮德寺—

本願寺釈教如御判

慶長八^癸卯稔十一月廿八日

教如寿像

聖德寺門徒尾州

海東郡穂保郷乾

願主釈順了

方便法身尊像

正覺寺

安置焉

延宝五年二月十五日

大僧正常如^{御判}書之

延宝陸季戊午孟春廿五日

大谷本願寺親鸞聖人緣起

聖德寺下尾州

海部郡穂保郷

乾村蓮德寺

常住物也

願主釈順了

親鸞聖人御影

願主

教順

釈一如御判

釈真如御判書

上宮太子

願主

教順

釈真如^{御判}書

七高祖

願主

教順

本願寺釈顯如^{御判}聖德寺下蓮德寺

大品尊

其外相知レ不申候

釈真如御判書

蓮如上人御影 願主

了順

右八〇村井正覺寺

御裏

釈宣如

寛永貳十癸未期仲秋時正

木仏尊尊像 尾州海西郡本部田村

聖覺寺

願主聖德寺

釈顯澄

釈一如

願主釈演尔

右祖師御裏

釈一如

願主演尔

寄進宗悦

右善知識琢如上人御裏

翻刻

—以上正覺寺—

本願寺釈教如

方便法身尊形 願主釈玄智

六字名号 卷幅

蓮如上人御筆

大僧正常如

延宝四季丙辰仲春六日書之

大谷本願寺親鸞聖人縁起

聖德寺下尾州海部郡

本部田村聖覺寺常什物也

願主釈演爾

本願寺釈琢如

寛文四季甲辰林鐘廿二日書之

三朝高祖真影聖德寺門徒尾州海部郡

本部田村聖覺寺常什物也

願主釈玄智

本願寺釈琢如

寛文肆歲^申辰

上宮太子真影 季夏廿二日書之

聖德寺屬下尾州海部郡

本部田村聖覺寺常什物也

願主釈玄智

右本部田村聖覺寺

御裏

—以上聖覺寺—

本願寺釈教如

慶長九^甲辰季二月廿八日

教如寿像

聖德寺門徒尾州海西郡

日置庄南一色村成満寺

常什物也 願主釈空昭

前大僧正真如^{御判書}

一龍谷山本願寺大祖聖人縁起

願主空賢

一木仏尊像

寛永三^{丙寅}二月三日

聖德寺門徒尾州東條村成徳寺

願主釈空昭

大谷本願寺釈常如 書之

寛文六季仲秋廿二日

三朝高祖真影 聖德寺下尾張国

海西郡東條村成満寺

常什物也

願主釈空順

大谷本願寺釈宣如

一親^駕聖人御影寛永第十四^{丁丑}期

臘月十六日書之

聖德寺下尾州海西郡日置庄

南一色東條村成満寺常什物也

願主釈空誓

大谷本願寺釈常如 書之

寛文六稔八月廿二日

上宮太子真影聖德寺下尾州

海西郡東条村

成満寺常什物也

寄進釈空昭

願主釈空順

大品様 本願寺釈教如

方便法身尊像

其外ハ相訳リ不申候、

六字御名号 御筆相知不申候、

右 東条村 成満寺也

海西郡落上村

光蓮寺

—以上成満寺—

被成 御免候間難有可被存候、仍被顕御印者也

八木采女

元禄三年 書印

九月朔日 下間治部卿

書印

聖德寺下尾州

海西郡落上村

光蓮寺

正伝

御本尊 御裏無御座候

大谷本願寺釈宣如

元和九癸亥曆十月廿八日

本願寺親鸞聖人御影

聖德寺下尾州海東郡

門間庄□方村

願主釈祐乘

其方義為尾州聖德寺末寺之処
寛永十四歲丑十二月晦日 木仏願之節
御書出直參ニ被□請候、依之今度任改往古⁽²⁾
之通聖德寺末寺ニ被 仰付候、且又從
先年為惣道場之処、門徒中依願自庵

翻 刻

本願寺釈教如

慶長拾壹^{丙午}稔七月四日

顯如上人真影 尾州海西郡市江嶋

東方村聖德寺門徒

願主釈心

達如

寛政六年四月朔日

歛喜光院御影聖德寺下尾州

落之上村光蓮寺

願主釈智悦

本願寺釈琢如

寛文二稔^{壬寅}季夏廿二日書之

三朝高祖真影聖德寺下尾州海部郡

落上村光蓮寺常什物也

願主釈正賢

寄進人釈尼妙信

本願寺釈琢如

寛文二稔^{壬寅}夏廿二日書之

上宮太子真影聖德寺下尾州海部郡

落之上村光蓮寺

常什物也

願主釈正賢

釈一如

大谷本願寺親鸞聖人縁起

願主正伝

六字御名号

蓮如上人御筆

大品尊

御裏 蓮如上人

分り兼申し候

善知識不相訳

方便法身尊像 明応四年^{乙卯}六月十三日

荊安賀聖德寺門徒

尾州海東郡松嶋村

願主不相知

唯能常称如来号

蓮如上人

応報大悲弘誓恩 御筆

右 落上之村 光蓮寺

—以上光蓮寺—

蓮如上人御影 尾張国二老村総道場

光輪寺常什物也

天和三年三月廿二

木仏尊像並寺号 御免候

今度自庵被 仰付

御印書御成替 被頭

御印者也

寛政六年 井上要人書印

閏十一月十四日

稻波外記書印

积真如 書

右ハ上宮太子御裏

光輪寺常住物也

二老村惣道場

聖德寺下尾州海西郡

积真如 書

聖德寺下尾州

海西郡二老村

光輪寺

智円

右之外ニ御裏無御座候

大品尊

但シ御裏相知レ不申候

右二老村

光輪寺

—以上光輪寺—

右ハ祖師御裏外ニ一字も無御座候

総道場光輪寺

翻刻

釈宣如御判

太子

寛永参_{丙辰稔}

釈真如判

木佛尊像 三月十七日

願主玄碩

聖徳寺下尾州

門間庄 願主釈西念

七高僧

大谷本願寺釈琢如_{在判}

願主玄碩

寛文元年_{辛丑}夷則廿八日書之

親鸞_{ニホ}聖人御影

釈宣如御判寛永十四_{丁丑}仲春廿四日

聖徳寺下尾州

一木佛尊像 聖徳寺下尾州中嶋郡浅井村

海部郡誓入寺

奥谷山善勝寺願主了西

常住物也

釈宣如上人御判

大谷本願寺釈教如判

一親鸞聖人真影寛永十三_{丙子}十二月五日

文祿四_{乙未}年九月廿日

聖徳寺門徒中嶋郡浅井村

顯如上人真影

奥谷山善勝寺願主了西

聖徳寺門徒尾州

海西郡日置庄

釈達如御印

稻葉村

一歛喜光院真影 文化三_{丙寅}二月四日

願主釈西□

聖徳寺下尾州中嶋郡中野村_中

善勝寺願主□廣

—以上誓入寺—

积宣如印

一上宮太子真影 寛永十三_{丙子}極臘月五日

聖德寺下中嶋郡浅井郷

奥谷山善勝寺願主了西

积宣如御印

一三朝高僧真影 寛永十三_{丙子}季冬廿五日

聖德寺下尾州中嶋郡浅井郷

奥谷山善勝寺願主了西

积実如御印

一大品尊

积教如御印

一蓮如上人真影 慶長七年十二月十七日

尾州中嶋郡浅井郷奥村

願主了西

右ハ善勝寺所持

积達如御印

翻刻

一御絵伝

右ハ善勝寺御絵伝御裏

——以上善勝寺——

一大品尊 壹幅

右御裏相知_レ不申候、

积宣如御判

一木佛尊像

寛永十五_{戊寅}期三月

聖德寺下尾州中嶋郡

浅井村法專坊 願主积□空

常如御判

一祖師聖人御影 壹幅

寛文七如月廿八日

聖德寺下尾州中嶋郡

浅井村明増寺

願主积浄了

教如判

一教如寿像 壹幅

慶長七^{壬寅}九月廿八日

尾州中嶋郡浅井郷奥聖徳寺下

願主釈浄了

一如御判

一三朝高祖真影

元禄四年十二月廿五日

願主浄慶

一如御判

一上宮太子真影

元禄四年十二月廿五日

願主浄慶

一六字名号

老幅

右蓮如上人御筆

一御絵伝

四幅

達如御判

――以上明増寺――

釈宣如上人御印

一木佛尊像 寛政十四^丁 丑期初冬廿一日

聖徳寺下尾州

中嶋郡城屋敷村

光福寺

願主釈了誓

大谷本願寺釈宣如上人印

一祖師聖人御裏 寛永十九^年 載晚秋廿八日書之

親鸞聖人御影 聖徳寺門徒尾州中嶋郡

城屋敷村光福寺常住物也

願主釈
名不知

本願寺釈琢如御印

一三朝高祖真影 寛文式稔壬寅季夏廿二日

聖徳寺下尾州中嶋郡

城屋敷村光福寺常住物也

願主釈休伝

本願寺釈琢如御判

一太子真影 寛文式季^{壬寅} 寅林鐘廿八日

聖徳寺下尾州中嶋郡

城屋敷村光福寺常住物也

願主 积休伝

一 願如上人真影

右之外文字相不分

本願寺 积乘如上人印

一 功德聚院真影 明和三丙戌年四月二十日

聖德寺下濃州中嶋郡城屋敷

光福寺住物也 願主 秀嚴

一 大品様御裏 文字相不知

一 六字名号 真如上人御筆

一 十字名号 同 断

积 從如判

一 大谷本願寺親鸞聖人縁起宝曆四^甲 戊歲八月五日

聖德寺下尾州中嶋郡

城屋野村光福寺住物也

願主 积秀嚴

右之通^ニ 而御座候

右光福寺御裏

二 枝村

丙 二月九日^ニ 写ス 興雲寺

一 木仏尊像 积常如御判

方便法身尊像 興雲寺

安置焉

延宝五年二月十五日

大谷本願寺 积常如御判

一 親鸞聖人御影 延宝三年^{乙卯} 孟冬中旬書之

聖德寺下濃州中嶋郡

一枝村興雲寺常住物也

願主 积誓順

积 一如^{御朱印}

太子御裏書 願主 誓順

— 以上光福寺 —

釈一如御朱印

七高祖御裏書

願主誓順

前住様御影御裏

御名モナシ
御朱印斗

御名御讀有
一高祖太子御裏

一如上人様御判 願主釈誓順

添状取次 横田主水 貞享三

松尾左近 三月十九日

聖徳寺下濃州中嶋郡一ノ枝村興雲寺

願主誓順 寄進妙因

本願寺釋宣如御判

一教如上人真影 寛永十六己卯期臘八書之

聖徳寺門徒濃州石津郡

一枝村・願主釈誓玄

一一如上人真影 釈真如書

願主誓可

右八一如上人御裏

大谷本願寺釈從如御判

一功德聚院真影 延享二乙丑歲六月廿日書之

聖徳寺下濃州中嶋郡一枝村

興雲寺住物也

願主□巖也

寄進人淨誓

本願寺釈達如御判

一信證院真影 寛政十二年庚申晚冬廿三日

聖徳寺下濃州中嶋郡

市之枝村

興雲寺常住物也

願主昇道

一 釈真如印書

願主誓可

右絵伝御裏

一乘如上人御裏朱印斗 願主釈級昇

一六字名号 蓮如上人御筆

右之通相違無御座候

—以上興雲寺—

本願寺釈一如御判

一親鸞聖人御影

浅井村極信寺

聖德寺下尾張国

釋常如御判

浅井村極法寺

一方便法身尊像 文字消テ不相知

願主釈円西

本願寺釈宣如御判

本願寺釈從如御判

一方便法身尊形

一功德聚院真影

聖德寺下濃州羽栗郡

願主釈長円

浅平村極法寺常住物也

願主慈帆

寛文六年四月十四日被成

寄進人淨賢宗賢

御免候

木仏御書判也

依其方望木佛尊像并寺号極法寺下

被成御免候間、有難可被存候、仍而顯御書口

御印者也

一六字名号

蓮如上人御筆

一九字名号

同断

延宝五丁巳年

栗津石近

二月十五日

聖德寺下尾州葉栗郡浅平村

極法寺長円

釈真如茶書

一上宮太子

願主円西

翻刻

一三朝高僧 右同断

一三朝高僧真影

本願寺釈常如

一十字名号 從如上人御筆

寛文十二年_{壬子}五月下旬

聖德寺下尾州中嶋郡吉藤村興安寺

一御文一帖 証如上人御筆

常什物也 願主芳順

一太子絵伝一幅 祖師聖人御筆

—以上極法寺—

一上宮太子真影・本願寺釈常如

寛文十二年_{壬子}五月下旬

吉藤村興安寺宝物写

聖德寺下尾州中嶋郡興安寺常住物也

願主釈芳順

一木佛尊像 大谷本願寺釈宣如判

太子讀日法雲華世界 善種得開萌 顯通希有法 処々化群生

寛永十七年_{庚辰}仲秋時正

聖德寺下尾州中嶋郡藤吉村

一琢如上人真影

金相寺願主釈正西

釈一如御判

願主芳順

一親鸞聖人御影 大谷本願寺

外三御印

釈宣如判

貞享四年_卯十一月廿九日 横田主水

寛永十六年_{己卯}晚夏十五日書之

松尾左近

聖德寺門徒尾州中嶋郡吉藤村

聖德寺下尾州中嶋郡吉藤村

金相寺芳円

興安寺・願主芳順

一 清淨光院真影

大谷本願寺釈乗如

明和四年^{丁亥}十一月十五日

聖德寺下尾州中嶋郡吉藤村

興安寺常什物也願主^{円諦}

一大谷本願寺親鸞聖人縁起

釈乗如御判

明和五年^{戊子}三月八日

聖德寺下尾州中嶋郡吉藤村

興安寺常什物也 願主^{円諦}

一大品様御裏

方便法身尊形大谷本願寺

其外文字相見へ不申候

一六字御名号

親鸞聖人御染筆

一六字御名号

蓮如上人御染筆

一十字御名号

真如上人御染筆

翻刻

一大品絵御裏 釈證如

方便法身尊形 證如上人御染筆

一 歎喜光院真影御裏

朱印斗

御箱上二 歎喜光院寛政五年 大場齋院

四月十二日稲葉外記

聖德寺下尾州吉藤村興安寺

(添紙トシヨミ)

本願寺釈蓮如御書判

阿弥陀如来絵像

明応六^{丁巳}歲七月九日

苅安賀聖德寺門徒

尾張国中嶋郡小信村

中之坊坤栄

釈常如丸御朱印

方便法身尊像

隨岩寺
安齋焉

割御印 延宝五年二月十五日

本願寺釈常如御書判

——以上興安寺——

親鸞聖人御影

寛文八稔戊申季秋下旬書之

聖德寺下尾州中島郡

村瑞岩寺常住物也

願主釈了玄

本願寺釈宣如御書判

蓮如上人真影

寛永十六_{己卯}期初夏朔日書之

聖德寺門徒尾州

中島郡西五城村

瑞岩寺常住物也

願主釈了玄

本願寺釈一如御書判書之

上宮太子真影

延宝八庚申歲暮春下浣

聖德寺下尾張國中島郡

西五代村瑞岩寺常住物也

願主釈知賢

本願寺釈一如御書判

三朝高祖真影

延宝八期庚申姑洗廿七日書之

聖德寺下尾州中島郡

西五代村瑞岩寺物也

願主釈知賢

釈宣如御判

木仏尊像 寛永十四_{丁丑}期除夕

聖德寺門徒

尾州中嶋郡串作郷

北方村 正瑞寺

願主 釈了念

本願寺釈蓮如_{御判}

大品絵 明応六年

方便法身尊形 六月十六日

荊安賀聖德寺門徒

尾州中嶋郡中作之郷

北方 正瑞寺

願主釈 了正

—以上瑞岩寺—

大谷本願寺釈常如御判

延宝五年丁巳閏十二月上旬書之

親鸞聖人御影

尾州中嶋郡荻原村

聖徳寺下

正瑞寺常什物也

願主釈 善立

本願寺釈教如御判

證如上人真影

尾州中嶋郡北方村

聖徳寺門徒

願主釈 正誓

本願寺釈達如御判

文化二乙丑閏八月□三日

歎喜光院真影

聖徳寺下尾州

中嶋郡荻原村

正瑞寺常什物也

願主 賢立

翻 刻

本願寺釈常如御判

延宝五年丁巳閏十二月十一日

上宮太子真影

聖徳寺下尾州

中嶋郡荻原村

正瑞寺常什物也

願主釈 善立

本願寺釈常如御判

延宝五年丁巳閏十二月十一日

三朝高祖真影

聖徳寺下尾州

中嶋郡荻原村

正瑞寺常什物也

願主釈 善立

六字名号

蓮如上人御真筆

十字名号

宣如上人御真筆

御書卷通

一如上人廿一日講中

同 巻通

宣如上人十八日講中

下間大藏卿法眼

享保二年

六月四日 七里彈正

撞鐘御免

下間治部卿法橋

聖德寺下尾州

中嶋郡萩原村

正瑞寺

聞立

木佛尊像

聖德寺門徒

尾州中嶋郡

貞享四年

十月廿八日石井隼人

四本柱御免

栗津勝兵衛

聖德寺下尾州

中嶋郡萩原村

正瑞寺

賢立

親鸞聖人御影

聖德寺下尾州中嶋郡

朝宮村願林寺常

住物也

願主釈了説

寛政七年

七月廿九日

御絵伝御免

稲葉外記

——以上正瑞寺——

大本御影 御裏美如上人と申事候得共

文字相知不申候

六字御名号 蓮如上人御筆

祖師聖人真向御影 御裏文字相知不申祖師聖人

御直筆と申事

同郡二子村かへ左衛門少御直筆と申事

寄附二而御役所御坊所達之相済申候

本願寺釈達如

文化六_己 巳七月四日

歎喜光院真影 聖德寺下尾州

中嶋郡朝宮村

願林寺常住

物也願主諦立

寄進人 淨円

本願寺釈宣如

寛永十四_丁 丑仲秋廿一日書之

教如上人真影 聖德寺下尾州中嶋郡

朝宮郷浄正坊常住物

翻 刻

願主釈慶誓

釈真如書

願主了閑

太子高僧御裏右之通_三御座候

大本御影 御裏相見不申候長地_二而

蓮如上人之御筆と申伝候
水難ヨリ御裏無御座候

釈乘如

本願寺 天明四年申辰十一月九日
聖德寺下尾州

親鸞聖人縁起第一之卷

中嶋郡朝宮村

願林寺常住物也

願主 釈諦典

覚

一方便法身尊像

常如上人御判

延宝五年

蓮容寺

——以上願林寺——

二月十五日 安置焉

丁未 五月廿三日 蓮池村蓮容寺

願主全正

外二御印書
一木佛尊像并寺号御免

聖徳寺下蓮池村蓮容寺

一三朝高像真影

願主善了

常如上人御判 聖徳寺下

一親鸞聖人真影

常如上人御判

丁未 仲夏廿二日

願主聞可

延宝三年

一歆喜光院真影

乙卯七月上旬聖徳寺下

本願寺釈達如判

尾州中嶋郡蓮池村

文化二年 尾州聖徳寺下

蓮容寺願主全正

乙丑 五月十日中嶋郡蓮池村

一蓮如上人真影

年号月日 聖徳寺下

相知不申 蓮池村蓮容寺

一九字御名号 乘如上人御染筆

願主全正

蓮容寺常什物

一上宮太子真影

常如上人御判

寛文七年 聖徳寺下

一大品絵

御裏こぼれ相知不申候、

上宮太子御讚

吾為利生出彼衡

山入此目拭降伏

守屋之邪見終

顯佛法之威德

五尊樣御裏書

釈宣如判

正保第三丙曆初夏十八日

一木仏尊像 聖徳寺門徒

尾州中嶋郡

萩原村寂雲寺

願主釈休円

大谷本願寺釈常如御判

寛文五年乙巳孟秋廿八日書之

親鸞聖人御影

聖徳寺下尾州中嶋郡

萩原村寂雲寺常住什物也

願主釈休円

翻刻

本願寺釈宣如御判

正保第三乙酉期仲秋廿九日書之

蓮如上人

聖徳寺下尾州中嶋郡

萩原村

願主釈休円

本願寺釈常如御判

延宝三季乙卯季春十六日書之

上宮太子真影

聖徳寺下尾州中嶋郡

西萩原村寂雲寺常住什物也

願主釈休円

本願寺釈常如御判

延宝三年乙卯三月十六日書之

三朝高祖真影

聖徳寺下尾州中嶋郡

西萩原村寂雲寺常住什物也

願主釈休円

积一如御判

大谷本願寺親鸞聖人縁起

願主休味

第貳 积一如 願主休味

第參 积一如 願主休味

第肆 前大僧正一如願主休味

文化九年十二月廿九日 石井隼人

一森金山御免許

正久印

下間治部卿法眼

聖德寺下尾州

頼隆印

中嶋郡西萩原村

森金山寂雲寺

説三

文化十年

癸酉二月

中嶋郡西萩原村

森金山 寂雲寺

——以上寂雲寺——

御裏書写

一繪像弥陀如来 天文五^丙申年十一月

方便法身尊像

聖德寺門徒尾州中嶋郡

東興 願主東光

證如在判

一教如上人真影 寛永元^{申子}霜月三日

聖德寺下尾州中嶋郡興村

本願寺宣如在判 願主正玄

一木佛尊像

慶安元^{戊辰}仲春十七日

聖德寺門徒尾州中嶋郡興村

釋宣如在判 德行寺願主賢立

大谷本願寺釋常如印

親鸞聖人御影聖德寺下

尾州中嶋郡起村德行寺常住物也

願主林雪

延宝五^{丁巳}年閏十二月上旬

一 親鸞聖人御影 延宝五丁巳年
閏十二月上旬

常如在判 聖德寺下尾州
中嶋郡起村德行寺 林雪

一 太子七高僧 貞享元年
壬午 願主

釈一如在判 永休

一 六字名号

蓮如上人御筆

一 六字名号

実如上人御筆

一 御絵伝 寛政三年
十一月十七日

聖德寺下尾州中嶋郡起村

德行寺常住物也 願主
秀峯

乗如在判

宣如御判

一 木仏尊像 寛永十四丁
丑 期除夕

聖德寺下尾州中嶋郡舟橋村

翻 刻

真成寺

願主正琢

一如御印

尾州尾張国聖德寺下

一 親鸞聖人御影 舟橋村

真成寺願主玄的

一 真如御印 願主覚善

右、太子高僧御裳 (23) 箱三 享保二年十二月舟橋村

尾州聖德寺下真成寺

一 教如上人御影 本願寺宣如御印 寛永二乙丑十二月 中嶋郡舟橋村

尾州聖德寺下 願主正口

教如御印

一 蓮如上人御影 慶長十五年

庚戌十月廿一日 願主不知

本願寺釈実如御印

一 大本御影 文龜元年^{辛酉} 閏七月十四日

願主釈東善

一 右者七高僧御裏

願主堅立

一 十字、御名号 願主不知

一 大品絵御裏文字消^テ不相知^レ

右通相違無御座候、以上

—以上真成寺—

一 木仏尊像御裏無之候と住持^シ申聞候

仍之記^シ置候仍而

三月六日写之

一 木仏尊像^并寺号御免書写置候、

朱印有

依其方望

一 願主知賢

一 木仏尊像^并寺号了賢寺と被成御免候、

右者祖師聖人之御裏也 宮後村

難有被存可被得其意候、仍被顯御印者也

了賢寺

天和三年 八木采女

釈一如御判

亥十月共八日 七里道専

一 蓮如上人御影 願主知賢

聖德寺下尾州

中嶋郡宮後村

釈真如朱印事

了賢寺 智賢

一 願主賢立

右之通相違無御座候、

—以上了賢寺—

右者太子之御裏也

釈真如来印事

釈宣如御印

木仏尊像

寛永十六^卯季初冬十八日

聖德寺下尾州中嶋郡西御堂村

圓性寺 願主釈永堅

親鸞聖人御影

大谷本願寺釋宣如御印

寛永十七^{庚辰}期初春十四日書之

聖德寺下尾州中嶋郡西御堂村

圓性寺常住物也願主釈永堅

顯如上人真影

本願寺釈教如御印

慶長八^{癸卯}稔九月十八日

聖德寺下尾州中嶋郡西御堂村

願主祐誓

聖德太子御名無之

釋真如御印書 願主了哲

七高僧一々御名有之

釈真如御印書 願主了哲

翻刻

本願寺親鸞聖人緣起

釈乘如御印

宝曆^{庚辰}年十二月廿日

聖德寺下尾州中嶋郡西御堂村圓性寺什物也

願主了哲 寄進人宗春

清浄光院真影

本願寺釈乘如御印

宝曆十一^{辛巳}年正月十三日

聖德寺下尾州中嶋郡西御堂村圓性寺

什物也 願主了哲 寄進人宗春

歆喜光院真影

本願寺釈達如御印

文化五年^{戊辰}二月十八日

聖德寺下尾州中嶋郡西御堂村圓性寺

常什物也 願主了義 寄進人順誓

大本様 一幅 御裏不相知

六字名号 一幅

宣如上人御真筆御書一通

二月廿六日 尾州中嶋郡西御堂村廿八日講中

御文御書 一通

乘如上人御印 四月五日

聖德寺下尾州中嶋郡西御堂村圓性寺

十二日女人講中

右ハ中嶋郡西御堂村

圓性寺

—以上円性寺—

聖德寺下尾州中嶋郡中ノ莊横野村

釈常如判

一方便法身尊像 法閑寺 願主誓伝

延宝五年二月十五日 安置焉

釈常如判

一和朝親鸕鷀聖人 聖德寺下尾州中嶋郡横野村法閑寺 願主誓伝

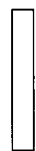
釈真如判

一一如上人 聖德寺下尾張国中嶋郡横野村法閑寺 願主誓伝

元禄十四年十月廿七日

釈真如判

一太子七高僧 聖德寺下尾州 願主誓伝



一本 願寺親鸕鷀聖人縁起 釈乘如判

聖德寺下尾州中嶋郡横野村法閑寺常什物也
寛政三年亥二月九日

一九字御名号 釈從如判 願主滄鳳

右之通御座候以上

文化十年 中嶋郡横野村

西三月 法閑寺

名古屋七間町

七宝山聖德寺様

釈宣如御印

元和九癸亥十月廿七日

木佛尊像 聖德寺下尾州笠松町

願主釈祐春

本願寺釈教如御印

—以上法閑寺—

親鸞御影

慶長十四^巳酉年九月八日

聖德寺門徒尾州

葉栗郡西門間庄

笠松

願主祐春

本願寺釈乗如御印

安永四年^{乙未}二月十七日

清浄光院真影

聖德寺下濃州

葉栗郡笠松

盛泉寺常住物也

願主円鳳

寄進人^{通書}

大谷本願寺釈顯如御印

天正二年^{甲戌}三月六日

方便法身尊形

尾州中嶋郡荻安賀村

願主釈了正

翻刻

本願寺釈常如御印

延宝三季^{甲寅}春廿二日書之

聖德寺下濃州

三朝高祖真影羽栗郡西門間庄

笠松盛泉寺

常住物也

願主釈祐玄

一歛喜光院様御影御裏ハ

御印斗也

右の添状左之通

依其方望

歛喜光院御影ら成

御免則

御名御染筆ら遊下候間

難有可ら存候、為其如斯候也

井上要人

寛政八年

五月十四日

下間大蔵卿法眼
実名書印

聖德寺下濃州

羽栗郡笠松

盛泉寺 願主圓収

一 御繪伝御表ハ^(マツ)

釈達如御判

依其方望

御繪伝ら成

御免則御裏御染筆

ら遊下候間、難有可ら存候、

為其如斯候也

大場齋院

寛政八年

正章書判

九月四日 下間大藏卿法眼

頼興書判^(カ)

聖德寺下濃州

羽栗郡笠松

盛泉寺 願主円収

—以上盛泉寺—

岐阜明屋敷真光寺之

木仏尊像之御裏相見へ

不申候□住持今申聞候、仍之

右之趣^(カ)起置候

文化十三年

九月十二日

大谷本願寺釈宣如御判

寛永元^甲子^子曆十月廿四日

親鸞聖人御影

聖德寺下濃州厚見郡

岐阜真光寺常住物也

願主釈了秀

大谷本願寺釈宣如御判

慶安第三^{庚寅}歲初秋十三日書之

三朝高祖真影

聖德寺下濃州厚見郡

岐阜真光寺常住物也

願主釈受円

本願寺釈宣如御判

慶安参^{庚寅}期 夷則十三日

上宮太子真影

聖德寺下濃州厚見郡

岐阜真光寺常住物也

願主釈受円

本願寺釈教如御判

慶長九^甲辰季三月廿二日

教如寿像 聖德寺門徒濃州熱海郡

岐阜真光寺常住什物也

願主釈正宗

大谷本願寺釈從如御判

延享二^乙丑歲十一月十五日

功德聚院真影 聖德寺下濃州

厚見郡岐阜

明屋敷真光寺什物也

願主圓貝

本願寺釈達如御判

寛政十年^戊午八月廿六日

歡喜光院真影 聖德寺下濃州

明屋敷

翻刻

真光寺常住什物也

願主円聴

本願寺釈乘如御判

天明七年^丁未六月七日

清浄光院真影 聖德寺下濃州

厚見郡明屋敷

真光寺常住什物也

願主円説

釈從如御判

延享四^丁卯年六月廿六日

大谷本願寺親鸞聖人縁起初卷

聖德寺下濃州厚見郡

岐阜明屋敷

真光寺什物也

願主圓貝

本願寺釈善如上人御判

延文三年^戊戌三月十六日

本願寺門徒濃州厚見郡

—以上真光寺—

方便法身尊形 鶉郷玉蔵坊常住物也

谷大善道場

願主 釈二角

本願寺 釈一如御判

尾州 鶉塚郷

谷大善道場 染庵寺物也

祖師御裏

願主 祐誓

本願寺 釈宣如御判

元和九^{癸亥}季九月廿九日

蓮如上人真影

聖德寺下 濃州厚見郡

鶉内郷玉蔵坊常住物也

願主 釈浄雲

釈真如御判

三朝高祖御裏 聖德寺

濃州 染庵寺

願主 順照

上宮太子 同断

先年其方へ

木仏寺号被成御免候御書出失却候付、

委細類之趣為□上候処、此度無相違被

仰付候間、可ら得其意候、仍被顕御印者也

貞享元年

石井隼人

甲子 八朔

書印

栗津□□

書印

鶉塚郷谷大膳道場

染庵寺 浄源

—以上染庵寺—

釈宣如御判

寛永十七^{庚辰}期仲秋時正

木仏尊像 聖德寺下尾州

中嶋郡長間村

願信寺

願主 釈空専

昔ハ尾州也、後ニ濃州ニ成ル

大谷本願寺 釈琢如御判

寛文二歲^{壬寅} 初秋廿八日書之

親鸞聖人御影

聖德寺下尾州中嶋郡

長間村願信寺常住物也

願主 釈順碩

本願寺釈宣如御判

寛永十四^{丁丑} 季秋十五日書之

蓮如上人真影

聖德寺下尾州中嶋郡

長間村願信寺常住物也

願主 釈空專

本願寺釈琢如御判

寛永貳季^{壬寅} 夷則廿二日書之

上宮太子真影

聖德寺下尾州中嶋郡

長間村願信寺常住物也

願主 釈順碩

三朝高祖真影

同断

翻

刻

前大僧正真如印書

大谷本願寺親鸞聖人緣起

願主 空圓

寄進 正伝

右八長間村願信寺御絵伝御事

釈一如御判

无尊光院様御裏 願主 釈是空

右者長間村願信寺住物也

濃州須賀村浄圓寺

釈宣如御判

木佛尊像 元和九^{癸亥} 歲十月十二日

聖德寺下濃州

須賀村浄圓寺

願主 釈了空

本願寺釈宣如御判

—以上願信寺—

寛文四^甲 辰 期初冬廿八日書之

親鸞聖人御影

聖徳寺門徒濃州安八郡

大樽庄内須賀村浄圓寺

常什物也 願主超賢

本願寺釈宣如御判

寛文四^甲 辰 歲初冬廿八日書之

三朝高祖真影

聖徳寺門徒濃州安八郡

大樽庄内須賀村浄圓寺

常什物也

願主釈超賢

本願寺釈宣如御判

寛文四^甲 辰 初冬廿八日書之

上宮太子真影

聖徳寺門徒濃州安八郡

大樽庄内須賀村浄圓寺

常什物也 願主釈超賢

御銘

教如御判

支月

教如寿像

聖徳寺門徒濃州安八郡

大樽庄内勝村

願主釈行雲

釈蓮如

文明十七年巳三月廿八日

苅安賀聖徳寺門徒

方便法身尊形 美濃国安八郡

大樽庄内勝村郷

願主釈尊祐

大谷本願寺釈実御御判

明応四年乙卯十月八日

方便法身尊像

苅安賀聖徳寺門徒

美濃国安八郡

大樽庄内勝村郷

願主祐善

右ハ淨圓寺御裏也

—以上淨円寺—

琢如上人真影

願主釈融円

願船寺五尊之覺

釈宣如御判

釈顯如御判

木仏尊像

寛永十四丁_丑期臘八

方便法身尊像

美濃国石津郡

天正十一年_{癸未}閏正月四日

聖德寺下多芸郡太田村

願主釈了賢

本願寺釈達如御判

大谷本願寺釈常如御判

寛文六稔中秋廿八日 書之

親鸞聖人御影

聖德寺下濃州多芸郡河戸庄

上宮太子真影

聖德寺下濃州

願主 恵周

安田村願船寺常住物也

願主釈融円

石津郡安田邨

寄進人恵成

妙誓

釈教如御判

慶長九_{甲辰}季十二月十九日

顯如上人真影 聖德寺下濃州石津郡安田村

願主釈了円

本願寺釈達如御判

文化六_{己巳}十二月十八日

三朝高祖真影

聖德寺下濃州

願主 恵周

釈一如御判

石津郡安田邨

寄進人恵成

翻 刻

願船寺常住物也

妙誓

聞了

妙讚

妙玄

大谷本願寺釈常如御印

一親鸞聖人御影 寛文十稔庚戌仲春

時正□文

聖德寺下濃州安八郡

大樽村長然寺常住物也

願主釈学順

前大僧正真如御判書

龍谷山本願寺大祖聖人縁起

願主圓可

本願寺釈宣如御印

一九字名号

祖師御筆

一蓮如上人真影 寛永元^甲子曆十一月八日

聖德寺下尾州中嶋郡

一六字名号

蓮師御筆

大須郷大藪村 願主釈明圓

右之通^二御座候 以上

安田村

願船寺 | 以上願船寺 |

一上宮皇真影 宝曆三^癸酉歲十月四日

聖德寺下濃州安八郡大樽新田

長然寺什物也

覚

願主釈亘音

一木佛尊像 御免 寛永十四^午年

七月廿八日

釈從如御印

右ハ先年焼失仕候^二付 御本山^江此由申上置候、

一三朝高僧真影 宝曆三^癸酉歲十月四日

聖德寺下濃州安八郡大樽新田

長然寺什物也

願主釈宜音

—以上長然寺—

右同断 願主了念

依其方望

木仏尊像_並

寺号正瑞寺_ト

被成御免候、難有

被存可被得其意候、

仍而被顯御印者也

天和二年戊十一月四日

七里道專

下間治部卿法眼

聖德寺下尾州海部郡

日原村正瑞寺

了慶

—以上正瑞寺—

親鸞聖人御影

本願寺釈一如判

聖德寺下尾張国

日原村正瑞寺

願主了慶

蓮如上人御影

本願寺釈一如判

右同断 願主了慶

三朝高祖真影

本願寺釈宜如判

寛永十四丑年十二月七日書之

聖德寺下尾州中嶋郡

串作郷北□村正瑞寺

常住物也 願主了念

一木佛尊像

寛永十六_卯年

仲夏廿三日

聖德寺門徒尾州羽栗郡

西門間之庄坂風村圓養寺

願主釈敬證

上宮太子真影

本願寺釈宜如書判

翻 刻

本願寺釈一如御印

圓養寺

—以上円養寺—

一親鸞聖人御影 願主釈元貞⁽²⁾

右八年号^{并二}郡村名無御座候

本願寺釈達如御判

文化十一年^{甲戌}期春廿九□

歆喜光院真影 聖德寺下濃州

一蓮如上人御影寛永十六^卯年

厚見郡鵜邨

仲夏廿三日

深廣寺常住物也

聖德寺門徒尾栗郡

願主興道

—以上深広寺—

西門間之庄坂風村圓養寺

常住物也

願主釈敬證

本願寺釈一如御印

一上宮皇真影 願主釈元貞

右八年号^{并二}郡村各無御座候

本願寺釈一如御印

一三朝高僧真影 願主釈元貞

右八年号^{并二}郡村各無御座候

文化十一戊五月日 濃州羽栗郡坂風村

四 縁起ならびに読縁起

I 「濃州大浦邑聖德寺系譜・聖德寺中興釈頼元律師伝」

卷子装一卷・縦二八・六cm / 金欄表紙 / 草木下絵紙 1356 目

録No 21

濃州大浦邑聖德寺系譜

濃州羽栗郡大浦邑、聖德寺者中、同郡三屋村今移在三尾州愛智郡名護屋、
往当甲州青島庄住人有、小笠原左衛門尉長頭、姓源氏清和天皇十四
代之後胤也、当流開山

親鸞聖人北陸斗敷之日聞、彼英風、來而謁于聖人、忽捨武勇之業、為弟子、
子成、剃髮染衣之身、即賜法名、号「釈閑善」尔、來常隨給仕之勤、更
無倦色焉、聖人已出、東関之境、而赴花城之途、到濃州、宿于大浦
之駅館、村邑諸民傾聽、出要之道法、大生正信、而白聖人、言聆
難聞之正法、真是師之恩沢也、師既歸、京將亦憑誰乎庶幾遺師之
上足、直弟「恵」施化之大悲焉、聖人不拒、拒其志、即以「閑善」留
焉、附以「七種」名物、草創於一字之仏館、号「聖德寺」七種名物、
這時、而盛也、弘安四年、三月四日閑善即奄然入寂、寿八十六歲、自閑
善第九代、直弟「釈」顕清住持之日、有洪水之災、移寺于尾州中島郡富田
邑、法流増弘、化導弥繁、顕清之直弟「顕明」生、而頑鷲長、而猖狂、酖醢
無度、邪態外道、自「鷲鷯丸」鋏浴、河水亦転、松風茶碂、碾炒米、剩復

翻 刻

令「治師」鏡面鑲、聖人之影、依之、影鏡忽暗、冥亦命「鏡造」令「磨」之、
而鋭与、磴一夕、失所在、惡行日熾、正念夜乱、世入羣眉翻、唇号「惡
藏坊」弘治二年六月二十、顕明、直弟「顕勝」存日、織田信長公、駕于富田之寺内、与
斎藤山城守「初」会、事在「自」爾、以来、为佳例、信長公出陣之日、先於「当寺」
有「軍」立、而遂治「天下」、抑当流第十代之祖、顕如上人在世、撰州東
成郡生玉庄大坂之御坊毀滅之時、信長公深惡「一宗」、天下之門徒或被害
或被「流」斯時、尚信長公於「聖德寺」、顕勝者更無怨恨、亦無寺内滅却之思、
剩有「親切」別魂之書、尚在今依之門徒之輩皆措「手足」之地、先於「寺領」之
事任「先規」於濃州大浦邑、有「七百斛」、其後太閤豐臣秀吉公責「竹鼻城」于
時大雨滂沱、流「車軸」、秀吉公陣「聖德寺」、斯時又浅井氏一族切「陣」之後、
秀吉公捐「竹鼻城」、而與「浅井氏」戰、乘其弊、而自「竹鼻城」燒「私」聖德
寺、也顕勝潛「隠」于三屋村、翌年洪水頻流、没於富田邑、秀吉公感「慨」於
寺館之滅亡、即召「顕勝」於三屋村、賜「二百石」之寺領、再興之、素懷忽達
焉、慶長二年、丁酉八月十四日、顕勝卒、其直弟「顕好」之時、慶長七年壬寅、洪波
復漂溺於三屋村、依之、移寺於尾州春日井郡清洲郷、于時有「替城」
築「名護屋」之城、聖德寺亦移于名護屋、然慶長壬寅之洪水、三屋村寺領之
田地滅没、而為「堤」數畢、顕好憂之、於「伏見城」駿府之城、雖「奉」訴、
東照大權現家康公、而遂不達焉、寛永十年正月廿六日、顕好卒、初、顕好
之弟「釈」了俊、在于濃州岐阜上宮寺、顕勝依「孫弟」之愛、以「聖人御筆」之名
号、授「与」了俊、今是失「名号」之所在、惜哉、矣、顕好、直弟有「三人」、一「顕澄」
二「武富」三「頼元」、其武富者慕「武術」、而為「俗」今奉仕于松平右京大夫、

本戸中納言然而顯澄者先住顯好卒去之後蒙^二本願寺宣如上人^一之仰戴^テ於鏡
御影并靈玉等^一回^二北陸之諸國^一三箇年庶民群集拜^ム之歸國之後名護屋道
場再興果而附^二寺於弟賴元^一自到^二花京^一奉^レ仕^ヘ于宣如上人^一今号東
成院良恭者是也^{トモ}則号^ス

聖德寺中興賴元律師伝

律師賴元者當寺中興也自^リ開善公第十六代之孫嗣^シ顯好公第三直弟母
鈴木氏覺成院積顯澄^{字良}同母弟尾州春日井郡清洲人也從^リ志学之頃^一至^二
二十三歲^一於^二洛陽^一雖^レ儒學^{トモ}而屢極^ム源旨^ヲ更^ニ以^レ為^二是全非^一普益
之勤若夫^レ人則不^レ如療^一庶民結業之疣痂^ヲ遂棄^二青丸之囊^一
忽入^二釈氏之門^一汲^ミ淨土真宗之流^一味^{ハフ}他力難信之法^ヲ本願寺門主宣如
上人感^ニ其誠心^一即以^二寬永九年四月廿六日^一被^レ免^二剃髮^一十三歲同廿八日被^レ
加^二齋會之席^一尋命^ニ於永念寺法印律師積一空^一令^ニ教^一授^ニ於宗義之風^一于
時本多三弥^{タリ}為^二摂州東成郡大坂之城代^一其母^ニ法光院^一以^二賴元^一為^二養子^一而
語^ニ一空^一曰^ク冀^{ハマ}今武州高麗鄉德本寺^ニ無^レ住持職^一以^二賴元^一當^レ焉一空則
應諾^ニ亦逢^ニ顯澄^一今号覺成院密^ニ語^一之顯澄太^ハ喜^ニ事已^一定矣^ニ賴元歸^ニ于尾
州^一同年六月朔日一空公染^ニ病^一羽檄^ニ到^一名護屋^一同四日賴元上^ニ京^一在^ニ病僧
之左右^一晝夜看^ニ慰^一之同月廿二日一空公遷去同年十二月宣如上人^ニ賴
元^一令^ニ向^一于江戶^一堂衆西方寺法眼律師釈休之公^{今号淨}為^二副使^一也道旅之
經營皆以^レ為^二貫首之高恩^一也同廿二日到^ニ江戶^一同廿六日入^ニ寺^一是^ニ今之^一然阿兄
顯澄公^ニ尾州名護屋原聖德寺住持職^一戴^ニ於寺之什物七種名宝^一赴^ニ北陸^一

之遠境^ニ普勸^ニ道俗^一歸寺之後堂閣再興自^ニ以^一嗣之無^レ可^レ讓^ニ亦召^ニ弟賴
元^一附^ニ寺職^一隱^ニ居于京洛七条新寺內^一于^ニ時寬永十九年也^一此年賴元被^レ任^ニ
律師^一翌年三月五日參內同年聖德寺御朱印事訴^ニ詔^一從一位征夷大將軍
源家光公^一同年十一月廿五日寺社奉行^ハ者安藤右京進松平出雲守也松平伊
豆守阿倍豐後守^ニ為^二御名代^一出^ニ座于江城之白書院^一賴元則候^ニ焉大田備中守
戴^ニ御朱印^一載^ニ広蓋^一而出^ニ諸國^一寺社四十余ヶ所之御朱印同時免授^ニ畢^一
然聖德寺々領濃州羽栗郡三屋村慶長壬寅洪水漲^ニ落^一堤塘浸沒^ニ當^ニ此
時^一田島崩潰^ニ成^一川尋成^ニ堤塘之敷地^一此故先住^ニ顯好^一年々雖^レ訴詔^ニ不^レ達
而空過^ニ四十余年^一故^ニ今雖^レ賜^ニ先規^一二百石之御朱印^一而領分之貢米
讒^ニ暨^一三十斛^ニ其餘皆成^ニ塘敷^一畢賴元重^ニ訴^一此趣^ニ在^ニ江城下^一三年
正保三年^一二月八日松平出雲守言^ニ上^一之^ニ家光公^一戲^ニ曰^一彼僧久住^ニ此
城下^一定及^ニ鬱窮^一乎我何^ニ負^一沙門之信施^一而徒默^ニ止^一于訴弊^ニ哉誠
不便也早与^ニ替地^一雖^レ為^ニ何^一処^ニ隨^ニ渠之望^一可^レ任^ニ先規之分域^一矣依
之^ニ松平伊豆守阿部對馬守承^一嘉命^ニ於^ニ濃州賀茂郡稻口村^一二百石之
替地^一賜^ニ之^一畢同月十日重^ニ賜^一御朱印^一也同十五日賴元為^ニ謝^一高恩^一而
登城焉今日諸候當年日光山社參停止之旨被^レ仰出^ニ寺社之諸札期在^ニ後日^一
之趣披露有^ニ之^一松平出雲守奉^ニ幕下^一伊豆守召^ニ次^一
之^ニ若公御方^一牧野内匠頭為^ニ御名代^一出^ニ座^一同前同五月頂戴^ニ御教書^一於
白書院^一松平伊豆守安倍對馬守安部豐後守^一寺社奉行安藤右京進松平出
雲守其外城代杉浦内藏允亦曾根源左衛門尉等各候^ニ左右^一而謝畢加之去歲
之貢稅尚相考^ニ賜^一之焉凡領地訴詔之人雖^レ有^ニ其數^一而賜^ニ田地等^一於^ニ去

歳之貢^ニ者無^シ其沙汰^ハ聖德寺頼元^ハ誠幸^ニ哉^ハ人皆羨^ム之矣^ハ漸^ニ賜^テ暇^ヲ歸^ル尾州^ノ之寺^ニ其正保四年十二月二十九日於^テ江城^ニ德本寺住持釈円重頼元^ノ爲^ニ名代^ト賜^テ寺領^ヲ之^ニ朱印^ヲ畢慶安元年三月日宣如上人爲^ニ東照權現三十三回忌^ト有^リ武州下向^ニ其比聖德寺頼元^ト与^ニ德本寺円重^ト累世^ヲ爲^ニ院家^ト斯亦年來也^ハ伊豆守執^シ申^ス宣如上人^ニ亦上人帰京^ノ之後野宮大納言頼依^ヲ被^レ舉^ゲ即賜^フ院家^ノ之定^ヲ于^レ時慶安元年十月廿八日也年來数ヶ之大望悉成^ル就是恐^カ当寺中興^ノ之幸^ニ誰出^シ其右^ヲ乎剩^リ旧年散失^シ松風茶礎^ヲ從^テ立木氏^ニ捧^ツ之寔^ニ不思議^ノ之事也仏祖^ノ之冥感^ニ二世之悉地也豈^ニ不^レ尊^ニ之哉^ハ

II 「七宝山聖德寺縁起」

① 「七宝縁起」

卷子装一卷・縦二八・八／金欄装、草木下絵紙／4356 目録
No 22

熟にみれば弥陀超世の大願は生死海を渡る船筏煩惱山をこゆる乗輿也他力実義の淨信は迷闇を照す恵灯報国にいたる白道なり末世相應の要法行運にあたつて浄土真宗の弘興水月忽に感すまことに由あるかな抑当寺はこれ西方指軌の道場二利勸信の清刹なり往初当流の開山親鸞聖人は藤氏の余裔太織冠^{藤子}の苗孫として九歳の春台嶺の雲を攀て三諦即是の覺月を觀し給ひしかとも大悲の化導を普ねく四輩にほとこさんかために廿九歳の春のころ黒谷の靈洞を扣き源空聖人の禪坊にまうて、忽に聖道

をのかれ速かに浄土に歸し上足の弟子となり給ひにけり爰に後鳥羽院永元々年^{丁卯}南北二京の僧徒奏乱の事によつて越後国国府と云ところに流刑せられ給ひしかとも^{于時聖人本願不思議の要行仏説すて}に誤りなき事天聴に達し侍りしに依て五年の居緒を経給ひて勅免の御使を蒙ふり給ふ勅使は岡崎の中納言藤原範光卿とそきこえし然るに元祖空大師は建暦元年霜月十九日配所土佐国波多と云津より二たひ京都に歸り給ひけるに翌年の正月廿五日化縁すてにつきて奄然として命終し給ひけり北陸の遠境は雪いまたふかうして勅使なを道様に滞留したまひ空大師御遷化の羽檄と同時に下着せしかは鸞聖人ふかく悲歎の袂をしほり給ひ恩顔なく寂滅の煙に和し德望はるかに無常の風にへたち給ふ上は二たひ都にかへり給ひても今は何の詮もなし師の恩を報するには大悲あまねく辺鄙の群類を化導せむにはしかしとのたまひて越後の国府より常陸の国にうつり給ひ笠間郡稲田の郷にと、まり給ふ爰に甲州青島の住人小笠原左衛門尉長頭と云人あり俗姓は清和源氏の末流六孫王^{経亮公}より十四代の後胤なり生れて弓馬の家をつき武勇の道に長して策を幃幄のうちにくめくらし勝ことを千里の外に決せんことを常に心にかけしかとも夙因の催はすところ善縁しきりにきさし鸞聖人の徳風を聞てみづから越後の国府におもむきすなはち尊顔を拝するに身の毛豎勸化に預かるに疑網破れてつゐに弟子となり法名を賜て釈閑善とぞ申けるそれよりこのかた常随給仕の勤いまた懈たらず昼夜朝暮さらにもものうき色なし鑽仰日々に新たにして信行具足の行者となり侍へりけり然るに鸞聖人すへ

て北陸東関の斗敷廿余年の星霜をつみ漸六十歳の御時花城の道に赴き給ひ濃州羽栗郡大浦の宿にいたりつきおはしましけり道俗かうへをかたふけて専修念仏の法門をき、貴賤心を合せて仏法遺跡の弟子をのそみ奉り侍へりしかは 聖人すなはち閑善をもつてこゝにのこしと、め是こそ愚禿か上足の弟子なれ他力の信心はこの人そよく決定せし各これに随かひて勸化をうけ奉るへしとて聖徳寺といふ寺号を下され七種の名物を留めをかせ給ひけり

一 鵜丸釵

この釵はそのかみ白河院神泉苑に御幸ありて御遊の次てに鵜をつかはせて観覧ありけるにこと更逸物の鵜三尺はかりにみえける物を潜きあけて二三度に及び遂にくはへてあかりけるをとりてえいらんあるに長覆輪の太刀也けり諸卿みな奇異の思ひをなし上皇あやしく思しめしさてめて是天下の珍宝なるへしとて鵜のくひてあかりけるに准らへて鵜の丸とそ名付られけるそれより崇徳院につたはり源為義に賜はり代々所持しけるか今 鸞聖人につたはり侍へりけるそ不思議なる

二 松風茶碗

右此二種は月輪殿兼実公より 鸞聖人に奉り給ひけるを関東斗敷の御時迄も御所持ありしかいか、思しめされけん聖徳寺に残しをかれけり

三 龍樹菩薩の眼暗の御舍利

四 天親菩薩の御舍利

五 曇鸞大師の御骨

六 鸞聖人御筆の名号

七 鏡の御影

右の七種をもつて此寺にと、めをかせ給ひて閑善にあたへ下され後代の形見ともせよかしの給ひけるそかたしけなき中にもこの鏡の御影と申すは聖人すてに閑善にこの鏡を下されけるとき御みつから鏡をとりて御覧せられけるその御影さながら鏡のうちにのこりてうせ給はす上後に拝し奉れば弥陀の形像にそおかまれさせ給ひける下有難しと云もなをおろか也抑鏡は自性なし明の内に万物をうつしてしかもろく影をた、ふる事なし今 聖人の御影のうつり給ひてのち二たひきえすして今の世までも残り、とまり給ふ事更にこれ今師聖人はた、人にはおはしまさ、りけりと見聞の道俗是をあふき是をたつとマゴひすと云事なしそのかみ巨福山建長寺の大覚禪師は鏡に影をうつしたまへは終に其影消給はすして大悲観世音と顕はれて滅後の奇特をしめし給ふいはんや今師 鸞聖人弥陀の如来の来現と云事世もつてそのかくれはまします下間丹後入道釈蓮位夢想の告にも 聖徳太子親鸞聖人を礼し奉りて敬礼大慈阿弥陀仏とのたまひけるとかやか、る奇特の靈宝その数七種大浦の道場聖徳寺の常什物として仏法の相続更に間断なしこれ偏に今師 鸞聖人ひろめ給へる真宗の教法は弥陀の直説といひつへしあきらかに智願の恵灯を挑けてとをく三有の迷情を照し普ねく他力の法雨をそ、きてはるかに四生の群品をうるほさんかための二利円満の方便なりと信すへしたつとふへし

② 「聖徳寺縁起」

卷子装一卷・縦

／＼3829 目録No 23

夫聖徳寺草創ハ其境地美濃ノ国大浦ノ郷ニテ忝モ高祖聖人群生化導ノ芳薫ニヨリテ開セタマフ靈場也其ノ来由ニ曰ク其比甲斐ノ国ノ住人ニテ弓馬ニ長シ功名カクレナカリシ小笠原左衛門ノ尉長顕ト云ヘル勇士アリ俗姓ハ六孫王経基公ヨリ拾四代ノ末流ナリ其性清直ニシテ慈仁ナリサレハ威有テ武カラス温淳ニシテムツマシカリシカハ貴賤愛敬セスト云フコトナカリシニ宿因ノ催シケルニヤ浮生ノ營務ヲ厭ヒ一向出離ノ道ニカタフカル于時高祖聖人越後ノ国ニ在テ末世相應ノ要法ヲ弘メタマヒシニ長顕聞トヒトシク越後ニ至リ聖人ニ謁シ奉リテ勸化ニ預ルニ忽他力攝生ノ源旨ニ徹透シ遂ニ剃髮シテ弟子トナリ 聖人は閑善ト名ケタマフソレヨリ常隨シテ御上碓ノ時美濃ノ国葉栗郡大浦ノ郷マテ供奉セラレケリ聖人大浦ニ滞留シテ他力ノ法門ヲ演説シタマフニ草ノ風ニ靡カコトシコレニヨリテ大浦ノ人々 聖人ニ申シテ云ク師ステニ京都ニ帰リタマハ、タレニ依テカ真宗ノ深旨ヲ聞ン乎願クハ御弟子ヲコノ地ニ残サレヨトソノトキ 聖人当山ヲ開キタマヒテ聖徳寺ト名ケラレ彼ノ小笠原閑善ヲ以テ伝灯ト定メ七種ノ名物ヲ授与シタマケリ

一、鵜之丸ノ釵

二、松風ノ茶臼

三、龍樹菩薩ノ玉眼

四、天親菩薩ノ舍利

翻刻

五、曇鸞大師ノ遺骨

六、聖人ノ真筆十字名号

七、鏡ノ御影

右之以七種留此寺閑善ニアタヘ被下後代ノ形見トモセヨカシトノタマヒケルソ忝ケナシ中カニモコノ鏡ノ御影ト申シ奉ルハ 聖人閑善ニ此ノ鏡ヲ下サレケルトキ自ラ鏡ヲ把テ御覽セラレケルトキ其ノ影サナカラ鏡ノ中カニ残テ失セタマハス有リ難シト云モ猶愚カナリカルカユヘニ鏡ノ御影ト申スナリ誠ニカ、ル奇特ノ靈宝其数ス七種聖徳寺ノ常什物トシテ仏法ノ相續更ニ間断ナシコレヒトヘニ今師聖人弘メタマフ処ノ真宗ノ教法ハ弥陀ノ直説ト云ツヘシ明カニ智願ノ恵灯ヲ挑ケテ遠ク三有之迷情ヲ照ラシアマネク他力ノ法雨ヲ澍キテハルカニ四生ノ郡品ヲ潤サンカ為メノ二利円満ノ方便ナリト信スヘシタフトムヘシ

聖徳寺法橋顯儀

于時 享保二十乙卯紀暮秋二鳥写之

③ 「七宝山聖徳寺縁起」 文化八年写本

卷子装一卷・縦

／＼3831 目録No 24

夫聖徳寺ノ草創ハ美濃ノ国大浦ノ郷ニテ、忝モ高祖聖人開セタマフトコロノ靈地ナリ。其来由ハ其比甲斐ノ国ノ住人小笠原左衛門尉長顕ト云ヘル名士アリ。清和天皇ノ後胤六孫王経基公ヨリ、拾四代ノ末葉。其性温

淳^{ジュン}ニシテ文武ニ通シ、功名カクレナカリシカ。宿因ノ催シケルニヤ、浮生^{ウシュ}ノ營務^{エイム}ヲ厭ヒ出離^{シュリ}ノ法ヲ求志シキリニヲコリケル。于時聖人越後ノ国ニ在^{ゾク}テ、末世相応ノ要法ヲ弘メタマフ。長頭ハルカニコレヲ聞テ、タ、チニ甲斐ノ国ヲ去テ越後ニヲモムキ。聖人ニ謁シ奉リテ勸化ニ預ルニ。忽ニ他力易往ノ旨ヲ領解シ、遂ニ出家シテ弟子トナレリ。聖人はヲ閑善ト名ケタマフ。ソレヨリ常随シテ閑東御経回ノ間モシハラクモハナレタマハス、其後聖人都工御登ノ節、美濃ノ国葉栗郡大浦ノ郷マテ供奉セラレケリ。聖人大浦ノ郷ニシハラク御逗留マシ、他力ノ法門ヲ弘通シタマフニ。草ノ風ニナビクガコトシ。是ニ由テ大浦ノ人々聖人ニ申シケルハ。師ステニ都ニ帰リタマハ、誰ニヨツテカ真宗ノ法ヲ聞ンヤ。願クハ御弟子ヲ此地ニ留メタマエト。其時聖人当山^{トウサン}ヲ開テ聖徳寺ト名ケタマフ。彼小笠原閑善ヲ以テ伝灯^{デン}ト定メ、スナハチ七種ノ靈宝ヲ授ケタマフ

- 一^{ニハ} 烏ノ丸ノ釧
 - 二^{ニハ} 松風ノ茶臼
 - 三^{ニハ} 龍樹菩薩ノ玉眼
 - 四^{ニハ} 天親菩薩ノ舍利
 - 五^{ニハ} 曇鸞大師ノ遺骨
 - 六^{ニハ} 聖人ノ真筆十字ノ名号
 - 七^{ニハ} 鏡ノ御影
- 右七種ノ靈宝ヲ以テ此寺^此ニハ留メ、閑善ニアタエ。後代^{コウタイ}ノ形見トモセヨ

カシトノタマヒケルソ忝ケナシ。中ニモ此鏡ノ御影ト申シ奉ルハ。聖人閑善ニヲワカレノ時自ラ鏡ヲ抱^{イタ}テ御覽セラレケレハ。不思議成カナ其カゲサナカラ鏡ニウツリテウセタマワズ。聖人閑善ニオホセラレテノタマハク。汝ジカナシムコトナカレ、別レシ後ニヲイテ我^ガヲ見ント思ハ、此鏡ニ向フヘシトテ。付属シタマエリ。シカシヨリコノカタ六百年ノ星霜ヲフルトイエトモ聖人ノ尊容アリト鏡ノ面ニコラセタマフ、アリカタシトイフモナヲロカナリ。一ヒ拝スルトモカラハ生身ノ聖人ニ対面ノヲモイヲナスヘシ。誠ニカ、ル靈宝其数七種永ク此寺^{聖徳寺}ニ伝ルカユヘニ、七宝山ト号シ。今ニイタルマテ聖人ノ法^ツ水ヲ伝テサラニ間斷アルコトナシ。コレヒトヘニ今師聖人弘メタマフトコロノ教法ハ、弥陀ノ直説トアラクヘシ。明ニ智願ノ恵灯ヲ挑テ、遠ク三有ノ迷情ヲ照ラシ。アマネク他力ノ法雨ヲ澍ギテ、ハルカニ四生ノ郡品ヲ潤シカ為ノ二利円満ノ方便ナリト。信スヘシタフトムヘシ

文化八年

辛未六月四日

④ 「七宝山聖徳寺縁起」 嘉永五年写本

卷子装一卷・縦一〇・八／金欄装／ J16666 目録 No 26

夫聖徳寺ノ草創^{サウシュ}ハ・美濃ノ国大浦ノ郷ニテ・忝^{カタクシナク}モ高祖聖人開セタマフトコロノ靈地ナリ・其来由ハ・其比甲斐ノ国ノ住人・小笠原左衛門尉

長頭ト云ヘル名士アリ・清和天皇ノ後胤六孫王經基公ヨリ・拾四代ノ末

流ナリ***貼紙** 聖人都エ御登ノ節・美濃ノ国葉栗郡・大浦ノ

△郷ニシハラク*御逗留マシク他力ノ法門ヲ弘通シタマフニ・草ノ

風ニナビクガコトシ・是ニ由テ大浦ノ人々聖人ニ申シケルハ・師スヤ

都ニ歸リタマハバ誰ニヨツテカ真宗ノ法ヲ聞シヤ・願クハ御弟子ヲ

此地ニ留メタマエト・其時聖人当山ヲ開テ聖徳寺ト名ケタマフ・彼小笠

原閑善ヲ以テ伝灯ト定メ・スナハチ七種ノ靈宝ヲ授ケタマフ**貼紙**

中ニモ此鏡ノ御影ト申シ奉ルハ・聖人閑善ニヲワカレノ時・自ラ鏡ヲ

把テ御覽セラレケレハ・不思議成カナ其カサナガラ鏡ニウツリテ

ウセタマワズ・聖人閑善ニオホセラレテノタマハク・汝ジカナシムコト

ナカレ・別レシ後ニヲイテ我ガ姿ヲ見ント思ハ・此鏡ニ向フヘシトテ

・付属シタマエリ・シカシヨリコノカタ六百年ノ星霜ヲフルトイエト

モ・聖人ノ尊容アリト鏡ノ面ニコラセタマフ・アリカタシトイ

フモナヲヲロカナリ・一ビ拝スルトモカラハ生身ノ聖人ニ対面ノヲモ

イヲナスヘシ・誠ニカ、ル靈宝其数七種永聖徳寺ニ伝ルカユヘニ・七

宝山ト号シ今ニ・イタルマテ聖人ノ法ヲ水ヲ伝テ・サラニ間断アルコトナ

シコレヒトヘニ今師聖人弘メタマフトコロノ教法ハ弥陀ノ直説トアヲグ

ヘシ・明ニ智願ノ恵灯ヲ挑テ遠ク三有ノ迷情ヲ照ラシ・アマネク他力ノ

法雨ヲ澍ギテハルカニ四生ノ郡品ヲ潤ンカ為ノ二利円満ノ方便ナリ

ト・信スヘシタフトムヘシ

嘉永五年壬子閏二月
写之

*印の部分の上に貼紙

〔恰も当時越路に御化導在せし高祖聖人に
謁し奉り御弟子となり名を閑善と賜りて
常随せり其後聖人都へ御登の節今の美濃
国羽島郡正木村大浦の郷に〕

III 「鏡御影縁起」

① 「鏡の御影縁起」

一紙巻・縦二・七ノ未装ノ冊 目錄No 27

壇上正面御厨子ノ内ニ安置シ奉ルハ・祖師 御真影ニテ在マス、
右コノ来由ヲ伺ヒ奉ルニ、聖 閑善上人ノ俗姓ハ、清和天皇ノ
後胤六 〔 〕 ヨリ、十四代ノ末裔、甲斐国ノ住人、小笠原左衛門督長
頭ト云ヘル勇士ナリシガ、宿善ノ催シケルニ、浮生ノ営務ヲイトヒ、
出離ノ志シシキリニシヲコリケリ、ソノ時越後ニシテ、祖師聖人末世
相應ノ要法ヲ弘メタマフ、長頭ハルカニコレヲ聞テ タチニ甲斐ノ国
ヲステ、越後ニ至リ聖人ニ謁シ奉リ、勸化ニ預ルニ忽チニ他力易往ノ
旨ヲ領解シ、遂ニ出家シテ弟子トナリ、聖人コレヲ閑善ト名ケタマフ、
ソレヨリ常随シテ関東御経廻ノ節モ、シバラクモハナレタマハズ、聖

人^{ミヤコ}都^{ヲシ}へ御^ミ登^{ノリ}リノ時^{トキ}、美^ミ濃^ノ国^{クニ}大^{オホ}浦^{ウラ}ノ郷^{サト}マデ、御^{ヲシ}供^{モウ}申^{マウ}サレシガ、聖^{ホウ}人大^{オホ}浦^{ウラ}ノ郷^{サト}ニ御^ゴ返^{ホリ}留^{リウ}在^{マシ}テ勸^{カン}化^ケヲシタマフニ、草^{クサ}ノ風^{フウ}ニナビクガコトク、御^{ハシ}繁^{ハシ}昌^{シヤウ}在^{マシ}シケルガ、大^{オホ}浦^{ウラ}ノ人^{ヒト}々^{タタ}申^{マウ}サレケルハ、師^シスデニ京^{キョウ}都^トニ帰^{カヘ}リタマハハ誰^{タレ}ニアフテ真^{マコト}宗^{シユウ}ノ深^{フカシ}旨^{シメ}ヲ聞^{キカ}ンヤ、願^{ネガハ}クハ御^{ヲシ}弟^{テイ}子^シヲノコサレヨト、ソノ時^{トキ}聖^{ホウ}人^ニ聖^{ホウ}德^{トク}寺^ジ御^ミ建^{ケン}立^{リツ}アラセラレ、閑^{カン}善^{ゼン}上^{ジョウ}人^ニヲ住^{ジュウ}職^{シヨク}トシテ、ハカレヲ告^{ツグ}ケタマフ、閑^{カン}善^{ゼン}御^ミハカレヲオシミケレハ、聖^{ホウ}人^ニ、ヲヒノ中^{ナカ}ヨリ、一^{イチ}面^{メン}鏡^{キョウ}ヲトリ出^{イデ}シテ、汝^{ナニジ}、ハカレヲオシコトナカレ、コノ鏡^{キョウ}ノ中^{ナカ}ニ吾^ワガスカタヲ残^{コソ}スホド^{ニト}有^アテ、聖^{ホウ}人^ニツラ^{ツラ}御^ミ覽^{ラン}セラレケレハ、不^フ思^シ議^ギナルカナヤ聖^{ホウ}人^ニ御^ミスカタハ、鏡^{キョウ}ノ中^{ナカ}ニコリテ、失^ウセタマハスアリカタシトイフモヲロカナリ、六^{ロク}百^{ヒャク}年^{ネン}スヘニ、生^ウヲクレタレハ、今^{イマ}ニアリ^ツトノコラセタマフ、タ、今^{イマ}御^ミ戸^コカゴザレハ、祖^ソ師^シ聖^{ホウ}人^ニ直^{ジキ}々^クニ御^ミ対^{タイ}面^{メン}ノヲモヒヲナシテ、称^{ショウ}名^{メイ}モロトモ大切^{タイセツ}ニ拜^{ハイ}

② 「鏡の御影縁起」

四紙巻・縦二三・二／未装／^ミ3829 目録No 28

壇^{ダン}上^{ジョウ}御^ミ厨^{シュ}子^シノ内^ナニ安^{ヤス}置^ヰシタマツルハ鏡^{キョウ}ノ御^ミ真^{マコト}影^エニテ在^アスソノランシヤウヲ伺^{カミ}ヒ奉^{ホウ}ルニ聖^{ホウ}德^{トク}寺^ジ閑^{カン}基^キ閑^{カン}善^{ゼン}聖^{ホウ}人^ニノ俗^{ソク}姓^{セイ}ハ清^{セイ}和^ワ天^{テン}皇^{スミミ}ノ後^{コノ}胤^{イン}六^{ロク}孫^{ソン}王^{ワウ}経^{キョウ}基^キ公^{キョウ}ヨリ十四^{シヨ}代^{ダイ}ノ末^{マツル}流^{リウ}小^コ笠^{カサ}原^{ハラ}左^サ衛^{エイ}門^{モン}尉^ヱ長^{チヤウ}頭^{トウ}ト云^{イハ}フ名^ナ士^シナリシガ宿^{シュク}縁^{エン}ノモヨヲシケルニヤ浮^{フシ}生^{シユウ}ノ營^{エイ}務^ムヲ厭^{イトヒ}ヒ出^デ離^リノ法^{ホウ}ヲ求^{モト}ム・シキリニシヲコリケル于^{トキニ}時^{トキ}聖^{ホウ}人^ニ越^エ後^{コノ}ノ国^{クニ}ニ在^アテ末^{マツル}世^セ相^{サウ}応^{オウ}ノ要^{ヨウ}法^{ホフ}ヲ弘^{ヒロ}メタマフ長^{チヤウ}頭^{トウ}ハルカニコレヲキ、テ越^エ後^{コノ}ニ至^{イタ}リ

聖^{ホウ}人^ニ二^ニ謁^{エツ}シ奉^{ホウ}リテ勸^{カン}化^ケニ預^{ヨク}ルニ忽^{タチマ}チニ他^イ力^{リキ}易^イ往^{ワウ}ノ旨^{シメ}ヲ解^{リキ}領^{リョウ}シ遂^{スミヤカ}ニ出家^{シテ}シテ弟^{テイ}子^シトナリ聖^{ホウ}人^ニ是^{コレ}ヲ閑^{カン}善^{ゼン}ト名^ナケタマフ・ソレヨリ常^{ジョウ}隨^{ズイ}シテ・閑^{カン}東^{トウ}御^ミ經^{キョウ}廻^{クワイ}ノ間^{アイダ}モシハラクモハナレタマハズ。其^{ソノ}後^{ノチ}美^ミ濃^ノ国^{クニ}大^{オホ}浦^{ウラ}郷^{サト}マテ、供^{クフ}奉^{ホウ}セラレケリ聖^{ホウ}人大^{オホ}浦^{ウラ}ニマシ^ツケリ・コレニヨリテ大^{オホ}浦^{ウラ}ノ人^{ヒト}々^{タタ}申^{マウ}サレケルハ師^シスデニ京^{キョウ}都^トニカヘリタマハ、誰^{タレ}ニヨリテカ真^{マコト}宗^{シユウ}ノ法^{ホフ}門^{モン}ヲキカンヤ願^{ネガ}クハ御^ミ弟^{テイ}子^シヲノコサレヨトソノ^ニ聖^{ホウ}人^ニ一^{イツ}宇^ウヲ建^{ケン}立^{リツ}シテ聖^{ホウ}德^{トク}寺^ジト名^ナケカノ閑^{カン}善^{ゼン}ヲ伝^{デン}灯^{トウ}ト定^{テイ}メタマフ閑^{カン}善^{ゼン}御^ミワカレヲカナシミケレハ聖^{ホウ}人^ニ仰^{オウ}セケルハ汝^{ナニジ}ワカレヲオシムコトナカレコノ鏡^{キョウ}ノ中^{ナカ}ニワカスガタヲノコスホトニノ玉^{タマ}ヒテ鏡^{キョウ}ヲトリテ御^ミ覽^{ラン}セラレケレハソノカケサカラ鏡^{キョウ}ノ中^{ナカ}ニアリ^ツトノコラセラレテ・ウセタマス・コレヒトヘニ末^{マツル}世^セノ衆^{シュウ}生^{シユウ}ヲ御^ミ化^ケ益^{エキ}ノ御^ミスカタナレハタ、今^{イマ}御^ミ戸^コガゴザレハ直^{ジキ}々^ク御^ミ対^{タイ}面^{メン}ノオモヒナシテ称^{ショウ}名^{メイ}モロトモ大切^{タイセツ}ニ御^ミ礼^{レイ}ヲ上^{ジョウ}ラレマシヨ

IV 釵先ノ名号縁起

① 「釵先ノ名号」

三紙巻・縦二七・五／未装／^ミ3829 目録No 29
釵^{ウカミ}先^{サキ}の名^ナ号^{ゴウ}

右^{ミナミ}コノ来^キ由^ユヲ窺^{ウカミ}奉^{ホウ}ニ聖^{ホウ}德^{トク}寺^ジ七^{シチ}宝^{ホウ}ノ内^ナ鶉^ウノ丸^{マル}ノ御^ミ釵^{ウカミ}ハ人^{ヒト}皇^{スミミ}七^{シチ}十^{ジュウ}七^{シチ}代^{ダイ}後^{ノチ}白^{ハク}河^カノ法^{ホフ}皇^{スミミ}。神^{カミ}前^{マエ}苑^{エン}ニテ 御^ミ遊^{ユウ}アラセラレ樓^{ロウ}船^{セン}ヲ。中^{ナカ}流^{リウ}ヨコタヘ

テ鶴ヲツカハセ玉フ鶴池中ニ入テ金覆輪ノ釵ヲクワヘテ上リ○スナハ
チ帝エイランマシ〱テ鶴ノ丸ト勅号ヲ給フソレヨリ。ユヘアリテ祖師
聖人ヘ伝リ祖師聖人ヨリ聖徳寺開基閑善上人ヘ御府属アラセラレケル
鶴丸ノ御釵ナリシカ。其後オシイカナヤ紛失シケル。トキノ御院主ノ覺
成院殿コレヲ。大キニ。ナゲカセラレ善知識ノ上聞ニ達シケレハスナハ
チ御宝藏ニオサマリシヲ。ウツサセラレ被下置シ所。弘法大師ノ筆
勢金紙金泥釵先ノ御名号ナレハ大切ニ拝礼ヲトケラレヨ

② 「〔釵先名号縁起〕」

一紙卷・縦二七・五ノ未装ノネ 目録No 30

抑是ニ掛ケタテマル御名号当山ノ靈宝七宝ノウチ烏ノ丸ノ宝
釵弘治年中何者ノ所為トモシラス紛失ニツキ其後当山ノ十五代目覺成院
ヨリ右ノ趣御本山ニ達御歎キ申シ上ラレシカ宣如上人深ク是ヲ痛マセ
ラレ兼テ御本山御宝藏ニ納メ玉フ弘法大師ノ真筆六字ノ名号ヲ宣如上人
御自ラウツシ玉ヒ○烏ノ丸ノ宝釵ノカハリトシテ聖徳寺ヘ御付属アラ
セラレ○文字ノカタチ釵ノ如クカキタマヒ一切衆生ノ煩惱ヲ切ホロホシ
万善恒沙ノ功德ヲサスケタマフ御スカタヲアラハシ玉フ御名号ナレハ
各々大切ニ慎テ拝礼ヲトケラレマシヨ

③ 「〔釵先名号縁起〕」

卷子装一卷・縦二六・七ノ / P3364 目録No 31

翻 刻

是レニ掛ケ奉ルハ、紺紙金泥釵先六字ノ御名号ナリ。弘治年間当山靈
宝七種ノ内、鶴ノ丸ノ宝釵紛失致シ。宣如上人此由ヲ聞コシ召サレ、
深く惜マセラレ。御本山御宝藏ニ納メサセケル、弘法大師ノ真筆釵先
六字ノ御名号ヲ御自ラ御染筆遊バサレ当山十五代覺成院エ宝釵之代リ
ニト、御授与遊バサレシ、御名号也、夫レ弥陀名号ハ一切ノ惡業煩惱
ヲ消滅シ、邪見橋慢ヲ破碎シ給フコト釵ノ如ク。吾等ガ貪瞋煩惱ヲ切
リ開キ、万善万徳ノ功德利益ヲ与ヘ給フ、御徳ヲ弥陀ノ利釵ト讃仰シ
奉ル破邪顯正ノ御姿ヲ示シ給フ御名号ナレバ大切ニ拝礼ヲ

V 龍樹・天親・曇鸞三骨縁起

① 「〔三種遺骨縁起〕」

卷子装一卷・縦二五・八ノ / P3364 目録No 32

檀上ノ宝塔ニ敬ヒタテマツルハ・聖徳寺法・宝物七宝ノ内・三種ノ靈宝
ハ・玄奘三蔵渡天ノミギリ祇園精舎ニオイテ・八宗ノ祖師・龍樹菩薩
ノ玉眼・天親菩薩ノ御舍利ヲ感得シタマヒ・唐土ヘ渡シタマヒシカ大家
家ノ秘藏トナリシ・トコロ故アリテ・月輪禪定殿下兼実公ヘアヒツタハ
リ兼実公・法然聖人・御帰依ノアマリ・是ヲ御寄附アラセラレ・法然聖
人ヨリ・祖師聖人ヘ御附属アソバサレ・祖師聖人ヨリ聖徳寺開基・閑善
上人ヘ御授与アラセラレタルトコロノ・三国伝来ノ靈宝ナレハ・各々慎
テ拝礼

② 「三種遺骨縁起」

一紙巻・縦二四・五／未装／朱筆書き入れ／ネ 目録No 33

檀上御厨子ノ内ニ安置シ奉ル三種靈宝ハ玄奘三蔵渡天ノ節祇園精舎ニ至リ玉ヒ釈迦如来ノ古ヘヲ思ヒナシタニムセヒ玉ヒテ暫クマトロミタマフニ二人ノ聖僧顯ハレ玉ヒ吾レハ龍樹天親ノ二大士ナリ汝仏法ニ志深クシテ此地ニ来ルコトイハ殊勝也汝ニコノ三種ヲアタフル間彼地ニ歸リ仏法ヲ弘ムヘシト告ケタマフトミタマフニ右二種ノ靈宝アリ／＼トノコラセタマフ依テ奇イノ思ヒナシ唐シヘカヘリ曇鸞大師ノ遺骨ヲ相ソヘ日本ヘ渡シ玉ヒ大内家ニ収リシガユヘアリテ法然上人ヘ伝リ法然上人ヨリ祖師聖人ヘ御付属アラセラレ祖師聖人ヨリ聖德寺開基閑善上人ヘ御授与アラセラレタル処ノ三国伝来ノ靈宝ナレハ大切ニ拝礼ライタサレヨ
拝ミ上ラレルカ当山七宝ノ内龍樹并ノ玉眼天親并ノ曇鸞大師ノ遺骨ナレハ称名モロトモ大切ニ拝礼イタサレヨ

③ 「三種遺骨」略縁起」

三紙巻・縦二七・九／未装／1838 目録No 34

略縁起

上段御厨子ノ内ニ敬ヒ奉三ツノ宝



一龍樹菩薩玉眼

一天親菩薩舍利

一曇鸞大師遺骨

右此三種之靈宝者玄奘三蔵渡天之砌リ者園精舎ニ至リ玉ヒ釈迦如来ノ御在世ノ古ヲ思ヒ○今ヲ感シ暫クノ間眠玉フニ不思議ナル哉貴僧二人影レ玉ヒ玄奘三蔵ニ告テノ曰ヤウハ我等ハ是レ龍樹天親ノ二大士也汝ガ仏法ニ志シ深クシテ地ニ来ル事イトシユシヤウナリ仍テコノ二種ノ靈宝ヲ与フル間タ汝チ彼ノ地ニ至リ仏法相統イタスベシト告ケ玉フト見ルホトニ夢サメオハリヌ○玄奘三蔵寄意ノ思ヒナスコト云フベカラス仍テ枕ノモトヲ見玉フニ不思議ナル哉ヤコノ二種ノ靈宝光明カクヤクトシテ残セラレ仍テ玄奘三蔵右ノ靈宝感得シ玉ヒソノ後チ唐シエ還リ玉ヒ曇鸞大師ノ遺骨ヲアヒソヘソノ後チ日本エ渡リ大内家ノ秘蔵タリシカ時ノ関白禪定デシガ兼実公ヨリ法然上人ヘ御寄付アラセラレ○ソノ、チ法然上人ヨリ祖師聖人ヘ御付属アラセラレ又祖師聖人ヨリ聖德寺開基閑善上人エクタシオカセラレタル所ノ世ニタゲヒナキ靈宝ナレハ各々慎テ拝礼

誠ニ三国随一ノ靈宝也并可任併ラ趣意不可失

VI 「赤梅檀阿弥陀像縁起」

① 「赤梅檀阿弥陀の尊形一軀造立の縁起」 寛文九年了意写本

卷子装一卷・縦一五・一／赤地金唐草模様／1835 目録No 35

赤梅檀弥陀の尊像一軀 造立の縁起

熟以みれば法性は色に非ず法身は形なし迷情の凡愚争か真に証知すへき此故に受用報身の真容は方便法身の尊形を顕はし大悲化導の善巧は他力難思の弘願にあり十方衆生ひとしく乗して三世にわたたりて尽ることなし誠に知りぬ玉は石より出て石よりも貴とく氷は水より凝て水よりも冷かなりといふ事を昔仏在世の時優填大王は赤梅檀をもつて仏像を造立し波斯匿王は紫磨金をもつて仏像を鑄作せり仏法の中に於て初めて軌則として将来志信の輩みな仏像を作り大福德の因縁を成する事三國に涉りて轍を同じくす夫造像の功德広大なる事無量無辺也すてに造仏福報經には天地尚可称此福不可量と嘆し法華經の偈には如是諸人等皆已成仏道と説王へり粵に法眼律師釈頼元は姓は甲斐の源氏小笠原の末葉 開山親鸞聖人の直弟聖徳寺釈閑善の後裔として幼稚の古しへより畫工の才に長し天性其幽にいたりその妙を得たりしかも宿善の熟する所一念發起の床の上には往生治定の大信を決得し平生業成の心の底には深重仏恩の報謝を抽いで今年既に六十一歳の星霜を送り憶念称名相續して他想雜間の失慮なし近頃また思いをおこし心さしを榮まし赤梅檀木を需得て長八寸四分の弥陀の尊像を造る仏工安阿弥の風儀に依て刻刀の労を運へり抑赤梅檀は往始いまた日域に伝はらず寛文聖治の代に當て初めて朝貢す人更に知ものなし黄檗の僧隱元琦禪師これに銘定せられしより世あまねく此香木を尊敬す蓋は南海の異物として類に秀て、名あり所謂白黒紫真檀の数種ありといへとも人間仏像の草味は特赤梅檀をもつて彫刻せり今此弥陀の形像は昔に由來る所を慕ふ暫く靈鷲の峯類て風は音の梢に咽ひ給孤の園荒て

露四辦の叢を湿すと雖とも四八金容の光は併念仏の衆生を接し六八本弘の雨は専無仏の枯渴を潤はし給ふ亦此尊像円光の鏡は頼元はしめて是を鏤はむ其工の精にしてその妙に徹する所歟 前大僧正琢如上人見そなはしたまひて甚はた感誠に堪す称嘆の余り自から真筆を下して律師頼元の四字を尊像の後に書賜はせり頼元手の舞足の踏所を知らず悲喜交感して数行の涙を流す尊像の幾徳この時にあたりて弥高貴たり種智円明の月は白毫の光り五常齊入の道を照し衆徳究境の花は青蓮の匂ひ十方群品の心に薰す桐海には玉を列て華藏界の粧を増し庄嚴は色を施して実報土の式を示す引接法縁の利生は普賢平等の徳を布き大慈大悲の誓願は自業自得の苦を脱し給ふ頼元則この縁起を予に請す不敏の文筆予何そ是に加へん然りと雖とも隨喜感嘆の心すてに止ことを得す猥に兎毫を驕す然れば則此尊像遙に濁世の庶類を導ひき法水長く末代の涸渴を潤はし未來際をつくして窮まりなく塵刹土に満て限りなく共に願力に帰依し同じく海会に廻入せんと敬白

維時寛文第九己酉年八月十三日

本性寺照儀坊釈了意書述

角印（陰刻）角印（陽刻）

② 「赤梅檀阿弥陀如来像縁起」

二紙卷・縦二七・三／未装／A3842 目錄No36
赤梅檀尊像縁起

此方に安置奉る尊像は祖師聖人の直弟閑善上人^末。裔柳洞院釈の頼元律師の御作なり頼元律師御幼稚の時より宿因深厚にして一念発起の床の上には往生治定の信心を決定し平生業成の心底は深重仏恩の報謝を拙て御年すでに六拾一歳の星霜を送り憶念称名相統して他想間雜のあやまりなく喜ひたまひしが釈尊在世のいにしへ優填大王は赤梅檀を以て仏像を造立し波斯匿王は紫摩金を以て仏像を鑄作せりその功德をいへは天地にみつるとも又此人は皆成仏すと説たまひし事を思ひ出て赤梅檀を求めて御長八寸四分の阿弥陀仏の尊像を造り杳に末世の衆生を引接せんと思召せり夫は付靈鷲の峯頹れて風八春の梢にむせひ給狐の蘭荒て露四弁の叢水をうるをすといへとも三拾式相の光りは念仏の衆生を接し四十八願の雨は専ら枯渴の凡惑を潤したまふ亦この尊像は円光の鏡は頼元律師はしめて是を鑄られしか前大僧正琢如上人御覽遊はされ御感の余り自真筆を下して律師頼元の四字を尊像の後に書賜はせり頼元律師は悲喜の涙にむせひいよ／＼尊像の威徳を信し何卒濁世の衆生を導き法水長く末代の枯渴を潤はしたまへと誓ひをこめし尊像なれば各大切に御礼を遂られよ

③ 「赤梅檀阿弥陀如来像縁起」

卷子装一卷・縦二五・五／

／P3564 目録No 37

檀上御厨子ノ内ニ奉^ル安置^シ・阿弥陀如来ノ尊像^ヲ・聖徳寺十六代ノ院主・柳洞院・頼元律師・赤梅檀ヲ前大僧正・琢如上人ヨリ致^ス頂戴^{ミタゲ}御丈八寸四歩ノ阿弥陀仏ノ尊像ヲ・一刀三礼シテ・是ヲ彫刻^{ナヲ}シ・又円光ノ鏡

ハ・頼元律師・初^メ而^テ是ヲ鑄^イラレシガ・琢如上人御覽被^レ遊・御感ノ余リ・律師頼元ノ四字ヲ・尊像ノ後ニ・御染筆被^レ為^シ在・頼元律師ニ仰^オケルハ・御本廟^コ・御本尊^{ビョウ}・円光ノ鏡ヲ奉^レ鑄^イレト依^テ之^ニ・御本山・御本尊・円光ノ鏡ヲ奉^レ鑄^イ之^ニ・頼元律師・悲喜^{ヒキ}ノ涙ニムセビ・イヨ／＼尊像ノ威徳ヲ信ジ・何卒濁世ノ衆生ヲ導キ・法水永ク・末代ノ枯渴ヲ潤シ玉ヘト誓ヒヲ・コメシ尊像ナレバ・大切ニ拝礼

④ 「赤梅檀阿弥陀如来像縁起」

一紙卷・縦三〇・〇／未装／ネ 目録No 38

御厨子に安置し奉る尊像は祖師聖人の直免閑善法師の末裔柳洞院釈の頼元律師の御作なり頼元律師赤梅檀を承て○御長八寸四分の阿弥陀仏の尊像を作り杳に末世の衆生を引接せんと思召せり又此尊像の円光の鏡は頼元律師初て是を鑄られしか前大僧正琢如上人御覽遊はされ御感の余り自真筆を下して律師頼元の四字を尊像の後に書賜はせり頼元律師は悲喜の涙にむせひいよ／＼尊像の威徳を信し何卒濁世の衆生をみちひき法水長く末代の枯渴を潤し玉へと誓をこめし尊像なれば各大切に御礼を遂られよ

Ⅶ 「二河白道図縁起」

① 「二河白道図説」寛文八年頼元写本」

卷子装一卷・縦三三・五／／P3832 目録No 39

二河白道図説

夫彩画して仏像をつく作は、自他すでに成仏すとしめし給ふは、世尊の金言玉をくわ鏤、絵にうつ図して靈像をたうとめば、罪きえ福をますといへるは、慈恩の高判なり、今こに図画する所の、二河白道の縁起は、みなもと善導大師の釈義に依て、あらはすものなり、すなはち前のきしは娑婆世界、これ東の方なりむかふの岸は浄土をあらはす、これ西なり、北は水の河これ貪欲の煩惱、南は火の河、これしんいのほんなうなり、中に一すじの白道あるは、浄土をねがふ人のまことの心なり、善心はすくなきゆへに、四五寸ほどなるほそきみちにたとへ給へり、弓箭をつがひ、つるぎをもちたる人のおひかけ、し、とらくちなはのきをひきたるは、六賊とて、衆生の眼耳鼻舌身意の六根につくるつみとがにたとへ、地水火風の四大を、毒蛇惡獸にたとへ給ふなり、しやばのかたにあらはれ給ふは釈迦如来なり、これは発遣とて衆生を浄土へす、めてつかはし給ふところなり、僧のかたちなるは、念仏の行人なり、白道をあゆむもおなじ行者なり、釈迦如来のをしへ給ふ、御法のこゑにまかせて、一すじに西方へ心をおもむかしむるにたとふるなり、その行者を、かの六賊のよびかへすは、や、もすれば惡業のために善心をうしなふこゝろなり、西のきしにたち給ふは、阿弥陀如来なり、これは招喚とて、行者を浄土へまねきよび給ふなり、行者一心に本願のをしへのことく、如来をたのみ、念仏を信ずること、白道をゆくにたとふる

なり、さてかの浄土へ往生するに、弘誓の船に乗じて、觀音勢至ともろともに、いたることをあらはせり、かの国にいたりぬれば、行者も紫摩黄金のはだへとなり、三十二相八十種好のたえなるすがたとなることをあらはすなり、蓮台をさへて、行者にあたへ給ふは、觀世音菩薩なり、宝蓋をさしかけ給ふは藥上菩薩なり、七重の宝樹とて金と銀と瑠璃と婆梨と珊瑚と磤瑠と瑪瑙との、七つのたからをもちて、枝とし葉とし花としくきとして、かざりたてたるうへき、なみをそろへてあり、今こには略してその一本二もとをあらはせり、八功德池には玉のかけはしあり、行者これをわたりて、金のきざし、莊嚴のまきばしらのもとにいたり、大宝宮殿のうちをおがみたてまつれば、阿弥陀尊は金蓮花の上に座し給ひ眉間より光明をはなち、行者のいたゞきをてらし給へは、渴仰のかうべをうなたれ、隨喜のなみだをながす所なり、觀世音、大勢至は、右左にまし、うへにおほえるは、真珠明月摩尼衆宝の幡蓋なり、光明のうちに遊戲し給ふは化仏菩薩なり、そらをかける鳥は、加陵伽五根五力をさへづり天人花をさへ、香をくんずる所なり、行者のまへには、諸の菩薩百味の飲食を供養したまへり、宝樹のもとに、管弦を奏し給ふは、廿五のぼさつなり今は略して、宝月ばさつ琴をたんじ、月藏ばさつ、太鼓をうち、慈氏ばさつ笛をふき給ふばかりをあらはせり、藥王ばさつはたをさへ、大せいしは、合掌をくみ、文殊師利は花鬘をかざし、普賢大士は、ほこをさし、日照王

あみだぶつ　ねん　たりき　たのみ　みろこう　わうじやう　ご
阿彌陀仏を念し、他力を頼て、名号をとなへ、往生を期し給ふへきもの也

從閑善十六代法孫賴元書之（印）

「二河白道凶緣起」

一紙卷・縦三・一／未装／ネ 目録No 40

③「二河白道凶縁起」

卷子装一卷・縦二七・三／未装／△3564 目録No 41

抑^{ノモクコレ}是^{カケ}二^{タテマツ}掛^{テウ}ケ奉^{テウ}ル一^{テウ}軸^{テウ}ハ・聖德寺十六代ノ院主・柳洞院頼元律師一如^{ライゲンリチシイチニ}

上人ノ御指図ニヨリ・画書キ玉フニ河白道ノタトヘナリ・西ノ岸上ニ人アリテ喚テ曰・汝一心正念ニシテ直ニ来レ・我能汝ヲ守ン・阿弥陀如来ハ西方浄土ヨリ・末代ノ凡夫ニ来々ト 教玉フ・釈迦如来ハ此土ヨリ發遣シ玉フ・右ノ方ハ貪欲ノ煩惱シキリニ・ヲコリ・左リノ方ニハ瞋恚ノホフ・モヘアガリ・コレヲ水火ニ喩ヘ玉フ・他力ノ信心ヲ四五寸バカリノ道ニタトヘ玉フ・尔レハ・衆生貪瞋煩惱中能生清淨・願往生心・マガヒ・カクレナキ・浄土ノ本階道・ナリ昨日モ歩ミ・今日モ歩ミ・臨終ノ夕バマデ嬉ヤ南無阿弥陀仏ト相續シテ・安養浄土ノ・ミヤコヘ・往生ヲトケヨトアル・善導大師ノ巧妙ノ御喩ヘナレハ・称名モロトモ慎ムテ拝礼ヲトケラレマセフ

Ⅷ 「聖德太子木像縁起」

① 「聖德太子木像縁起」

卷子装一卷・縦二六・六／

／P3504 目録No 42

上檀 御厨子ノウチニ安置シ奉ハ・聖德太子ノ御木像ナリ・其由来ヲ云ヘハ・聖德寺開基ハ甲斐國ノ領主小笠原左衛門丞・長頼ト申セシコロヨリ・伝来ノ聖德太子ノ御木像ナリ・或夜・此聖德太子長頼ニ告玉フヤフハ・汝高名富貴ニシテ・榮花榮耀ニ日ヲ送ルトイヘ氏・娑婆ハワスカニ・一旦ノ浮生ナリ・後生コソ永生ノ樂果ナリ・今・越後ノ國ニ貴僧マシクテ・末世相應ノ要法・凡夫即生ノミノリ弘メ玉フホト

ニ・彼ニ至リ要津ヲ問フベシト聞クボトニ・忽チユメサメ畢ヌ・実ニ奇意ノヲモヒヲナセリ・夫ヨリ越後ノ國ニコヘテ聖人ニ謁シ奉リ・本願他力ノコトハリヲ聴聞シテ・タチトコロニ金剛ノ信心ヲ決定シテ聖人ノ・御弟子トナリ・其後濃州大浦ノ郷ニテ・聖德寺ヲ草創セラレケリ・コレニヨリテ聖德寺ニオヒテ・各別ノ尊像ナレハ・各慎テ拝礼ヲドケラレヨ

② 「聖德太子木像縁起」・校訂本

一紙卷・縦二七・五／未装・朱筆書き入れノネ 目録No 42

上檀御厨子ノウチニ安置シ奉ハ聖德太子ノ御木像ナリ其由来ヲ云ヘハ聖德寺開基 閑善上人ハ 甲斐ノ國ノ領主小笠原左衛門之丞長頼ト申○ ○セシコロヨリ伝来ノ聖德太子ノ御木像ナリ
シナリ或夜此聖德太子長頼ニ告玉フヤフハ 汝高名富貴シテ榮花榮耀ニ日ヲ送ルトイヘ氏娑婆ハワカニ一旦ノ浮生ナリ後生コソ永生ノ樂果ナリ今越後ノ國ニ貴僧マシクテ末世相應ノ要法凡夫即生ノミノリヲ弘メ玉フホトニ彼ニ至テ要津ヲ問フベシト聞クホトニ忽チユメサメ畢ヌ凡奇意ノ思ヲナセリ眼ヲヒラヒテ見タテマツレハ聖德太子ノ尊像枕ニ本立タマワリ泪トトモニ恭敬礼拝シテ夫ヨリ越後ノ國ニコヘテ聖人ニ謁シ奉リ本願他力ノコトハリヲ聴聞シテタチトコロニ金剛ノ信心ヲ決定シテ聖人ノ御弟子トナリ其後○濃州大浦郷ニテ聖德寺ヲ草創セラレケリコレニ依テ夢中感得ノ尊像ト称ス靈現アラタノ尊像ナレハ各々慎テ拝礼ヲトケラレヨ

IX 『善導大師半金色絵像縁起』

① 「善導大師半金色絵像縁起 附歡喜光院遺骨拝領縁起」

・縦二七・四／未装／A384 目録No 44

右此来由ヲ窺奉ルニ或夜元祖法然上人ユメニ見玉フ所ノ御絵相ナリ。コロハ安元元年三月十四日ノ事ナリシガ。一ツノ大山アリ、峯高フシテ西ニムカヘリ。河原砂々トシテカギリナシ。林樹渺茫トシテ限数ヲシラス。半服ニ登リ玉ヒテ西ノ方ヲミレハ。空中ヨリ紫雲トヒ来テ法然上人ノトコロニイタル。希有ノ思ヲナシ玉フニ紫雲ノ中ヨリ无量ノ光リヲ出ス。マタソノ光ノ中ヨリ白コフ孔雀鸚鵡等ノ鳥トビ来テ河浜ニ遊ゲス。身ヨリ光リヲハナチテ照耀キハマリナシ。ソノ后チ衆鳥トビノホリテ紫雲ノ中ニ入ヌ。マタ雲ノ中ヨリ一人ノ僧出テ、法然上人ノ所ニ来リ玉フ。腰ヨリ下ハ金色ニシテコシヨリ上ハ黒染ナリケレハ。誰人ニテマシマス候ソヤト合掌シテ申シタマハク。御僧答テノタマハク我ハコレ善導ナリ。汝専修念仏ヲ弘ルコト我コ、ロニ叶ヘリ。故ニ来ルナリトノタマフト見玉ヒテユメサメヌ。依テユメニミタマフ所ヲ図セシメ。コレヲ世ニユメノ善導ト云ヘルコレナリ。其○面像唐朝ヨリ。ワタリタマヘル善導大師ノ影僧ニ少モ違ハサリケリ。実ニ法然上人ノ御勸善導大師ノ尊意ニカナヘルコトアキラカナリ。周礼ニハユメハコトノシルシナリ。前兆ノムナシカラン誠法然上人ノ御ス、メ四海ニミチテ誰レノ人カ信受セサラン。高野ノ明遍僧都ハコノ記ヲ披見シ玉ヒ。随喜ノナミタリナガシスナハチ御筆アラレシ所ノ善導大師ノ半金色ノ絵像ナレハ各称名モロトモニ拝礼

ヲトケラレヨ

一御代々御骨 聖徳寺儀御本山御代々御分骨拝領之寺格也依之歡喜光院様之御骨拝領也

② 「善導大師半金色絵像縁起」校訂本

二・五紙巻・縦二四・〇／未装／ネ 目録No 45

右コロ来由ヲ窺奉ルニ或夜元祖法然上人ユメニ見玉フ所ノ御絵相ナリ。頃ハ安元元年三月十四日ノ事ナリシカ。一ツノ大山アリ。峯高フシテ西ニムカヘリ。河原砂々トシテカギリナシ。林樹渺茫トシテ限数ヲシラス。半服ニ登リ玉ヒテ西ノ方ヲ見ヘハ。空中ヨリ紫雲トヒ来テ上人ノトコロニイタル。希有ノ思ヲナシ玉フニ紫雲ノ中ヨリ无量ノ光リヲ出ス。マタソノ光ノ中ヨリ。白孔雀鸚鵡等ノ百色ノ鳥トビ来テ河浜ニ遊ゲス。身ヨリ光ヲ放テ照耀キワマリナシ。ソノ后チ衆鳥トビノホリテ紫雲ノ中ニ入ヌ。マタ雲ノ中ヨリ一人ノ僧出テ、法然上人ノ所ニ来リ玉フ。腰ヨリ下ハ金色ニシテ腰ヨリ上ハ黒染ナリケレハ。誰人ニテマシマス候ソヤト合掌シテ申シ給ハク。御僧答テノタマハク。我ハ是善導ナリ。汝ノ教専修念仏ヲ弘ルコト我コ、ロニ叶ヘリ。故ニ来ルナリトノ給フト見玉ヒテユメサメヌ。依テユメニ見玉フ所ヲ図セシメコレヲ世ニユメノ善導ト云ヘルコレナリ。其御面像唐朝ヨリワタリ玉ヘル○善導大師ノ尊意ニカナヘルコトアキラカナリ周礼ニハ夢ハ事ノ祥ナリ前兆

ノムナシカラン。マコトニ法然聖人ノ御ス、メ四海ニミチテ誰ノ人カ
信受セサラン。高野ノ明遍僧都ハコノ記ヲ披見シ玉ヒ。隨喜ノナミタ
ヲナカシスナハチ御カギアレシ所ノ善導大師ノ半金色ノ繪像ナレハ
各称名モロトモニ拝礼ヲトケラレヨ

③ 「善導大師半金色繪像緣起」

卷子装一巻・縦二九・一／未装／4386 目錄 No 46

抑・是掛奉ルハ・善導大師・半金色ノ御姿ニテ・高野山・明遍僧
都ノ御筆也・其由来ヲ尋ルニ・有夜・元祖・法然上人夢ニ見玉フ処ノ
御姿ナリ・頃ハ・安元・元年三月十四日ノ・事ナリシガ・西ノ方ヲ見
玉ヘバ・紫雲・飛來テ・雲ノ中ヨリ一人ノ僧出テ・法然上人ノ処ニ來
玉フ・腰ヨリ下ハ・金色ニシテ・腰ヨリ上ハ・墨染ナリ・誰人ニテ・マ
シ／＼候ゾヤト申シ給フ・此僧答テノ玉ハク・我ハ是・善導ナリ・汝
ゾノ教ヘ・専修念仏ヲ弘ル事・我心ニカナヘリ・故ニ來也ト見玉ヒ
テ・夢覺畢ヌ・依テ・夢ニ見玉フ所ヲ繪書玉フ・是ヲ・世ニ・夢ノ善導
トイヘルハ是ナリ・周礼ニハ・夢ハ・事シルシナリトテ・御筆アラレシ
所ノ・善導大師・半金色ノ御姿ナレバ・各々称名モロトモ大切ニ拝礼ヲ
イサレヨ

④ 「善導大師半金色緣起」

・縦一六・〇／未装・別本貼付／4386 目錄 No 47

善導大師半金色緣起(外題)

抑・是ニ掛奉ルハ善導大師半金色御繪相ハ高野山明遍僧都ノ御筆ナ
リ・右此来由ヲ窺・奉ルニ・或夜元祖法然上人ユメニ見玉フ所ノ御
姿ナリ・頃ハ安元元年三月十四日ノ事ナリシカ・一ノ大山アリ・峯
高フシテ西ニムカヘリ・前ニ大河アリ・河原砂々トシテカギリナシ・
林樹渺茫トシテ限数ヲシラス・半服ニ登玉ヒ西ノ方ヲ見玉ヘハ・空中
ヨリ紫雲トビ來テ法然上人ノトコロニイタル・希有ノ思ヲナシ玉フニ
紫雲ノ中ヨリ无量ノ光ヲ出又ソノ光ノ中ヨリ白鶴孔雀鸚鵡等ノ鳥ト
ビ來テ河浜ニ遊ゲス・身ヨリ光ヲ放テ照耀キワマリナシ・ソノ衆
鳥トビノボリテ紫雲ノ中ニ入ヌ・マタ雲ノ中ヨリ一人ノ僧出テ法然上
人ノ所ニ來リ玉フ・腰ヨリ下ハ金色ニシテ腰ヨリ上ハ墨染ナリケレ
ハ・誰人ニテ在・候ソヤト合掌シテ申給ハク・御僧答テノタマハ
ク・我ハコレ善導ナリ・汝ノ教専修念仏ヲ弘ルコト我コ・ロニ叶ヘ
リ・故ニ來ルナリトノ給リト見玉ヒテユメサメヲハンヌ・依テ夢ニ
見玉フ所ヲ圖セシメコレヲ世ニユメノ善導トイヘルコレナリ・其御面
像唐朝ヨリワタリ玉ヘル善導大師ノ影像ニ少シモ違サリケリ・実法然
上人ノ御勸・善導大師ノ尊意ニカナヘルコトアキラカナリ・周礼ニハ
夢ハ事ノ祥ナリ・前兆ムナシカラン・マコトニ法然聖人ノ御ス、メ四
海ニミチテ・誰ノ人カ信受セサラン・高野ノ明遍僧都ハコノ記ヲ披見
シ玉ヒ隨喜ノナミタヲナカシ・即御筆アラレシ所ノ善導大師ノ半金
色ノ繪像ナレハ各・称名モロトモ拝礼ヲトケラレヨ

貼附紙

善導大師半金色

抑是二掛奉ルハ善導大師半金色ノ御姿タニテ高野山明遍僧都ノ御筆也其由来ヲ尋ヌルニ有夜元祖法然上人夢ニ見玉フ処ノ御姿也頂ハ安元元年三月十四日ノ事ナリシカ西ノ方ヲ見玉ヘハ紫雲飛来テ雲ノ中ヨリ一人ノ僧出テ法然上人ノ処ニ来リ玉フ腰ヨリ下ハ金色ニシテ腰ヨリ上ハ墨染ナリ誰人ニテ在シ候ゾヤト申給ク此僧答テノ玉ハク我ハ是善導ナリ汝チノ教ヘ専修念仏ヲ弘ムル事我心ニカナヘリ故ニ来ルナリト見玉ヒテ夢覺畢ヌ依テ夢ニ見玉フ所ヲ繪書玉フ是ヲ世ニ夢ノ善導トイヘルハ是ナリ周礼ニハ夢ハ事ノ祥ナリテ御筆アラレシ所ノ善導大師ノ半金色ノ御姿タナレハ各々称名一

⑤ 「善導大師半金色縁起（外題）」

一紙卷・縦二五・四／未装／43838 目録No 48
善導大師半金色縁起（外題）

抑是二掛奉ル善導大師ノ半金色ノ御絵ハ高野山明遍僧都ノ御筆ナリ此由来ヲ窺奉ルニ或夜元祖法然上人ユメニ見玉フ所ノ御姿ナリ頃ハ安元元年三月十四日ノ事ナリシカ一ツノ大山アリ峯高フシテ西ニムカヘリ前ニ大河アリ河原砂ミトシテ紫雲飛来テ法然上人ノトコロニイタル希有ノ思ヲナシ玉フ其紫雲ノ中ヨリ一人ノ僧出テ法然上人ノ所ニ来リ玉フ腰ヨリ下ハ金色ニシテ腰ヨリ上ハ墨染ナリケレハ誰人ニテ在ソト合掌シテ申シタ

マハク御僧答テ曰我ハコレ善導ナリ汝ノ教専修念仏ヲ弘ルコト我コ、ロニ叶ヘリ故ニ来ルナリトノ玉フト見玉ヒテユメサメオハリヌ依テ夢ニ見玉フ所ヲ図セシメコレヲユメノ善導トイヘルハコレナリ高野ノ明遍僧都ハコノ記ヲ披見シ玉ヒ隨喜ノナミタヲナカシ即御筆アラレシ所ノ善導大師ノ半金色ノ絵像ナレハ各々称名モロトモニ拝礼ヲトケラレヨ

⑥ 「〔善導大師半金色絵像縁起〕」

卷子装一卷・縦二五・六／未装／43838 目録No 49

此処ニカケ奉ルハ薄絹ノ内ニ安置シ奉ルハ・法然上人夢想感得ノ御影ト称シ奉ル・其由来ヲ奉レ伺ニ・本願寺第九世・実如上人・文龜二年壬戌八月九日夜・靈夢ヲ觀シタマヘリ・一人ノ御僧・墨染ノ衣ヲ着シ・実如上人ヘ告タマフヤフ・汝・浄土真宗・相承血脈シテ・信心為本ノ旨ヲ教ヘ・末世衆生ニ説聞シムルコト・実ニ・蓮如上人ノ化導ニ少シモタガハズ・弥陀本願艸ノ風ニ靡クガ如ク・真宗繁昌・我心ニカナヘリ・故ニ二十万億西・安養淨刹ヨリコ・ニ来レリト告タマヒテ・夢覺畢ヌ・実ニ奇意ノ思ヒヲ成タマヒ・自ラ御染筆アラセラレ・年月夢想ノ詛ヲ記シタマヒ・御本山・御宝蔵ニ御秘蔵ノ所、故アリテ・聖徳寺第十世・顕清律師ヘ・御附屬アラセラレシ夢想感得ノ御影ナレバ・大切ニ拝礼

X 火中出現阿弥陀如来繪像緣起

① 「火中出現阿弥陀如来繪像」

一紙卷・縦二八・四／未装／43836 目錄No 50

是ニ掛奉ル阿弥陀如来尊像ハ蓮如上人御筆にして如信上人ノ御前カ画ナリ此ノ来現ヲ伺ヒ奉ルニ万治二年頃聖德寺火サヒノ時炎ネンドウ／＼トモエ立ホノオノ中ヨリ飛出玉ヒ門前松ノ枝ニ縣リ光明カクヤクト御座アラセ玉フ諸人はヲ拝シテ奇異ノ思ヒヲナス事云ヘカラスヨリテ火中出現ノ阿弥陀如来ツヤヒ拝以奉ル世ニタグヒナキ処ノ靈現アラタナル尊像以慎テ称名モロヒニ拝礼セラヨ

② 「蓮如筆阿弥陀如来繪像緣起」

卷子装一卷・縦二五・〇／未装／43564 目錄No 51

是ニ掛奉ル・阿弥陀如来ノ尊像ハ・蓮如上人ノ御筆ナリ・此由来ヲウカ、ヒ奉ルニ・万治二年ノコロ・聖德寺火サヒノ時・炎ネントウ／＼トモエ上ル・ホノオノ中ヨリ・飛出玉ヒ・門前ノ松ニ掛リ・光明カクヤクトシテ・御座アラセ玉フ諸人はヲ拝シテ・奇意ノ思ヲナス事云ベカラズ・依テ聖德寺ニオイテ・火中出現ノ阿弥陀如来トウヤマヒ奉ル・世ニタグヒナキ処ノ・靈現アラタカナル尊像ナレハ・オノ／＼称名モロトモニ拝礼トケラレマセヨ

③ 「阿弥陀如来繪像緣起」

二紙卷・縦二六・九／未装／43837 目錄No 52

仰是ニ窺奉尊ハ方便法身ノ阿弥陀如来也其由ヲ云ヘハ祖師聖人ノ弟閑善法師ノ末弟聖德寺九代目ノ院主蓮如上人御旧地巡拝ノ砌聖德寺九代目ノ院主〇蓮如上人ヘ御帰依仕奉御未寺ト相成蓮如上人深ク御満足ノ余リ御自ラ阿弥陀如来尊像并六字ノ名号ヲ御染筆有セラレ聖德寺ヘ御付属遊ハサレ夫ヨリ伝来ノ尊像也然ルニ万治二年ノ頃聖德寺類焼ノ砌ドウ／＼ト願ヘ上ル炎ノ中ヨリ飛出玉ヒ門前ノ松ニカ、リ光明赫耀トシテ御座アラセ玉フ諸人はヲ拝ノ喜意ノ思イヲナスコト云ヘカラス依テ聖德ニオイテ火中出現ノ阿弥陀如来ト称シ奉ル類イ希ナル靈像ナレハ各々称名諸共拜ヲ遂ラレマシヤウ

XI 親鸞木像、遺骨緣起

① 「祖師聖人御遺骨緣起」

一紙卷・縦二六・一／未装・桃色紙・界線／43830 目錄No 53

祖師聖人御遺骨緣起（外題）

檀上宝塔ニ奉敬ハ祖師聖人ノ御遺骨ナリ其由来ヲ尋奉レハ聖人御年廿九歳六角精舍救世觀世音菩薩ノ告命ニヨリテ法然聖人ノ弟子トナリ專修念佛ノ一行ヲ勸メタマフカ御身ノ科トナリ御年三十五歳承元元年三月十五日住ナレタマフ都ヲ空ヲアトニシテナシ追捕ノ官人ニ被送越後国々府ヘ御流罪ノ御身ト被為成然ルニ仏法氣ノナキ土地ナレハ邪見无法ノ者ハカ

リ謗ル者ハ多ク信スル者ハ少ク尔レトモ仏法弘通ニ身ヲヤツシ衆生済度ニ心ヲ碎^{クサ}キ雪ヲシトネモ御厭ナク弥陀ノ本願専修念仏ヲ説聞シメタマフニ疑フモノハ必執信謗者モ却テ弟子トナリ稲麻竹葦ノ御繁昌中ニモ聖徳寺開基ハ甲斐國ノ領主小笠原左衛門尉長頭カタシケナクモ皇太子ノ御告ヲ蒙出離ノ一大事ヲ問ハヤト妻子所領モ皆打捨テ越後國ニ至聖人ニ奉謁リ本願他力ノ理ヲ聴聞シテ立所ニ他力撰接ノ得旨趣聖人ノ御弟子トナリ関東御化導ノ中暫クモ離レタマハス常隨直近シ美濃國大浦迄御供シ聖人聖徳寺ヲ御建立被遊伝灯ニ止リ其後星霜ヲ経テ弘長二年^{戊戌}應鐘廿八日哀成哉前念命終ノ御往生ヲ遂タマヒ延仁寺ニ葬シタマヒシニ聖徳寺開基閑善上人御遷化ヲキ、打驚急キ上京シケルニ漸^{ヤウヤウ}御茶毘ノ処へ着シ恋慕涕淚難止衣ノ袖ヲシホリ漸^ヤアリテ遺骨拾テ同山ノ麓鳥辺野ノ北ノ辺大谷ニ納メタマフニ御遺物トシテ閑善上人へ被下ケル祖師聖人ノ御遺骨ナレハ満九十年ノ御苦勞^{ロウ}ノ昔ヲ思ヒ直々対面ノ心地シテ大切ニ拝礼

② 「親鸞木像縁起」

卷子装一卷・縦二四・六・未装／＼ヨソヨソ 目錄No 54

檀上御厨子ノ内ニ安置シ奉ハ、祖師聖人御直作^{ジキ}ノ尊像ナリ、抑・其由来ヲ伺ヒ奉ルニ祖師聖人御歳廿九歳、六角堂救世觀世音菩薩ノ御告ヲ蒙リ、吉水・法然聖人ノ弟子トナリ、専修念仏ノ一行ヲ勤^{イト}メ玉ワガ御身ノ科トナリ、承元元年三月十五日住馴^{ヌル}レ給フ都ノ空ヲ跡^{アト}ニナシ、越後ノ国府へ御流在ノ御身トナラセラレ、大津打出ノ浜へ出玉ヘバ、日頃・御教化ヲ

蒙リシ・洛中洛外ノ御門葉、是レ今生ノ暇乞^{イトギ}トナゲキ悲シメバ、聖人モトモニ涙^{ナミダ}ニクレ玉ヒ、是々、都ノ同行ヨ・必念仏忘ルナヨ・他力回向ノ御信心、一味ノ了解テ有ルナラバ、へわかれ路^{ミチ}ば都越路^{ミヤコワシ}とへだつれどこ、ろはおなじ花の浄土へと」今日ハナヒテ・別レテモ・翌日ハ蓮華ノ其上デ、笑^{ワタ}テ二度ノ対面ヲ待ヨリ外ハナキモノト、涙ナカラニ・別^{ワカ}レ玉ヒ、仏法弘通ニ身ヲヤツシ、衆生済度ニ心ヲ碎^{クサ}キ、トフヅ・越後ノ・国府へ御着トナリ、五年ノ間ハ・勅勘有髮鬢^{ウハツビ}モ・ツモリモ、スラセラレズ、愚禿^{トウ}ノ御身ト・御ヤツレナサレ、実ニ思ヘハ・勿体ナヒ天津児屋根ノ御末孫^{マツシ}、藤原氏ニ御誕生、栄花榮耀ノ御身ノ上、綾ヤ錦デ身ヲマトハセラル、御方ガ、竹皮笠ニ竹ノ杖^{ツヅ}・ゴンズ・ハラジニ、ガマノハッキ、背^セハ負ヅル・ヲハセラレ、爰^{コノ}ノ辻堂^{ツツヂ}・彼^{カノ}ノキニ夜ヲ明シ、雪ヲ褥^{シト}ノ御艱難^{ガンナン}辛勞^{シンロウ}・身苦ハ御厭^イヒナク、他力本願ノ御法^{ホフ}リヲ説演^{トキ}ベ玉フニ、邪見ハ翻^{ヒルガエ}シテ弟子トナリ、謗^{ソル}ルモノモ・却^{カヘリ}テ信ヲトル、爰^{コノ}ニ宿善開発ノ時至ルニヤ、聖徳寺開基ハ・甲斐國領主、小笠原左衛門尉・長頭^{ナガヅキ}、忝^{カタク}モ・聖徳太子ノ御告ヲ蒙リ、出離^{シュリ}ノ一大事ヲ問バヤト、越後國ハオモムキ、聖人ニ謁^キシ奉リ、本願他力ノ理^{コト}ヲ聴聞シテ、立所ニ他力金剛ノ信心ヲ得テ、聖人ノ御弟子トナリ、從^レ夫関東御化導ノ内・暫^{シラ}クモ御側^{ソノバタ}不離常隨昵近^{ニシ}シ、聖人都ニ御帰リノ節、美濃國大浦ノ郷迄御供シ、聖人大浦ノ郷ニ暫^{シラ}ク留錫^{リウセキ}シ玉ヒ、聖徳寺ヲ創立シテ・閑善ヲ残シ玉フ、別^{ワカ}レヲ惜^シミケレバ御形見トシテ、鏡ノ御真影ヲ下サレ忝^{カタク}処、年々歳々年移リ、美濃國同行申ケルハ、折角^{セツカク}ノ御形見ノ御真影、老眼ニ

及ヒ奉^ル拜^シ事^ズ不^レ叶^ハ、聖人御存^{ジヤウ}生^ノ中、御直作^{ジキ}ノ御木像・願度旨^{グウ}・閑善御房^ゴへ頼^{タカ}ミケル、依テ右之趣・聖人ニ申上ケレハ、仏恩師恩ヲ思フユへ、カクハ願^{ハカ}ヒケルコソ真宗繁昌^{モト}ノ基^トヒナリ^ト連^ト、御彫刻^{チヤウ}アラセラレシ、鏡ノ御真影^{ヲシカハリ}・御替^{ヲシカハリ}ノ尊像ナレハ、六百有余年ノ故へ、満九十年ノ間歩^{カチ}行ヤハダシノ御化導ハ、外デハナヒ、今日在座ノ我々ノタメノ・御苦勞^ノト存セラレ、称名モロトモ謹テ拝礼

③ 「親鸞頂骨、親鸞木像、宣如頂骨縁起」弘化二年喜海写本

一紙卷・縦二六・七／未装／4383 目録No55

・宝塔ノ奉敬親鸞聖人乃御頂骨にて其由来を尋に小笠原聖徳寺閑基閑善御坊は閑東にて御弟子と成夫々祖師御帰洛之砌大浦まで御供いたし是にて聖徳寺を御建立住職をは閑善御坊を差置けるカル処閑善御坊祖師と御分申せ今年々歳々夢之如く劫しか早祖師聖人御事横生せらる頃は弘長二年壬仲冬下旬より師之御坊御病氣と承り早速上京いたし心はやたけにはやれともかなし事には閑善御坊老年之事故思ふ俣に道もはかとらす霜月廿八日午刻に祖師は御往生あわれなる其夜に入て閑善御坊漸々着いたし師之御坊御病体は如何にと御側さらすの真信坊哉蓮信西仏落る涙を瞳て扣き閑善御坊御円の薄さよ御師匠は今日九時御往生も聞と閑善大地に伏てやれ／＼果報つたなき我身哉遙々之処漸登るから御存生之尊顔を拝する事も叶わす残念也と地に転ひつこけつ涕泣いたすを覚信尼公あわれに思召閑善御坊々々今去に嘆てかいなき事幸に上

京之事故明日葬送し御送いたすへしと則よく日御裁或てあひたてまつり殊^{コト}に帰国之砌御頂骨を拝領いたし

○此御木像ノ由来ヲ奉敬^{タツネ}親鸞聖人ミノ国大浦ニテ暫御化導アソハサセラレ則御帰洛ノ砌り真ノ御陰ヲ鏡ニウツサセラレ是閑善御坊并ニミノ国ノ住人^{同行}ニ形見ニ下サレケルカル処年々歳々月替り歳積り残年ナル哉折角ノ御形ミモ今ハヤ老眼ニ及ヒ拝シ奉ル丁モ叶ハス何卒祖師御存生ノ中目ノトホシキ老人共へ直々ノ御木像ヲ願度シト度々閑善御坊へ願ヒケルカ御坊モ今ハ我老眼ニ思当リ尤モ不便ト思レ早速致上京西ノ銅院^{ツツ}ニシテ遂拝顔ヲ老人ノ嘆ヲ申上ケレハ聖人キコシメシ誠ニ仏恩師恩思ヨリ我思陰ヲ慕事は寔ニ信者ノ顕レ成ト深ク御喜ヒアソハサレ折節相応木モナケレハ閑善御坊御庭ヲミルニ紅梅ノ朽木アレハ是ヲキリ取り差上ケケレハ直様御手ツカラ御彫刻殊ニ一首ノ御歌ヲ詠セラレテ曰ク時クレハ梅モ色香ヲ離レケリ木地ノ儘ニテ衆生化益ヲト是ヲ閑善御坊ニ給^{ガハ}ヘ玉難有キ余リ歎喜ノ涙トモ共ニ国元へ御供致サレタル御木像ナレハ眼ノトホシキ人々ハ鏡ノ御真影ノ御身替リノ御真影ト存セラレ

○宝塔ハ宣如上人御頂骨ニシテ其由ハ聖徳寺ハ親鸞上人ヨリ此方代々ノ

□□□御分骨ノ寺各故御宝塔物ハオヒタ、シク御座候へ此度ハ謂有テ宣如一ノ御骨斗り御真影ノ御供ト当ラセラ誠ニ御代々ノ御骨惣名代奉拜シ極楽海中御出現ノ御貴方モ末世ノ我人^ハノ御貴方ト存セラレ右此書一通り拝読之上ニテ文字文体仮名ノ穴凸ハ其時ノ縁記僧ノ気量一盃弁料タルヘキ丁

弘化二年乙巳曆弥生仲旬第五日

吉川

起宿瀧川行精舎而書之

喜海

④ 「親鸞木像縁起」

一紙巻・縦

／未装／43833 目録No 56

上檀御ズシノウチニアンチシタテマツルハ祖師聖人ノ御木像ナリ其由來ヲウカヒ奉ルニ聖徳寺ノ開キ閑善上人カントヲ御ケイガイノ節御供遊サレ其砌自ラコノ御木像ヲ御彫刻マシ／＼ケリスナハチ閑善ヘ御授与アラセラレケル尊像ナレハ六百年昔祖師聖人ヘジキ／＼ノ御対面モ同如ト存セラレヲノ／＼称名モロトモ大切ニ拝礼イタセラレヨ

XII 「濃州賀茂郡稲口村観音堂縁起」

① 「濃州賀茂郡稲口村観音堂縁起」寛文二年頼元写本

卷子装一卷・縦三七・一／未装／43834 目録No 57

濃州賀茂郡稲口村観音堂縁起

抑観音大士は大悲之薩埵也爰に頼元律師幼少の古一寸八分の観音像尾州富田寺内にしてひろひ求多年渴仰安置仕侍りし時に三屋村寺領堤敷替地の訴詔のために江城に下向す則明日 家光公江訴詔を催し侍る比は正保元年十月廿六日の夜夢想の告あり一人の老僧白き小袖に黒衣を着し頼

元枕本に立より給ひ明日の訴詔必定叶へし案堵仕れ則彼知行所に山あり汝此山に我を安置敬ひ奉れとあらたなる靈夢を蒙る是た、ことにあらすと思ひ驚いそきおきあかり頭をかたむけ右之観音を枕の本なる柱に懸おきしゆへ拝奉る所に脇に女人あり是も起上り唯今我も夢想之告ありと云如何ととへは右之夢想に少しもあひたかはす誠には新清水寺と名つくへきの趣是を示し給ふそれより三年之経て正保三年の二月八日に上聞に達し則此稲口村を給る示現の如く山有剩観音堂の古跡有こと寔に不思議なりし事共也可貴可信

寛文式念壬寅霜月十八日

柳洞院

表額筆者唐人元贊芝山書之

律師頼元

② 「濃州賀茂郡稲口村観音堂縁起」

二紙巻・縦二五・〇／未装／43840 目録No 58

濃州賀茂郡稲口村観音堂縁起

聖徳寺第十六世柳洞院殿

抑観音大士は大悲之薩埵也頼元律師幼少の古一寸八分乃観音像尾州富田寺内にしてひろひ求多年渴仰安置仕侍りし時に三屋村寺領堤敷替地の訴詔のために江城に下向す則明日 家光公訴詔を催し侍る比は正保元

聖徳寺第十六世柳洞院殿

年十月廿六日の夜夢想の告あり一人の老僧白き小袖に黒_カ衣を着し頼

元ノ枕本に立より給ひ明日の訴詔必定叶へし案堵仕れ則彼知行所に山あり汝此山に我を安置敬ひ奉れとあらたなる靈夢を蒙る是た、事にあらすと思ひ驚いそきおきあかり頭をかたむけ右之観音を枕の本なる柱に懸お

さしゆへ拝奉る所に脇に女人あり是も起上り唯今我も夢想の告ありと云
如何ととへば右之夢想に少しもあひたかわす誠には新清水寺と名つくへ
きの趣を示し給ふそれより三年之経て正保三年の二月八日に上聞に達
し則此稲口村を給る示現の如く山有剩観音堂の古跡有事寔に不思議な
りし事共也可貴可信

③ 「濃州賀茂郡稲口村観音堂縁起」

二紙巻・縦三一・八／未装／ネ 目録No 59

濃州賀茂郡稲口村観音堂縁起

抑観音大士は大悲之薩埵也聖徳寺第十六世柳洞院律師頼元一寸八分之観
音之像を腹籠に到し彫刻被有之候所靈像なり其来由は頼元律師幼少之古
より一寸八分之観音を渴仰安置奉りし所正保元年十月廿六の夜夢想之告
ましましけり一人の老僧白き小袖に黒衣を着し頼元枕本に立よりたまひ
告給ふよふは知行所に山あり汝此山に我を安置敬ひ奉れとあらたなる靈
夢を承る是た、ことにあらと思ひ驚きいそきおきあかり頭をかたむ
け右之観音を枕の本なる柱に懸おきし所光明かくやくとして拝奉る其後
知行所に至り巡見するに靈夢に少もたかわす観音の古跡ありよりて任靈
夢に此山に安置たてまつることに新清水となつくへきに趣を示し給ふが
如山之中段に古跡清水あり誠に靈瑞不思議之事也可貴可信

□□□□
□□□□

④ 「観音菩薩金銅像縁起」

卷子装一巻・縦三一・〇／未装／ノ 3564 目録No 60

檀上御厨子ノ内ニ安置シ奉ルハ。大慈大悲観世音菩薩ノ尊像ナリ。
其来由ハ当山十六世頼元律師黄金一寸八部ノ尊像ヲ。富田村聖徳寺境内
ニテ感得シ玉ヒ。恭敬尊重シケルニ其頃聖徳寺地領堤敷トナリ。替地
願ハシメ正保元年十月廿六日江戸表ニ下向ス。明日三代將軍家光
公へ願ハント欲スル其夜。夢想告ニ曰ク汝ノ願成就スベシ。其地ニ
我ヲ安置シ新清水寺ヲ号クベシ。頼元問曰御僧誰人ゾヤト。僧ノ曰我
ハ救世観世音菩薩ナリト。異香薫ジ光明赫ヤクトシテ御座アラセラレ。
奇意ノ思ヲナシテ夢覺畢ヌ。起出テ観音ノ尊像ヲ拝センセシニ。同
宿ノ者一同起出テ自カラ其夢ヲ語ルニ少モタガフコトナク。ソレヨリ
正保四年正月十四日美濃国稲口村ニテ寺領二百石。并寺地下サル。
依テ末世ノ衆生ヲ本地弥陀ノ淨土ヘ導キ玉ヘト。誓ヒコメテ一刀
三礼シテ千手観音ノ尊像ヲ彫刻シ。体内へ黄金一寸八部ノ尊像ヲ奉
レ納。稲口村新清水寺アンチシ奉ル尊像ナレハ。称名モロトモ。謹
テ拝礼

□□□□
□□□□
□□□□

右ノ尊像稲口村・安置奉ルトコロ天保八年酉年ノ大風ニテ堂宇タヲ

レ依^{当寺ニ}テ安置スル靈像ナレハ大切ニ拝礼